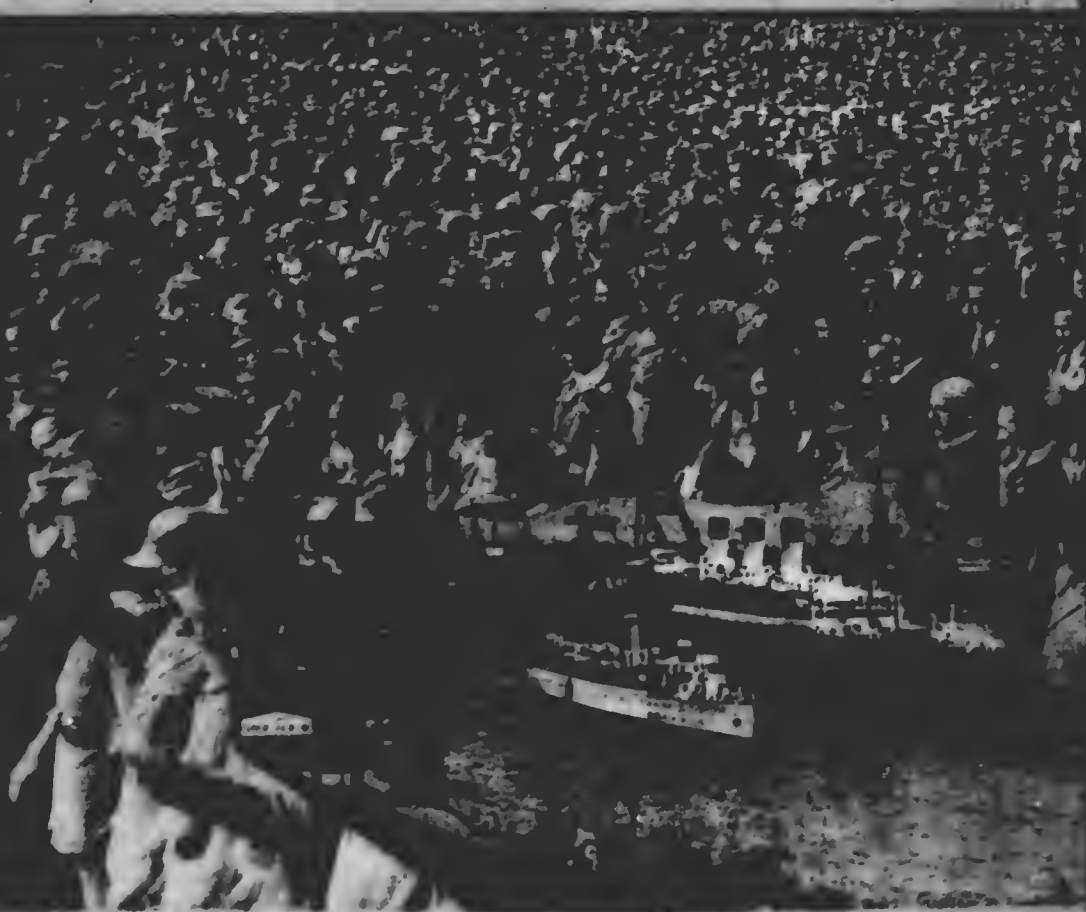
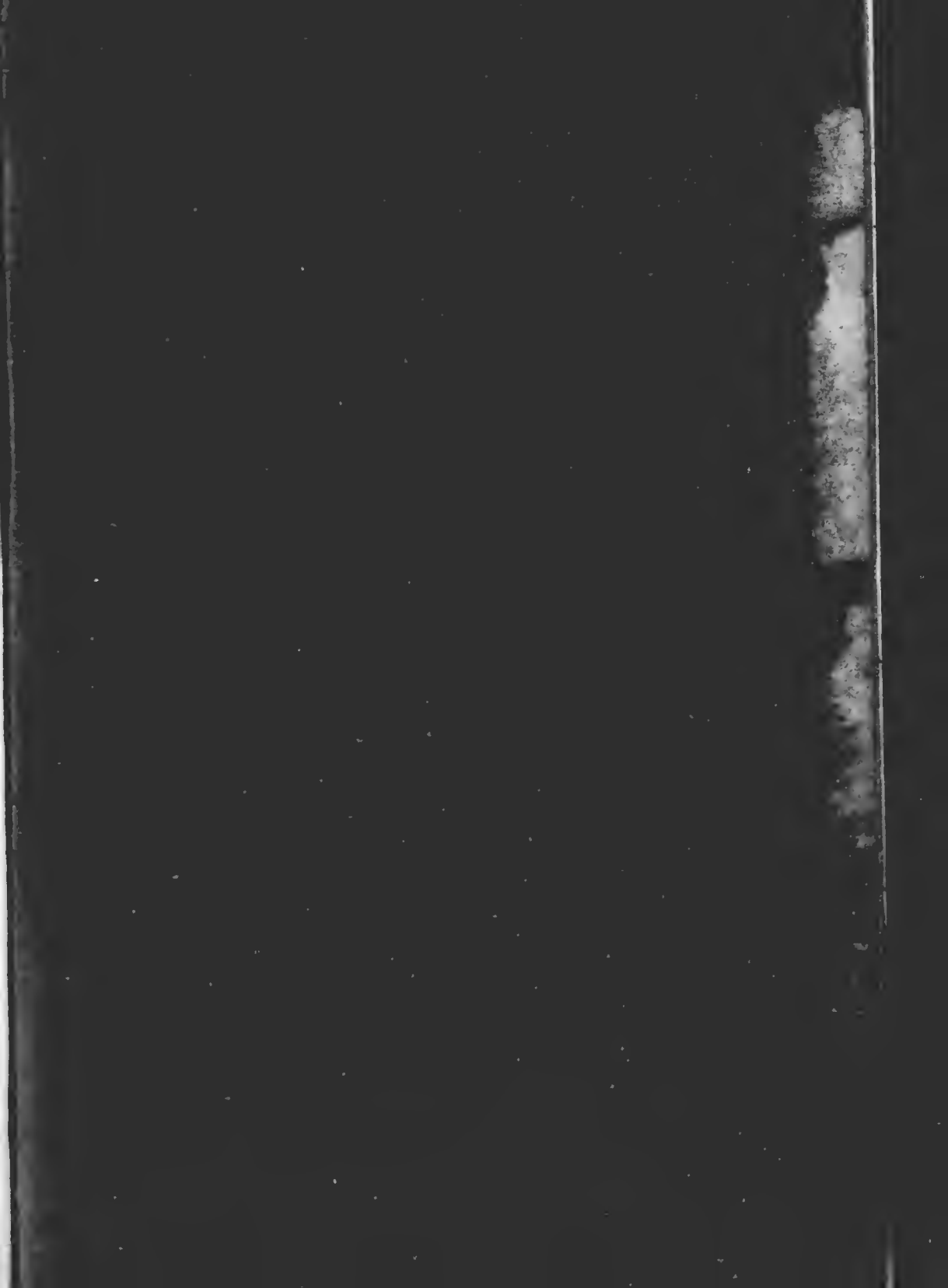


747
187

學！獨逸國民生活



第一卷 卷一 卷二 卷三 卷四 卷五 卷六 卷七 卷八 卷九 卷十







Die beste Sparkasse: Kriegsanleihe!

Autoren: G. Schmidt, Berlin 1941

「ノ 債公時戦は金貯の善最」
— タスホの逸獨の行發（日三十月四年八・九・）時當戰大洲歐



**Save a loaf
a week
help win
the war**

U.S. FOOD ADMINISTRATION

②一週にパンの一塊を節約せよ。戦の勝利を助くべし。
(大戦當時米國食料管理局發行の節約ポスター)



Sir-
don't waste while
your wife saves
Adopt the doctrine
of the clean plate
—do your share

UNITED STATES FOOD ADMINISTRATION

Stellt uns siegen!



zeichnet
die
Kriegsarbeit

- ①君よ、君の奥様が節約して居る時に、外で無駄食ひをしてはいけません。キレイに食べてしまふ習慣をお守り下さい。同じくあなたも。
(大戦當時米國食料管理局發行の節約ポスター)
- ③吾人に協力して戦に勝たしめよ、戦時公債に應募し給へ。
(一九一六年三月二十二日發行勸進公債募集用ポスター)
- ④アルミニウム製、銅製、黄銅製、白銅製、錫製の家具類は徴發さるべし。各人はこれを提供せよ。各市場、市役所に於て受付けらる。(一九一七年八月二十八日勸進のポスター)





Save
a
hel
th

C.N.M.

Se



11

內閣情報部長 橫溝光暉閣下序

森崎善一 著
鈴木計三 裝禎

學

！獨逸國民生活

東京 千峰書房發行



序

今日の輝く新興獨逸建設を成就されたヒットラー總統の偉業は、眞に世紀の驚異であり、全世界人の讃歎惜く能はざる所である。

この回天の大業はヒットラー總統の烈々たる救世の信念・偉大なる人格・政治的天才に因るものであることは勿論であるが、同時に背後の獨逸全國民が不撓不屈の獨逸精神を發揮したことを看過してはならない。

大戰後引續く國內の混亂・生活窮乏のドン底にあつても、獨逸國民は尙且獨逸精神を消盡せず、胸底に力強く活かしてゐた。全國民は奮起して一丸となり、その理想は火と燃え、意氣は天を衝くに至つた。是れ實に獨逸をして今日あらしめた原動力である。

翻つて帝國現下の國情を見るに、我が國は文字通り有史以來の國難に直面してゐる。假令百艱迫るとも、今にして宿年の禍源を杜絶するに非ずんば、東亞の安定は永劫に望み得ないのである。今次事變所期の目的を達成せんが爲には、物心一如の國家總動員態勢を一段と整備強化することが肝要である。

東亞の安定は永劫に望み得ないのである。今次事變所期の目的を達成せんが爲には、物心一如の國家總動員態勢を一段と整備強化することが肝要である。

正に國民の一人々々が思想戰の戰士として、將又經濟戰の戰士として奮起すべき秋である。統後國民の責務は愈々重きを加へて來た。われわれは眞劍に此の責務を自覺すると共に、衣食住の全般に亘り舊弊を打破して生活の刷新改革を斷行し、難局打開の決意を如實に示現せねばならない。

我が國と獨逸とは防共樞軸の一環として益々相互の提携を緊密にし、親善關係を増進しつつある。この盟邦獨逸國民の祖國に對する愛國の熱情並にその熱情より迸る實際生活の狀況を知ることとは、今日此の際我が國民にとつて大なる指針である。適々森崎君が健筆を揮つて本書を著されたことは、眞に時宜に適したことである。私は此の良書を得たことを喜び、敢て江湖に推薦する次第である。

昭和十三年七月七日支那事變一周年記念の日

内閣情報部長 横 溝 光 暉

序

自國に長所のある如く、他國にも亦長所がある。本書は盟邦獨逸國民の優れたる實生活の狀態について、勞働、休養、娛樂、社交、保健、衛生、精神生活の問題から、家庭に於ける合理的な消費節約等の事柄を、極めて實際的に紹介することに努めた。

街も村も、老人も青年も、國民の全部が合理的な實生活を営む點に於て、獨逸國民に及ぶものはあるまい。

憶へばあの、歐洲の大戦に、あらゆる困難と戦つた獨逸國民は、眞に一個の角砂糖、一粒の麥の尊さを知る國民である。

しかし、それは單に、獨逸國が天然の資源に恵まれないと云ふ理由ばかりではなく、國民の總てが、祖國獨逸を眞に隆興國家たらしめたいと云ふ、愛國の熱情が、國民の實生活の上に一つの信念となつて具現されて居るからである。

従つて獨逸國民は、獨逸國の一員、獨逸國家の一家庭と云ふ強い自覺に依つて生活するのである。だから、國民は今尙減食デーを實行し、たとへ一つの物資を消費する場合でも、それが國家の物資であることを深く念頭に刻んで居るのである。

たから、國民は今何處を實行し、たとへば一つの事實を實行するに、あることを深く念頭に刻んで居るのである。

國家のためとあれば、好きな獸肉の常食も廢して、自ら進んで北海の鰯を常食することに少しの不
平も持たない國民である。

此處に獨逸國民の偉大さがあると共に、獨逸國家の強さがある。

凡そ「國民の實生活」などの問題は、從來これを取扱ふ者もない程、それ程に一般の世の中は實生活の問題に對して、實際から遠ざかつて居る。此處にその國家の、社會の、家庭の、個人の不健全の原因が存在するのではあるまいか。

一國の政治も、社會の問題も、個人の生活も、寸時も生活から、離れて存在しないと同時に、その國の財政も、經濟も、總て國民生活が基調となつて、その數字が生れて居ることを知らなければならぬ。全國民が毎月一圓を節約してこれを貯蓄することに依つて、一ケ年に十二億と云ふ巨額が國庫の運轉資金となるのである。しかもその巨額は、國民の實生活の足許からホンの一寸した心掛に依つて生れもし、亦浪費ともなるのである。國民一人一圓の浪費は實に十二億圓の浪費となるのである。

今や重大時局下の我が政府が消費節約、貯蓄獎勵を叫びつゝあるのも亦實に此處にある。

「愛國の熱情は、單なる言葉でなく、これを實行に移さなければならぬ。」

一時的の炎と燃へ去る熱情は、時の経過と共に、それは一魂の灰として残るばかりである。國民の實生活等の問題も、單にこれを口にするばかりでなく、これを日常生活の上に一つの習性として、觀

から子へ、子から孫へ傳へ、これが一つの家風となり、社會風潮となり、未來永劫に我が國のよき國風、國民性とならなければならないと思ふ。

しかしそれは、單に消費節約、無駄排除の問題ばかりではない。勞働に、休養に、衛生に、保健に、娛樂に實生活上の總てについて、眞に正しくなごやかな生活、習性を養ふと共に、各人が、生活を客觀的に經營する態度にまで進まなければならないと思ふ。

祖國日本は、今實に重大なる時に直面して進んで居る。今こそ國民は眞に正しい實生活の習性に徹し、舉國一致、國家の大目的に向つて協力しなければならない時である。

勇士は戦線に、青年は街頭に、母は家で各々その屬する業務の上に最善を盡さなければならない。幸ひ本書が、日常の生活上についてウカツに遇して居たことを思ひ出させ、それが讀者の實生活の上に資することがあれば筆者望外の幸せである。

終りに種々御指導を頂いた横溝閣下に深甚の謝意を捧げて筆を擱く。

東京 荻窪の自宅にて

森 崎 善 一

學べ！獨逸國民生活

一、興隆國家獨逸國……………(一)

フランスも、イタリーも祖先是獨逸、—ナポレオンの大軍に破れた獨逸、—オーストリアの雪辱戰—ヒットラーの第三國家建設へ。

一、大戰に苦しまれた獨逸國……………(四)

世界を相手に連戰連勝、しかも獨逸は破れた。

一、戰線で勝つて銃後で敗れた……………(六)

聯合軍の宣傳—宣傳に破れた獨逸國內、—ルーデンドルフ將軍とヒンデンブルグの嘆息—國內擾亂。—銃後の崩壊。

一、當時獨逸の國內情勢(一)……………(八)

國內擾亂—同盟罷業—暴徒—赤化の魔手、支那事變と日本—赤化思想を警戒せよ。

一、當時獨逸の國內情勢(二)……………(二)

パンも無くなつた—肉も欠乏—國民は餓へた—人造肉の製造—粘土の石鹼

一、戦に敗けてはならぬ……………(二三)

ベルサユ條約は獨逸の手も足も切り取つた——獨逸政府涙の聲明書——大戦で獨逸は何を失つたか——支那事變と日本——國民の覺悟

一、戦後の國民生活……………(一六)

マークの大崩落——當時獨逸大臣の給料——乳も出なかつた母親——國民の榮養不良——病者の續出——婦人の流産——豚の脂をナメて

一、ヒツトラー現はる……………(一八)

「國亂れて英傑出づ」——獨逸國民生活十訓。

一、獨逸とお金……………(二〇)

海外旅行者に十マーク以内の制限——パリ博の話——一錢の金も國外へ出さない——しかし労働者の給料一日十圓見當——節約と貯蓄。

一、獨逸國民の公德心……………(二三)

街路の林檎——公園の樹木——獨逸の子供に叱られた日本の紳士——乗物の中——改札場——自動車の運轉手。

一、獨逸國民と時間……………(二六)

一、獨逸國民と時間……………(二)

正確な時間の觀念——約束は總て時間で——五分前に渡場へ来る友人——會合の時間は嚴守——時間の活用。

一、獨逸國民と電燈……………(二)

電燈を消して廻る獨逸の技師長——必要な箇所は惜氣なく明るい電燈——獨逸の下宿のおかみさんの話——明るい獨逸の驛札——日中門前に點いて居る日本の電燈。

一、獨逸國民と紙片(一)……………(三)

獨逸畫家の紙片の利用法色々——獨逸本國から来る封筒の裏返し——一寸平方角の紙片。

一、獨逸國民と紙片(二)……………(三)

一寸平方の紙片を節約すれば、驚くべきこの數字——尊い教材——ペン屑の利用法——廢物更生の道。

一、獨逸國民と鉛筆……………(三)

萬年筆を使はぬ獨逸人——最後まで使ふ鉛筆——鉛筆屑も粗末にせぬ獨逸人——日本小學生の文房具の亂用。

一、獨逸人とマツチ……………(三)

マツチ一本に對するこの注意——一本のマツチで五人の水兵——マツチ一本を節約すれば此の數字となる。

一、獨逸人とバナ、の皮……………(四)

バナ、の皮を捨てない獨逸の少年—リンゴ、梨の皮や心も捨てない—榮養はむしろ皮にある。

一、獨逸の住宅……………(五)

石と煉瓦の家—アパート式住宅—家庭の整頓—什器調度を大切にする—獨逸大使館の什器。

一、獨逸の主婦……………(六)

女尊の國—日本の武官の弱つた話—「嫁に貰ふなら獨逸の女を」—よく働くこと世界—家事計畫—毎日の仕事表—一週一回の大掃除、—洗濯日—よく働きよく休養する。

一、獨逸の訪問日……………(七)

訪問日の定め、面會日—洗濯日—散歩の時間—家庭日—族家の夕べ—招待の時間不意の來客には茶も出さぬ。

一、獨逸の下女……………(八)

下女の働き、合理的な家事—主婦は下女の人格を尊重—夜間は民衆大學へ。

一、獨逸の婦人と化粧……………(九)

下女の働き、合理的な家事——主婦は下女の人格を尊重——夜間は民衆大學へ。

一、獨逸の婦人と化粧

(五)

化粧の出来ない獨逸の法律——化粧美よりも健康美——世界一健康美の獨逸婦人——健康美の母——クリームとチツクで化粧する日本の青年。

一、獨逸婦人の活動

(五)

オリムピツク映畫と、リーフエンシユタール女史——あらゆる職場で——しかし最後はよき母に——結婚と國家の補助——婦人は總ての男性を教育せよ——婦人は一人残らず民族の母である。

一、獨逸人と食事

(天)

粗食——粗食と榮養價は別——日常食——食べ残しがなく、材料の活用——食事の節約も國家の立場で——日本の台所の屑籠——年四百萬圓が屑籠から

一、獨逸人の榮養

(六)

獨逸の魚高等學校、野菜高等學校——美食かならずしも榮養でない——鰯よりも鰯を——食事は粗末でも榮養價は満點——野菜主義のヒットラー——總統——禁煙、禁肉、禁酒——獸肉を止めて魚肉と野菜食に——鰯一鯨の榮養は牛肉三十七鯨に匹敵。

一、獨逸人と辨當

(三)

獨逸人と手辨當——日本の都會地勤務人の晝食——手辨當獎勵——小學生の辨當——我が國民體力低下の一因。

一、獨逸人と料理 (六)

一つの材料を色々に料理と生活―我が農村の料理改善

一、獨逸人とお茶 (六)

その人の好む濃さに―角砂糖の節約―台所の天秤計り―限られたものを如何に活用するか。

一、獨逸人と煙草 (七)

一函のバットを三十本に―執務中絶對禁煙―喫煙の時間を定めよ。

一、獨逸人とビール (七)

獨逸はビールの本場―よく飲む獨逸人、ビールはサイダの觀念―酔つても禮儀を忘れず―ビールの空瓶を賣る獨逸の船員

一、獨逸人と服裝 (七)

質素、清潔、調和、―自家製の服―合服合オーバーは贅澤―國民服はどうか。

一、獨逸人と洗濯と衛生 (七)

毎月曜日の洗濯―洗濯物のない獨逸船―總て自分の手で―衛生に注意―日光に對する考へ方―細菌に依る實驗

毎月曜日の洗濯—洗濯物のない獨逸船—總て自分の手で—衛生に注意—日光に對する考へ方—細菌に依る實驗

一、獨逸人と清潔と衛生 (八〇)

獨逸の街—家庭—小學校の清潔検査—身邊の清潔—我國の學校衛生、家庭の協力が足りない。

一、獨逸人と整頓 (八三)

整理の天才—家庭の整理—事務の整頓—炊事場—市街町の番地。

一、獨逸人と勞働 (八五)

勞働は人間の責務—起て働く獨逸の工場—勞働時間と休時間—休時間に勞働を許さぬ—勞働の神聖化。

一、獨逸人と休養 (八七)

休養は思ひ切り充分の休養—郊外へ—田園へ—全家族擧げて休養—新しい力を養つて又次へ—休養も一つの鍛鍊

一、獨逸人と娛樂 (九〇)

老博士のピアノ、家庭の娛樂—歌ふ母踊る子供—獨逸の音樂—獨逸の舞踊—明朗な家庭—家庭娛樂の強調。

一、獨逸人と花 (九三)

「窓に花を！」—政府の花に對する訓令—日曜も開店を許される花屋—うるほひのある人生へ—花を愛する心—花店の各國連絡組織。

一、獨逸人と自然

森を愛するゲルマン民族—獨逸で有名なワングフオゲル（渡り鳥）—青年と自然—古蹟を巡つて祖國を認識—獨逸人の祖國愛はこれから—互に抱き合つて進む國民—大和民族の血は世界一純潔である—お互は他人ではない。

一、獨逸人と大形時計

祖父の大形時計を自慢—傳統を尊ぶ—日本の村長さんの金時計—上等兵が國へ歸つても嫁の居ない村—その子—村の疲弊の原因—徒らに歐化の弊害。

一、獨逸人と靴

破れをツツクで修理—東京大森學園の兒童—讀賣新聞の女性の立場欄から—日本の女學校と制服問題—小學校の文房具問題—家庭の無自覺。

一、獨逸人の廢物利用（一）

一度讀んだ書物を本國へ—船の中に豚を飼ふ心得—船着き場のゴミ捨場から澤山の素材—靴下の廢物で袋を。

一、獨逸人の廢物利用（二）

一、獨逸人の廢物利用(二)……………(一〇五)

獨逸の家庭心得―戰時の物資の需要、事變下日本はどんなものを更生させなければならぬか。

一、獨逸人と機械……………(二〇)

機械を愛す獨逸人―バスの運轉手の心掛―獨逸人と印刷機械。

一、獨逸人と油……………(二二)

油を大切にする獨逸人―一滴を活用―事變下日本と油―我が國の油の輸入高。

一、逸逸人と石炭……………(二三)

石炭と焚き方―日本の錢湯と石炭―木炭と役所―經濟無視のビルディングのステーム。

一、獨逸人と水……………(二六)

水を買入れる獨逸の汽船の話―自分の用水は水道まで―水を大切に―水の道德

一、獨逸人と木屑……………(二八)

木屑を拾ふ獨逸の船員―石炭の節約量増大―北海道のコハゼ運動―獨逸人の中古ムシロ買入れ

二、獨逸人と勤儉貯蓄(一)……………(三三)

獨逸の下宿で、捨ると云ふことを知らぬ婦人―破れた靴下とワイシャツ修理―獨逸政府の公債と國民の貯蓄―國家のために

一、獨逸人と勤儉貯蓄 (二) (二三)

獨逸の復興力―事變下日本の貯蓄の必要―收入を他へ轉化すると―國家の血のめぐりを悪くする―外國爲替と貯蓄。

一、獨逸人と勤儉貯蓄 (二) (二六)

國際的信用と貯蓄―節約と輸入制限―國內産業の振興―外國へ金を出さない工夫―戰ふために貯蓄はぜひ必要だ―貯蓄して戰後に備へよ。

一、獨逸人と權利義務 (二九)

日常生活の上にも―約束以外は一錢も受けぬ―日本式特有性―レストランの出來事―獨逸の社會正義―道德―國民性。

一、獨逸人と禮儀 (三一)

長上に對して―電車の中で―招待された料理―筆者の失敗談。

一、獨逸人の勤勉 (三三)

一日を三十時間に―時間の活用―面會時間は簡單に―能率と時間。

一、獨逸人の研究心 (三五)

一日を三十時間に——時間の活用——面會時間は簡單に——能率と時間。

一、獨逸人の研究心……………(二三)

ツエツペリン飛行船——人の居ない工場——人造肉——豆軍艦——バケツ、ハサミの目盛り——石鹼と海外輸出の逸話

一、獨逸人の教養……………(二六)

レストランのボーイ、下宿の女——友人と新しい空氣——獨逸の民衆大學——國民の藝術鑑賞。

一、獨逸人と健康(一)……………(二八)

健康と國家——人生——世界一病者の多い日本——缺食兒童——健康運動に民間も協力せよ。

一、獨逸人と健康(二)……………(四三)

獨逸の結核患者激減——保健施設

一、獨逸人と健康(三)……………(四五)

氣候不順の獨逸國——醫師の多い日本——健康生活の習性へ——惠まれた者の不幸——大自然の活用。

一、獨逸の文化……………(四八)

優れた獨逸の文學、醫學、音樂、繪畫、化學——國民の文化鑑賞力——下宿の夫婦——音樂と學問の國——文化と技術の國。

一、獨逸の力……………(二五)

粘り強さ—ムツソリーニの讀辭—ナポレオンの大軍に破れ—ウオーターロウで雪辱戦—熱血兒ヤーン—獨逸の國民體操—獨逸第三國家建設へ！。

一、獨逸精神……………(二五)

「一男子の一言」と云ふ獨逸の言葉—獨逸の社會秩序—より精神の尊き者を尊しとする—外形より内容へ—恐るべき外形化の社會—日本精神を取戻せ。

一、オリムピック餘談……………(二五)

ヒットラー總統の訓示—獨逸の觀光地—日本婦人の醜態—日本觀光地の不備。

一、パリ博と獨逸の出品……………(二五)

獨逸國尊嚴のために—飛行機で人夫を二百人—會場第一の獨逸出品—日本の出品—文化宣傳の重大性。

一、獨逸國バワリヤの山莊より……………(二五)

獨逸より筆者へ通信。

一、道傍の並木は皆果樹……………(二六)

フオン・ファアゼル氏の山莊へ—空地を活用せよ。

一、一木一樹毎く造林……………(一六)

フアゼル氏の生活―獨逸の山林は皆植林―日本の農家は山林を放任するな。

一、飛び交ふ小鳥の囀り……………(一七)

フアゼル氏と小鳥論―小鳥と日本の農家―日本も小鳥の巢を造れ。

一、小鳥は農家の守り神……………(一八)

フレデリック大王と小鳥―害蟲を喰ふ小鳥―作物と小鳥―山林と小鳥―作物の被害は小鳥で救へ―世界に於ける小鳥愛護運動―稻と小鳥

一、鳥は害蟲驅除の専門家……………(一九)

一羽の小鳥が食ふ害蟲の數―日本の農家は小鳥を飼育せよ。

一、小鳥は雜草をも驅除する……………(二〇)

日本農家の注意すべき事柄―雜草を何萬噸も食ふ鳥。

一、小鳥を愛せ……………(二一)

獨逸の小學校で作る小鳥の巢箱―米と害蟲と小鳥―年一億の作物の被害を防げ。

一、牛、豚、鶏の飼養……………(二二)

獨逸の農家―主婦が鶏を飼育をする―獨逸の復興は農村の復興から―獨逸の農村

一、農村組合の特色……………(一五)

發達した組合組織—部落一團の組合—變つた組合員—日本農村も組合の活用を

一、獨逸の産業……………(一六)

自給自足を目ざして—國內産業の擴充—不毛の地の耕作—國民の不斷の努力

一、獨逸の工業……………(一七)

歐洲の二大工業國—貿易の躍進—最近獨逸の對外貿易—各種の製品の人気

一、ヒットラー總統……………(一八)

ヒットラー總統の政權獲得—ヒットラーの偉大さ—國民的自覺の附與—ヒットラ

總統—の國民に對する十戒。

一、まづ母性を……………(一九)

母は國家の根基—母の純情こそ正しい次の國民を作る—よき母を。

一、次に青少年を……………(二〇)

ヒットラー—青少年教育の態度—ヒットラー—青少年團、獨逸女子青年團の活躍—青年團の勞働奉仕—日本は世界最初の青年團國—ヒットラー—總統の青少年團への訓

示。

一、祖國日本のために……………(一九三)

國民の協力―本來の思想を奪回せよ、銃後の任務、融合の國家、社會を作れ―國家のために―働く喜びと信念―「國家に反する者は、まづ自らに反する者である」。「國家を罵るものはまづ自らを罵るものである。」

一、戦はこれからである……………(一九五)

なぜ、戦はこれからか―次の用意に國民の一大自覺を切望する。



興隆國家獨逸國

日族の下に、老いも若きも、男も女も、全國民が一九となつて前進し、世界にその偉力を發揮して居る獨逸國とは一たいどんな國であらうか、讀者はまづ獨逸國の歴史について、その概要を知る必要がありう。

現在の獨逸國の成立の基礎は、西曆五百年頃ゲルマニヤ種族の統一によつて、フランク王國が生れたことに初まり、其後種々の變遷に依つて、フランク王國は三つに分裂して、ドイツ、イタリア、フランスの三國となつたのである。

從つて、フランスも、イタリアも、その祖先は同じ獨逸から生れて居る。

ドイツと云ふ國名が、一般に用ひられるに至つたのは十五世紀に遡入つてからであるが、その後ドイツは、一六四八年に終末を告げた三十年戦争があり、一八〇六年には、ナポレオンの攻撃に遭つて獨逸の國土は、無慘にも佛軍のために蹂躪せられ、神聖ローマ帝國と云はれたオットー大帝國は崩壊するに至つたのである。

しかし、祖國の再興を憶ふ獨逸國民の熱情は、ナポレオンの壓政に甘んじては居なかつた。

遂に一八一三年英露と同盟したドイツ聯邦は茲に起つてナポレオンをワオタローに擊破するや中世

紀以來三百にも達した小聯邦を整理して、漸く三十九邦としたが、更に國內の諸邦を統一する必要を生じた獨逸は、一八四一年オーストリアを除く小邦を、全部同盟邦とするに至つたのである。

次いで一八六一年ビスマルクを宰相として、獨逸國が統一さるゝや、六六年には、オーストリアと戦つて大勝し、間もなく聯邦中のプロセインは一八七〇年ナポレオン三世と戦ひ、佛軍を破つて、アルサス、ローレンの二州を獲得するに至つた。

この戦に依つて、プロセイン王は、一躍ドイツ皇帝に即位し、茲に第二の獨逸帝國が生れたのであつた。

しかし、その獨逸帝國も、四王國と六大公國、五公國、七侯國、三自由市と云ふ複雑な聯邦形態から脱することが出来なかつた。

かくて一八八八年ウイルヘルム二世が即位するに及び、ドイツと、オーストリア、イタリアは三國同盟を締結したに對し一九〇七年には英國を中心とするフランス、ロシアの三國協定が現はれ、双方對立の形勢となるや、英、獨の海軍競争をめぐつて漸く歐洲の風雲は急を告げ、兩者一觸即發の危機に進んだ、時恰かも、オーストリアの皇太子同妃の暗殺に依り、獨逸は世界を相手にして起たなければならなかつた。

即ち歐洲の大戦がそれである。

一九一四年に始まつた大戦は、四ヶ年半の長期に亘つて続けられ一九一九年六月に、漸くヴェルサイユの平和條約となり共和制となつたのであるが、戦に疲れ切つた獨逸は、平和條約の後一九二三年マルクス内閣が出現し、國內は極度のインフレーションに襲はれ、經濟界は全面的に破局した。

かくて一九二五年エーベルト大統領の後を繼いでヒンデンブルグ將軍が宰相となるや、一時國內も安定したかに見へた獨逸國も、一九二九年米國の經濟恐慌に依つて、再び經濟界は大混亂に陥つたのであつた。

此の時現はれたのが現在のヒットラー總統である。

本書は主として、歐洲大戦中から、戦後にかけて、獨逸國民が幾多の艱難と戦い、尊い試練に依つて、獨逸の全國民、が各自の實生活を護つて來た卑近な例を擧げて、重大時局下の國民の參考にしたと思ふ。

大戦に苦しみられた獨逸

歐洲大戦當時の獨逸に就いて。

一九一四年八月一日の午後、獨逸は對露宣戰を布告するや、國內に總動員令を發し、此處にあの恐るべき大戦の火蓋が切つて落されたのであつた。

續いて英佛は露國に參戰した。

戰爭はますます複雑化して擴大し！

一九一四年の秋には、セルビヤ、モンテネグロ、ベルギー、ポルトガル、日本が獨逸を敵として參戰、一五年には、イタリア、ルーマニヤが之れに加はり、一九一七年の春には北米合衆國が、中立を止めて戰に参加次いで南米中米の諸國が加はり、終に支那までもこれに協力したのである。世界は擧げて對獨宣戰を布告した。しかし、傳統の獨逸魂は、敵國の數を加ふるに連れて、勇氣は百倍し、ベルギー、北佛の西部戰線を初めとし、東部に於けるヒンデンブルグとルーデンドルフの兩將軍は、タネンベルグと、マスーレン湖に於て大勝し、來襲のロシアの大軍を撃破した、一九一五年五月に始まつた勝利の進行は、遠く一九一六年の末まで繼續せられカリチヤが解放され、ポーランド、リトワ

ヤ、クールランド、セルビヤを征服、ブルガリヤとトルコもかくて連絡され、續いて、ルーマニヤは一九一六年の冬に打敗られたのであつた。

更に前進した獨逸軍はリガとエゼルを征服し、ロシヤの講和談判が失敗するに及んで一九一八年リヴランドとエストニアの占領となり續いて獨逸軍は、ウクライナに侵入オデッサとクリミヤ半島に達するや、更に西部に於ては、一九一八年に成功の一大攻撃が開始されたのであつた。この猛勇の陸戦と共に、空軍亦よく戦ひ、海戦も常に勝利であつたにも不拘ドイツは終に敗北したのであつた、しかし世界を相手に戦つて、前後四ヶ年半の長い間、あらゆる苦闘を續けながら常に戦線で連戦連勝した獨逸國の力は、まづたく偉大であると云はなければならない。

かくも戦線に勝ち誇つた獨逸が、何ぜに、惨敗國としての汚名を着なければならなかつたか。勿論國內の物資も缺乏して來たであらう、將兵も次第に疲れて來たことであらうが、敗戦の原因は、たゞそればかりではなかつた。

戦線で勝つて銃後で敗けた

今、獨逸國敗戦の原因を、當時、東部戦線を指揮して居た ルーデンドルフ將軍自らの言葉に聞くことにしよう。

「獨逸が惨敗した理由は、聯合軍の砲撃に對抗することが出来なかつたからではない。獨逸國內に散在して居た外來移住者と、過激思想の持主が、聯合軍の魅惑的宣傳のために、容易に誘惑され、戦線の背後で、國家が崩壊したからである。」と。

まづたく、將軍の言葉の如く、獨逸は聯合軍の宣傳の毒矢のために敗れたのである。

戦ひは古來より、武器と武器、兵と兵の戦ひである武力戦を中心とするものであるが、其他に經濟戦、外交戦、更に宣傳に依つて、戦線の兵士をして戦意を失はせ、銃後の國民の團結力を崩壊させるところの思想戦が、一體となつて、戦ふことを常とするものである。

歐洲戦争に於ては、殊に經濟戦、思想戦が、猛烈を極めたのであつて、聯合軍は、獨逸軍の優勢を挫くために、英、米、佛、露を主力とし英國クリュー侯爵邸内に對獨宣傳本部を作り、旺んに獨逸攻撃の宣傳を開始したのであつた。獨逸を苦しめたクリューハウスの宣傳は實に、この本部から發せら

れたものである。今その一例を舉げて見ると、聯合軍は、オーストリ戦線に對し、或は獨逸軍の一端に對して、毎日の様に飛行機から數十萬枚の宣傳ビラを撒布した。

その宣傳ビラには、大要次の様な意味が書かれてある。

「獨逸兵に告ぐ！君達は一たい何のために戦つて居るのか、祖國では今、君の母が、君の妻が、そして愛する子供が餓へてゐる。諸君はその家族を助けたいとは思はないのか。國內の工場では怠業や、罷業が行はれて、一切の生産は最早止まつたのだ。

一日も早く平和が来るように、諸君は銃を捨て、國內へ歸らなければならない。」

等の平和勸告のビラや、戦線に夕宵が迫つて、疲れた兵士が塹壕に憩ふ頃、何處からともなく、なつかしい、祖國の民謡が流れて來ることもあつた。これも聯合軍が、獨逸兵に故郷を思ひ出させるために全線に向つて聯合軍の戦線から蓄音器に依つて擴聲し、これを送つたものであつた。

又或る時は、聯合軍の宣傳ビラに、「獨逸國民の手紙」として、悲壯な國內の情勢を書いたものなどを次から次に撒布した。この紙に依る宣傳の毒矢は、殆んど毎日の様に獨逸兵の戦線に降り注いだのである。

如何に勇敢な、獨逸兵も、聯合軍の宣傳の様に、今、祖國の家族が餓へ、國內の全生産が止まつたと聽いては、ちつとして居られなかつた。

將兵の張り切つた勇氣は一時に挫けてしまつた。

八

今、目の前に國內が混亂して居ると聞いては、再び前の様に戦ふ力がなくなつたのも無理はない。一線の將兵が一番心配することは、銃後の護りである。

この聯合軍の戦線に對する宣傳は大いに効を奏し、獨逸軍の全線の勇士は、眞に、今一息と云ふところで、まつたく、戦意を失つてしまつたのであつた。

ヒンデンブルグ總指揮官をして、「吾れに一呼吸を與へよ。」と嘆息せしめたのは實に此の時であつた。

今回の支那事變に於ても、諸國は擧げて世界の輿論を對日惡化へ導くために、有らゆる手段をもつて各種の宣傳を實行し對日包圍を進めて居ることを讀者は深く心しなければならぬ。

當時獨逸の國內情勢 (一)

聯合軍の宣傳の彈丸は、單に第一線の獨逸兵に向けられたばかりではなかつた。

當時の過激思想は各方面から獨逸の國內に侵入し、銃後の國民に對しては、「常に獨逸の軍は至ると

もりよ何、が兵將の軍泉はれ：「かすま屑でれ吳てし結團はんさ皆の後銃」
。るゐで業甘るす問質に書一第
。ふ思といならなばれけながろことるい報に兵將の第一第のこは民國の後銃

ところで敗戦を續けて居る。今に國民が起つて平和を促進しなければ、獨逸國は滅亡の他はないと云ふ様なことを旺んに宣傳し、赤化思想の魔手は全國の工場内に侵入し労働者を煽動して罷業を行はしめ、主要都市の交通機關を停止し、或は瓦斯、水道、電氣の配給を斷つて、終に全獨逸をして、「混亂の街、暗黒と餓への街」の慘狀を現出したのであつた。

街の辻々では、至るところに群衆が集つて、「戰を止めよ、！平和を促進せよ！」と絶叫し多數の群衆は街を練り歩いた。

この混亂に力を得た聯合軍は、世界の新聞、通信網を一層強化して、獨逸の國內混亂と、戦線の攪亂された狀況を世界に報導し、或は虚偽の報導を作つて、これを宣傳した。かくて世界の輿論を一層獨逸に不利に誘つたのであつた。

「我れに一つのロンドントाइムスなし。」とは當時のカイゼルの嘆きであつた。かくて獨逸は、食糧を斷たれ、武器を斷たれて、終に聯合軍は一齊に獨逸國を慘敗の窮地に追ひつめたのであつた。

今や祖國日本は、その大聖業を全支の地に起して居るが、戦ひの相手は斷じて支那一國ではない、次に如何なる事態が発生するか、それは斷じ難いのであるが、今回の戦は決して現状の如き生やさしいものではないと云ふことを、國民の全體は深く覺悟して居なければならない。

殊に武力、經濟、外交、思想の國家總力戰を展開する最近の戦ひに於ては、祖國日本の同胞は總ての

點に協力し、よく堅忍して斷じて、大戰に於ける獨逸統後の崩壊の如く今後如何なる方法に依つて、對敵國から宣傳され、又思想攻撃が行はれようと、これがために國民の心が迷ふ様であつてはならない。全國民は眞に一致協力して、如何なる困難に遭遇することがあつても、あくまで戦はなければならぬ。光輝ある皇國の歴史に對して、同じ血を持つ同胞が、單に自分勝手な考へをもつて國內の一致を亂す様なことなく、政府の目的に従つて最後まで、前進しなければならぬのである。

外國の金に買はれた、ある大學教授の如きは、單なる個人の、自由主義を説き、一億同胞の血を、肉を、賣り、我が帝國の國土さへ賣らんとするもので、これは斷じて許すべきではない。國民は今後此の點に就いても充分心して、かゝる行爲のある者に對しては、たとへそれが如何なる知名の士であらうとも、國民は、全日本民族の名に於て、これに斷乎たる制裁を加へなければならぬ。

お互は、各々日本國民の一人として、非國家的思想、人物を撃滅打破しなければならぬ重大な使命があるのである。

戦局が進む程、國民は一層この心掛が必要であると思ふ。

當時獨逸の國內情勢 (二)

しかし、敗れたりと雖も、獨逸國であればこそ、四ヶ年半も戦ひ得たのである。この力はまさに世界の驚異とされて居る。

そこに獨逸の偉大さのあることを見逃してはならない。

世界から孤立した獨逸は、國民から軍需品の製造にアルミニウム製品、銅製、黃銅製、白銅製、錫製の家具を徴發した。黃金も、寶石も徴發した、愛國公債は九回も賣出された。開戦と共に、聯合軍からは食糧を斷たれた。油脂を對たれた。そして國民が常食する肉を斷たれたのである。従つて一粒の麥も、一滴の油も、一塊の肉も、これを輸入することが出来なくなつたのである。

當時獨逸は、パンの原料である麥を歐米の各地から輸入しなければ國內の需要を満たすことが出来なかつたのであるが、これが輸入出来ないとして見ると、日常食のパン粉を節約し、これに代るべきものを作らなければならない破目となつた。そこでドイツは全國一齊に黒パンを食することになつたのである。黒パンは精白しない麥をもつて作られるものであるが、それも長くは續かなかつた。間もなく一定の量以上用ひてはならないと云ふことになつた。次いで、一週に一度の「國民減食デー」が實行され、當日は制限されたパンを、更に半減し、時には一日中絶食さへしなければならなかつたの

である。終にパン粉の不足を補ふために、獨逸はパンの中へ藁の粉末や、木材の粉末を混入することさへ考へ出されたのであつた。

國民はパンをやめてジャガイモや大根を常食にした。

更に肉の欠乏は、甚しく國民を苦しめ、國民は一片の肉さへ食ふことが出来なくなつた。日本人であつて見れば別に肉を食はなくとも、心配はないが、獨逸人は特に肉を愛好し、これを常食とする國民である。

そこで獨逸は終に人造肉を、酵母と空中窒素とに依つて作ることに成功した。この時である聯合軍が、「獨逸は赤ん坊を殺してソーセイジや肉を作つて居る。」と世界に宣傳した。

やがてコーヒーも欠乏した。麥や木の芽の燻焼したものが代用に用ひられた。タバコが無くなると梅の葉、シナカバハキ等が代用にされた。

藥も全く無くなつた。そこで人造藥が作られなければならなかつた。更に戦ふ火藥の原料に油脂が欠くべからざるものでありながら、これが欠乏したのである。石鹼に用ひられた油が徴發された。そこで石鹼は總て粘土で造られることになつたのである。

それでも尙、油は不足した。終に特殊のグリセリンが作られ、漸くこれをもつて火藥が作られたと云ふ状態である。

そうした幾多の苦難と戦ひ續けた獨逸である。

戦ひ終つて戦線の勇士が、國內に歸つて見ると、もう物資と云ふ物資を初め食糧も全く食ひ盡くされて居た。獨逸の全土、獨逸の全國民は、それこそ疲勞と、榮養不良で、瘦せ衰へて居た。更にそこには、蒼白になつた母の、妻の、愛兒の、哀れな姿が泣いて居た。かくて獨逸の全土には病者が續出し、流行病が猖獗を極めた。そこへ共產主義者の國內攪亂が再發したのであるから、獨逸國は戦後更に一層の不安と混亂に襲はれたのであつた。

戦に敗けてはならぬ

その上、休戦となるや聯合軍は敗戦國の獨逸に對して、實に不法極まる要求を出した。ベルサイユの講和條約がそれである。

即ち、賠償金として、三百三十億弗と云ふ、トテツもない天文學的數字の償金を初め、西方鐵の產地アルサスローレンス及びザールの鐵區を失ひ、東方石炭の產地シレジャを奪はれ、ライン河の左岸は賠償金の擔保として保留された、あまつさへ獨逸が唯一の頼みとして居た工業地區のルールは佛蘭

西の爲に假占領の處分に附されたのである。

一四

かくてベルサユール條約は獨逸の手をもぎ取り、兩脚を切斷してしまつたのである。もとより國民は、これに反對したけれども、敗戦國の悲しさは、どうすることも出来なかつた。

聯合軍は前記の要求を出すと共に、當時の佛蘭西の新聞は「萬一自國の要求を承認しなければ再び軍隊を送る」と威しつけたのであつた。

當時獨逸國民の憤激に對し。獨逸の政府は、次の如く、涙の聲明を發して居る。

「總和條約に對する巴里人の威嚇！此處に掲げた巴里エクスプレス紙は、若し總和條件を獨逸が拒否した時は、軍隊をもつて獨逸國內に侵入を斷行すると威嚇して居る。

甚だしきは、經濟的損害を與へる外、港口封鎖、軍隊侵入管理、都市の爆彈投下を宣言して居る。而して、此の總和條件に調印を強ひられたる我が代表に對して、國民は敵視する者が多いが、これは國民閉鎖である。我が政府の執りたる處置は、國民の生活の危險を防がんとする爲であつた。

國民は祖國再興のために協力せねばならぬ。

今、獨逸にとつて重要なことは次の五つである。

一、糧食、果斷、平靜、秩序、勤勞、

一九一九年六月廿四日

獨逸政府

まことに、悲壯極る訓示である。

「戦ひには断じて敗けてはならないのである。」祖國日本も、國民の各個が、「敗けてはならない」と云ふ強い信念を堅持し節約生活を行ひ、貯蓄を實行して、銃後の護りを、しつかり固めてさえ居れば、如何なる困難とも戦ひ通せるのである。

「祖國日本は今後如何なる難局に直面しても断じて敗戦國の汚名を着てはならないのである。」

更に獨逸政府は、講和條約が締結さるゝやその翌日國民に對し、再び次の如き發表をして居る。

「吾人の損失。……生産地域の二割、――國民は一割、――石炭産額の三分の一、――パン粉及馬鈴薯の全生産額の四分の一、――鐵礦の五分の四、――植民地と商船とは全部。」

獨逸政府

しかも獨逸は大戦中二百萬の精銳なる勇士を失つたのであつた。

その上、獨逸の國民は、榮養不良で全面的に健康を害し、國民の總ては生きる希望さへ失つてしまつた。

國家にこれ程の不幸が又とあらうか。

戦後の國民生活

かくて、不法な審判を受けた獨逸國の經濟界は忽々活況を失ひ、産業は衰退の一途に向つて驀進した。

多額の賠償金を背負はされた、獨逸の金融界は、極度に混亂し、獨逸貨幣のマークは、時々刻々に下落して行つたのである。

戦前の獨逸一マークは邦貨の五十銭程の價值を有して居たのであるが、當時の外相ラウテナウ氏が殺されてから、我國の一圓が四十マーク、百五十マーク、五百マークと下落し、戦後三年目の一九二三年一月には驚く勿れ、邦貨の一圓が實に三萬マーク、七月には三十五萬マーク、その十一月には、僅か一圓が二兆一千億マークと云ふ大崩落を示したのである。

當時獨逸では、「獨逸の紙幣はこれを紙屑として賣拂つた方が金目になる。」と云はれた位であつた。

貨幣の崩落は云ふまでもなく、國際的に信用が下落したことを意味するものであつて、如何に當時の獨逸が、各國の信用を失つて居たかと窺はれる。

かくて獨逸國は、財政的にも破滅が迫つて來た。

かくて獨逸國は、財政的にも破滅が迫つて來た。

従つて、國民個々の生活も、物資の窮乏のために、危機に見舞はれたのであつた。マークの下落に反比例して、物價は騰貴し、多くの給料生活者は、週末に受ける給料では僅かに二個のパンを買ふことしか出来なかつたのである。日毎、或は一日に二回もマークが下落して居るのに、給料は一週宛に受けるのであるから、たとへ、今日漸く生活出来る程度にまで、給料を上げて貰つたとしても、次週に給料を手にする時は既に大變な崩落である。

即ち三圓の日給者は、週にすると二十一圓を貰ふ譯であるが、いざ週給を貰ふ日になるとそれが、十圓か五圓位の價値に下落して行つたのであつた。

勿論政府としても、あらゆる手段をもつて、マークの下落を防止したのであるが、勢の赴くところそれはどうすることも出来なかつた。

當時議會で決定した大臣の俸給は、邦貨の百三十圓見當であつたが、これを發表する日には、既に二十圓の價値しか持たなかつたなど、マークの下落は愈深刻となつて來た。

従つて物資の生産も、輸入も思ふ様にはならない、物資は缺乏に告ぐに缺乏をもつてした。

再び肉もなくなつた、野菜も、再鈴薯再鈴薯も無くなつた。病院で患者に與へる一瓶の牛乳さへ。今は手に入らないまでに國內の物資は窮乏したのである。

國民は牛肉の代りに豚の油をナメて暮した。

商店の前には、長蛇の列をした婦人が、僅か一片のパンを得るために、三里の道を歩き、一日も待たなければならなかつた。或は待つて居る内に品物が賣切れとなると、母は空腹を抱へて家に歸り、餓に泣く愛兒を抱いて狂氣した。

妊婦は榮養の不足から流産し、幸ひ生れ出る子供があつても、それは母の乳が出ないために育でることが出来なかつたのである。

ヒツトラー現はる

しかし獨逸國は亡びなかつた。これ程の苦しみを受けながらも、獨逸人は、ヂット堪へて居た。思想、經濟の兩面より危機迫つた獨逸國も終に亡びはしなかつた。

これは全獨逸民族が、虐けられゝば虐けられる程、愛國の熱情火と燃へて、協力一致、祖國再興に起ち上つたからである。戦後五十年は起つ能はずと云はれた獨逸が美事に起ち上つたのである。

「獨逸を護れ」「祖國を護れ」の聲は、この混亂、窮乏のドン底から期せずして沸き上つたのである。

る。

「國亂れて英傑出づ。」の通り、間もなく祖國獨逸を再興する運動は至るところに發生した。

現在の大獨逸國を建設した、ヒットラー大總統は、まさにこの渦中に出現したのであつた。

ヒットラー總統のことは巻尾を飾ることとして、此處には述べないが、戦ひ初まつてから實に十有餘年苦しみ抜いた獨逸民族は、傳統の血潮の中に更に生活に對して眞劍に、しかも合理的な節約生活を斷行し、國民互に相戒めて今日の偉大な獨逸國家を建設したのである。

本書は、この尊い獨逸人の試練から生れ出た、實生活、見榮へも飾り氣もない眞劍な生活振りを、ありのまゝに傳へて行きたいと思ふ。

獨逸國再興を目差して起つた時の政府は、まづ全國民に對して、次の如き生活上の大本十訓を發表した。

獨逸國國民生活十訓

- 一、一錢の經費を支拂ふにも我が獨逸人の利益になる様に注意せなければならない。
- 二、外國品を使用する場合には、それだけ自國を貧乏にすることを忘れてはならない。
- 三、汝の金は決して獨逸人以外の者に儲けさせてはならぬ。
- 四、獨逸國の工業は決して外國の機械を使用してはならぬ。

五、外國の食料品を汝の食卓に用ふことは、斷乎として排除しなければならない。

六、文字を書くには、獨逸のペン、獨逸のインク、而して獨逸の吸取紙を用ひ、獨逸の紙に書かねばならぬ。

七、獨逸の小麥、獨逸の果實、而して獨逸のビールのみが汝の身體に獨逸魂を宿すものと知れ。

八、若しも汝が、獨逸の麥芽コーヒを好まぬならば、獨逸殖民地のコーヒを飲まなければならぬ。

九、衣服には獨逸の布を用ひ。頭には獨逸製の帽子を被らねばならぬ。

一〇、外國の御機嫌取りに迷はされて以上の戒律を破らぬ様に注意し人が何と云つても、獨逸の生産品は、我が母國獨逸に唯一の價值あるものたることを堅く信ぜねばならぬ。(獨逸政府)

(以上)

祖國日本も現下に處して、一層この心構へが必要ではなからうか。

以下獨逸國民の生活習性について述べて見よう。

獨逸とお金

國を富ませるためには、自國の金を外國へ出さない方法を採らなければならぬ。

同時に外國からは、一錢でも多くの金を得ることを考へなければ、その國は富まない。

戦後の獨逸は、此の點に集中せられた。

戦後の獨逸は、此の點に集中せられた。

例へば、獨逸人が外國へ旅行するためには、公用は別として、一人につき拾マーク以上の金を持つて行くことを禁じられて居るのである。それは單に旅行させまいとするのではなく、國內の金を外國へ流出させないための規定である。

従つて外國へ旅行した者は、外國から金を送つて貰ふか、拾マークを持つて國境を越へ、そこから先きは、自ら何等かの収入を得ながら旅行しなければならないのである。

數年前、獨逸の青年が世界一周の途次大阪に立ち寄つたことがある。

その青年の話に依ると「獨逸の金で旅行することは、一般國民にも相濟まないし、それに政府で規定された拾マーク以上を持つて、國を出ることは許されないのです、自分は各國を視察するために無錢旅行を思ひ立つた。それで、各地で講演してその収入で旅を續けて居る。」と云ふことであつた。

それを聞いた、當時の大阪市教育局長生田五郎氏は、大いに感動して、早速その青年に「獨逸の青年」と云ふ題で講演して貰ふことにしたのであつた。筆者も、その青年と親しく話して感激の一時を過したことがあつたが、まつたく、その國を振興させるためには、全國民が各々この心掛けで行かなければならないと思つた。

また、先年バりに博覽會が開かれて、その出品場所を作るために多數の獨逸人がバリに行つたことが

ある。

華のバリと聞いて見れば、働き盛りの男性ならキアフエーや、ダンスホールにも行つて見たいであらうが、バリ出張中、政府は規定以外の金は一切持たせないのみか、その間の給料は總て本國で、それ等出張員の家族の手に渡されるのであつた。

従つて獨逸の出張員は、一ぱいのコーヒースーパーで飲まないで、食事から起居一切の用を自ら乗つて來た自國の船で済ませたと云ふが、實に徹底した節約振りである。しかもそれに對して一人も不服を云ふ様なものは居ない。

むしろそれを當然のこととし國民の義務と心得て居るところに試験を経た、獨逸國民の肚が窺はれる。

全くたのもしい限りである。

ところで獨逸は最近そんなに苦しんで居るかと云ふと、決してさうではない。現在獨逸の労働階級は一時間一マーク乃至一・一マークと云ふから、一日の労働賃金は十圓見當にもなるのである。

その収入は多く貯蓄して、一錢も無駄には使用しない。又政府の公債賣出しに際しては我れ先にこれを買つて政府の仕事のために協力するのである。

決してその金を持つて女の後を追つたり、家庭を苦しめる様なことはしない。

祖國を愛するなら、まづ自國の金が殖へる様になければならない。

祖國を愛するなら、まづ自國の金が殖へる様にしなければならない。

それには、自國品を愛用し、収入は無駄に使はないで、少しでも多く貯蓄することである。それが自分のためにもなり、又國家の財政、政策へ協力することにもなるのである。

獨逸國民の公德心

「お互に同じ血の獨逸民族である。」と云ふ考への深い獨逸人は、お互を愛して、互に爭ふと云ふ様なことがない。

この傳統の考へ方が原因して社會の公德心は餘程發達して居る。

獨逸へ行くと、道の兩側に澤山の林檎の樹が植へてある。果實が熟して來ると、小さい子供の手の届くところまで澤山のリングゴが鈴なりとなるのであるが、一人としてそのリングゴを失敬する者がないと云ふ。

獨逸全國至るところの道路の兩側が、これであるが、かつてリングゴ盗人が現はれたことがないなど。西瓜盗人、柿泥坊の多い國に比べて見て何と羨しいことかと思ふ。

公園の木を大切にすることも又驚くばかりである。これについて日本の紳士が獨逸の子供に大目玉を貰つた愉快な話がある。

或る日、日本の紳士は、伯林に居る友人を訪ねて二人で公園へ出かけた。ところが何の氣なく新緑の木の葉があまりに美しいので、その一枚をムシリ取つて嘗んで見た。

すると、どこからともなく八・九才の子供が走つて來て、「オチサン！ あなたは大變なことをする。あなたは今木の葉を一枚取つたが、もしも、この公園に來る人が、一人一人、一枚の葉を取つたら、この美しい木はどうなるか、木の葉はむしらないで下さいよ。」と息きをはづませながら注意したと云ふことである。

日本の紳士はグイと胸を刺された様な思ひがして、その子供に厚く詫びたと云ふが斯ふした公徳心が僅か八・九歳の小さな子供の頭にまで移植されて居ることは、學校教育の力が、それとも兩親の救へか、いづれにしても實に美しいことである。

そんな譯であるから、道の上や、人混みの場所や路上に唾を吐く者などは勿論見ることも出來ないし、街や、公園で紙屑を一つ拾ふことさへ出來ない程に清潔であると云ふ。

更に驛や、其他の乗物について見ると、改札口では、到着順に一定の方向から順番を待つことは云ふまでもないことであるが、電車や、汽車の乗客は、かならず、降りる人を持つてから、自分が乗車

する。乗降の時に押し合つたり足で蹴つたりする人は一人も居ない。

する。乗降の時に押し合つたり足を蹴つたりする人は一人も居ない。

又、混雑の場合は決してその列車には乗られない様に、改札口を這入るときはホームナンバーの番號札を受けて這入るから、先を争つて、乗車する様なことはない。

車中で三人前の座席を占領したり、老人や子供が來ると細目で眠たふりをする者なども居ないと云ふ。驛前のタクシーは一列に並んで客を待つて居るが、たとへ列の途中の新車が氣に入つたから、それにしたいと思つても、斷じて、新車の主は、それを承知しない。

驛に降りると、運轉手が同志打ちをして、客を奪ひ合ふ風景などは、凡そ見られないのである。

總てがお互のために、お互が愛し合つて居ることがよく判る。

それがためには、國民がまづ同じ血を持つた同族であると云ふ考へ、それが同じ國家、同じ社會で同じ様に、營みをして居るのであると云ふことを、ハッキリ自覺しなければならぬと思ふ。筆者は此の點について特に同じ血を持つた同胞にこの事を切望する。「お互は同血である。」と云ふ自覺の上に總てを進めたいと思ふ。

社會を良くするにも、國を良くするにも、まづこの心掛が必要ではなからうか。

獨逸國民と時間

獨逸國バツリヤの山莊に住むフアゼル博士は、いつも大學へ徒歩で通つて居たが、その先生は三百六十五日休日を除く他、一分の違いもなく八時十分前に學校へ着くのが例である。

附近の街の人々は、先生が通ると、ソラ八時十分前の先生のお通りだ。と先生を標準時計にしたと云ふことであるが、大學の先生に限らず、獨逸では時間の觀念と云ふものが、實に正確で午後六時の集會と云ふと、十分前頃にはまだ少しの人の影も見へないのに五分前になるとたちまち定員の人がどこから來たともなく揃ふと云ふのである。

また人と約束する場合には、かならず時間を打合せて約束する。明日會ひたいと云へば、では午前何時何十分に、來宅を願ふとか私の方から出かけるとか、總て時間をもつて約束される。

従つて、「明日の、サア午前中位に伺ひます」。などの漠然とした約束などはしないのである。

又約束した以上には、かならずその時間に約束した場所で會ふことは勿論であるが、萬一止むを得ぬ事故でも發生した場合は、かならず約束の時間までに先方へ、その由を傳へ決して相手方を不安の中に待たせると云ふ様なことは皆無と云つてよい程に時間に對する觀念は嚴重である。

日本では、日本時間と云ふのがあるかと、思ふとその中にやゝ正確さをもつた、東京時間と云ふのがある。

此の間も午後六時出席と定められた　ある會合が、一時間も遅れた七時に漸く初められたのが、あつたが集つた人は、五十人近くもあつたのであるから、皆んなが損をした時間は五十人の合計實に五十時間が空費されたことになるのである。

「時は金だ」と云ふ、再び同じ時間は取返へされないものであるから、時間は常に活用したいものである。獨逸人が時をやかましく云ふのは、お互に迷惑をしないと云ふにことにもあるが、更に少しの間でもこれを有効に使ひたいと云ふところから、出發して居るものと思ふ。

色んな意味で時に對する觀念はもつと正確に嚴守したいものである。

獨逸國民と電燈

獨逸人の技師が日本の工場を見廻つて居た處、不用な箇所に電燈が着いて居るのを見ると、どうも日本人は電燈を無駄にする。と言ひ乍ら、走るようにしてその電燈を消しに行つた。

僅か三十燭光位の電燈一つであるが、電流の浪費に對しては、實によく注意をする。それが日本の

僅か三十燭光位の電燈一つであるが、電流の浪費に對しては、實によく注意をする。それが日本の工場で、しかも、附近に澤山の職工がボンヤリして居るのに、今迄それを一人として消す者がなかつたのである。

又その工場では、よく夜業をやつたが一定の仕事が終ると、次の材料を機械にかけるまで二十分位づゝ休まなければならない時があつた。

そんな時には、直ちに不用な電燈はこの獨逸人の技師の手で消されて居た。電燈を消すのは獨逸人の技師の仕事の様で實によく電燈を消す技師だと云はれて居たが、獨逸人の技師が來てからと云ふものは、その月末の電氣使用料が、いつもの月よりも多くの動力、多くの電燈を使ひながらも、無駄な時間を氣を付けたとけで、兩方共の使用料が三分の一も尠くなつたのである。

それ以來、初めて日本の職工連中も無駄な電燈はお互に氣をつけて消して廻る様になつた。

又、獨逸の家庭は、アパート式なのが多く、階段や廊下に、電燈が澤山あるが、これも人が昇る時とか、必要な時にスイッチで點火し、五分間もすると自然にその電燈が消へる様に出て居るのである。

又、獨逸へ下宿した日本の留學生が寝る時に電燈をつけて居ると、いつの間にかその電燈が消されて居る。一寸便所へ行つて居る間にも電燈が消されて居る。變な具合だとよく氣をつけて居ると、下

宿のおかみさんが、常に注意して、居て無駄だと思ふ時は、遠慮なく、自分で室の中へ這入つて來ては、電燈を消して居たことが判つた。

日本では昔からケチンボのことを、爪に火を點すと云つて、ロソクも用ひない人だと云ふことを譬へた言葉があるが、獨逸人が電燈を消して廻るのは、無駄を省くことであつて、節約と云ふ意味も通用しない程に當然なことをして居るまでである。必要な場合は、堂々と適當な明るい燭光を使つて實に氣待の良い明るい照明にする。

商店の照明でも、獨逸の各驛の名前が書いてある場所でも街の辻とか必要な場所は、實に明るくて、薄暗くて驛名が讀めなかつたり、暗い商店、暗い住宅の室と云ふのは殆んどない。

先程下宿のおかみさんの話をしたが、このおかみさんは最初室へ電燈をつける時に、自ら大きな燭光と取替へたので、そんな燭光は必要ないでしょうと云ふと、此の室で讀書をするには、是非共これだけの燭光が必要だと教へた人であると云ふ。

無駄を省いて、必要の場所に活かす。この心掛はいかなる場合にも必要であると思ふ。

必要なところは明るくし不用な時はドン／＼消すことである。

不思議なことに筆者の住む近くのある住宅の門の電燈は、日中太陽の光りの中に照らされて、いつも赤く點いて居る。何の必要があつて、日中電流を浪費しようと思ふのか。

そんな家に限つて室内は、實に薄暗く、陰惨な、そして、食器の汚ない家庭であるに違ひない。

獨逸國民と紙片（二）

筆者の近くに獨逸の畫家が住んで居たことがある。その畫家は、友人の手紙を読み終ると、鉄を出して、その手紙を切り初めた、變なことをするものだと思つて居ると、便箋の上下と、最後の頁に半分位ひの餘白がある。それを切り取つて、クリップに止めた。

筆者はかねて、獨逸人は紙を大切にすると聞いては居たが、なる程これだと思つた。

その紙片を、或はメモに、或は、符箋にして少しの無駄もなく使ふのだと云ふ。

少し大きな紙片は、スケッチの下書きに用ひて居る、長いものはガラス障子の破れを塞ぐのに色々動物の形をうまく切つて、貼りつけて居ると云ふ譯で僅かな紙片もこれを活かして使つて居るのである。

又、その畫家のところへは、獨逸から、いつも相當澤山の手紙が届くが、その手紙の封筒は一度使つたものを裏返して使はれたもので、これが、日本に居るこの畫家のところへ再び更生して送られて來るのである。

つまり一枚の封筒が二回使はれて居る譯である。しかし讀者はそれだけで感心してはいけない。二度使はれた封筒がこの畫家の手にかゝると、更に一枚の立派な紙の坐布圍になるのである。來信を捨てないで、百枚近くの封筒を糊で貼り合はせ、これに油繪具を一寸塗つて模様を作り、これを乾して椅子の下へ敷いて居た。

又、洋紙の愈々どうにもならない紙屑は、一ヶ月位水の中でドロドロにして、これをタドンの様に堅く丸め日光に乾かして置く、それを冬ストロブの中へ入れて石炭代りとしたり、風呂をたくのに用ひると云ふに至つては、驚かざるを得ない。

又、獨逸の高級船員が、ボーイを呼んで使ひを言ひつける時に机の中からザラ用紙を一枚取り出し、その端を一寸平方角位ひに切つてそれに用件を書いて渡し、用紙は二つに折つて机の中へしまつたのである。

獨逸が再興したのも無理はないと思はせられる。

獨逸では斯ふした各個人の問題から、用紙に對する世界的標準を作つて、書籍の形や、用紙の寸法を一定して少しでも無駄や浪費のない様に心掛けて居る。

最近我が國でも、規格統一の用紙が用ひられつゝあるが、それも漸く一部に用ひられて居るばかりであつて、便箋の餘白の利用や、親しい友人に封筒の裏返しを使ふなどは見たこともないし、洋紙で

自家製の燃料を作つたことも耳にしない。

自家製の燃料を作つたことも耳にしない。

筆者は最近若い女學生から講演に對する感想の手紙を數十通貰つたが、いづれも封筒は、華やかな着色模様入りで、金、銀の線があつたり、便箋は、高級な一枚何錢もする様な洋紙が用ひられ、一枚毎に花模様が入れてあつて、まつたく齒の浮く思ひがした。

これなど獨逸人が見たら何と思ふだらう。

獨逸國民と紙片(二)

僅かな事の様であるけれども、國民各々が一寸氣を付けて萬事に節約をするのと、そうでないのでは、これを全國的に見た場合、大變な相違となつて来る。

一寸平方の紙切れ一つでも、日本の全國民が擧つてこれを節約すると次の様な驚くべき數字となるのである。

即ち、全國民が一寸平方の紙片を節約することに依つて、四六版の全紙が一日に拾萬六千八百三拾七枚節約出来る。

これを洋紙の取引される連を單位として計算して見ると一日に二百拾三連となり、一ケ年には七萬七千七百四拾五連になる。

昨今、紙の相場が高くなつて居るが、これを安く見積つて一連拾圓の洋紙としても、一ケ年に七拾七萬四千五百圓也の金額となる。

僅かに一寸平方の洋紙を節約することに依つて、年額百萬圓近くの方が節約出来るのである。

これが二寸平方の紙片であればその倍額の二百萬圓となる。

更にこれを新聞紙に換算して見ると、一寸平方の紙片の節約で一日二拾一萬三千六百七十四枚の新聞紙が作られる。

一ケ年で七千七百九十九萬壹千拾枚となり、これを朝刊十二頁の新聞とすると、二千五百九十九萬七千三部が節約出来ることになる。

この數字は、新聞社の輪轉機で一日百萬部の新聞を印刷するとしても二十六日間連続に、印刷しなければならぬ程の量である。

又、これで、本を作るとすると、四六版三百六十頁の本が、一日に一萬六百八十三冊となり、それが一ケ年となると三百八十九萬九千二百九拾五冊の本が作られることになるのである。
今この本を高く積み重ねて見ると、富士山の三十一倍の高さとなる。

又、この本を一系列に横に並べると東京から大阪まで届いて名古屋あたりまで折返して来る。

又、この本を一行に横に並べると東京から大阪まで届いて名古屋あたりまで折返して来る。

僅か一寸平方の紙片と思われけれども、これを全国的に考へると、以上の様な數字が出るのである。だから僅かの物資も無駄にはならないのである。

こうしたことは、實際に學校其他一般國民の消費節約の教材とならなければならないと思ふ。

日本は今、洋紙が大變不足して居る。家庭でも、商店でも、事務所でも、役所でも、學校でも、大いに洋紙は節約されなければならないと共に、紙屑は決して、そのまゝ臺面へ捨てたり燃やしたりしないで、纏めて、これを屑屋へ拂ふのがよい。

雑誌、新聞、雜記帳等總てこれを再生すれば、又再生紙となつて立派に役に立つのである。

殊に全國民が半紙大の用紙を一日一枚宛節約すると、その金額は、年に二千五百萬圓餘を節約し得るのである。

紙ばかりでなく、以上の様に考へて來ると決して一本のペン、一本の鉛筆、針、釘、に至るまで粗末に使うことは出来ない。

戦ふためには、あらゆる物資が必要である。廢品を生かす工夫、それに無駄を省いて、節約し、これを國家のために、或は、たとへ僅少でも賣り拂はれたものゝ代價をためて、大いに貯蓄することを獎勵したいものである。

獨逸は、戦後苦しい中から國民が僅かつゝの金を出し合つて、飛行機を作り、或は一臺五百萬マールもする、あの大きな飛行船を作つて居るのである。

獨逸國民と鉛筆

獨逸人は一般に多く鉛筆を使ふ。

多く使ふと云ふことは、ペン先や萬年筆を殆んど用ひないと云ふことなのである。

しかも、その鉛筆はまつたく最後の一寸、最後の五分まで使ふのである。

それで、だれもが、短かくなつた鉛筆をハサムものを待つて居る。

使はないときは、鉛筆の先を納め、使ふときはその根本をハサムのである（キャツプとは違ふ）

金を大切にする獨逸では、廿四分の九金以上の器具、を作ることを許されて居ない、これがためでもあるまいが、萬年筆などは、凡そ贅澤品となつて居る。

それよりも優秀な國産の鉛筆を使ふのが獨逸人の誇りでもあり、又經濟的であるに違ひない。

尤も必要なる文書には、ペンも用ひられ、萬年筆も使はれるであらうが、萬年筆は決して獨逸に關

する限り大衆性をもつて居ない、故障の多い、高價な、そして金を用ひなければならぬものを獨逸

する限り大衆性をもつて居ない、故障の多い、高價な、そして金を用ひなければならぬものを獨逸國民が、これを愛用する筈はないのである。

筆者の近くに戦後獨逸から來て自動車の運轉手をして居た青年があつたが或る日驛前で使ひ古した一寸五分位の鉛筆を拾つたのである。その獨逸人はそれを手に取り上げるや近くの人に「これを落したのではないですか」と訊ねて居た。今一人の日本人の運轉手は笑ひながら、そんなもの捨てゝしまへ、ナインダー鉛筆の端しくれじやないか」とヒヤカして居たが、しかしそれには相手にはならないで、獨逸の運轉手は、その鉛筆の先を見ながら大切そうに服のポケットに入れたのである。

筆者は此處でも獨逸の血の偉大な尊さをハッキリ見たのである。日本人に云はせると、それは屑の鉛筆である。用ひかたを知らないから、短かくなると、書きにくくなる。それで捨てられたものに違ひないのであるが、これを拾つた方では、もつた、いい、まだ書ける鉛筆を、と思つて手にしたのである。しかも一應大切なものを手にした様に、落し主まで求め様とした心、友人の運轉手が笑ふのも平氣で、それを大切にポケットに入れた態度は、やはり獨逸國民の偉大さを物語つて居る。

小學生の文房具の亂用、短かくなつた鉛筆の使ひ方も知らない。三寸位になるとドシ／＼捨てゝしまふ。その上、都會の子供はシャープの鉛筆だとか、萬年筆を持つ、中女學生にしても萬年筆を持たない者は殆んどない位である。

紙はどしどし使つて書きつぶしをするし、餘白があつてもこれを利用しない。これが日本の子供の現状である様である。

大人に至ると、服のポケットに万年筆や、シャープペンシルが、數本ズラリと並んだなどがある。それも趣味なら致方ないが、それにしても不經濟な話である。

獨逸人とマツチ

マツチでは色々の話がある。

日本人が獨逸の街を歩きながら煙草に火をつけた。そして、何氣なく、火のついたマツチを路面に捨てたのである。

ところがこれを見た獨逸人の友人は、かつて、小言や、文句を云つた男ではなかつたのであるが、その時ばかりは、ムキになつて叱つたと云ふことである。

これは獨逸人の注意深さと、公德心と、責任感のゴツチャになつたものが、日本人の不注意から一度に破れ出たものと思はれるが、マツチ一本に對する注意がこれである。

又、日本人が獨逸のレストランで煙草を吸つて居ると、そこへボーイが來て、「そのマツチは日本品ですか」と訊ねた。

聽かれるまゝに「そうだ!」と答へると、「相濟まぬが一本ツケて見て呉れませんか」と云ふ。そこでボーイの云ふまゝに一本火をつけるとボーイはそのマツチの燃へて行く状態をチツト見入つて居たが、火が消へてもまだ見て居る。變な男だと思つて居ると、日本のマツチは粗惡品ですネ。と言言批評して置いて、今度は自分のポケットからマツチを取出して、「獨逸のマツチを御覽に入れます」と云つて火をつけた。

しかし別に變つたと云ふ點もないので、何も變つた點はないではないかと云ふと、日本のマツチは燃へ終ると先に火がついたまゝ柚木から落ちるが、獨逸のマツチは、最後まで灰にならず、柚木が炭になる。これが違ふ點で、火のまゝ落ちるマツチは大變危険性があるが、獨逸のマツチに限つて、絶対にその心配がないと説明されたと云ふことである。

製造に對する細心の注意と、そうしたことを心得て居るボーイの常識は共に學ぶべき點であらう。いつかエムデン號の水兵が東京に來た。

街で煙草に火をつける様子を見て居ると一人が煙草を口にしたが、マツチを出したまゝ仲々火をつけようとしなない。すると間もなく五人の水兵さん全部が煙草を出した。

そこで一人がマツチをつけて、一本のマツチで五人のタバコへ火をつけたのである。

これも後から、聞いたことであるが、マツチ一本つけるにも、五人が各々自分でマツチをつければ五本の柚木が必要であるが、皆んながタバコを用意さすれば、五人のタバコは一本のマツチで足りるのであると云ふ。

獨逸人は自分がタバコを、ふかしたい時は、かならず側に居る人に「あなたはどうかと」、タバコの用意をさせて、マツチに火をつけると云ふ。

僅がマツチ一本位と馬鹿にしてはならない。

日本全國の人が一日平均三本のマツチを無駄にしない様になると、一年間では、實に七百六十六億五千萬本、即ちマツチ小函が七十五本とすれば、十萬函以上も無駄が省けるのである。

一度に五六本の柚木をつかんで、瓦斯に火をつけるようなことがあつては、國家に對して申分けない。

獨逸人とバナ、の皮

汽車で獨逸を旅行して居ると、前の座席に二人の元氣らしい獨逸の男の子が這入つて來た。暫らくすると、その二人の子供は、お互に包の中からバナ、を出して、いかにもおいしそうに食べ初めた。ところが、二人共、バナ、を食べ終ると、その皮を丁寧に丸めて、ポケットにしまい込んでしまった。

一たいあの子供達は、バナ、の皮をどうする氣だらうかと思つて見て居ると、やがて汽車は町を通り過ぎて、廣々とした畑の中を走り初めた。

すると、その二人の子供は、申合せた様に、ポケットから先刻のバナ、の皮を取り出して、力一ぱい畑を目がけて投げつけたのである。

日本の人は、どうもそれが不思議でならなかつたので、子供と話し出したついでに、その理由を聴いて見ると、一人の子供が「あれは肥料になるんですよ、だから畑の中へ捨てたのだと。」答へた。そこでヒザを打つて初めて成る程と得心した譯であるが、車中に捨てゝ人を滑らしたり、車内を汚くすることを何とも考へないものさへあるのに、獨逸の子供は、子供ながらもたいしたもののである。

子供にとつては、バナ、の中味こそ大きな魅力であらうが、その皮に何の執着があらう、それを、

無駄には捨てないところに獨逸の魂が躍つて居るではないか。

それから汽車が友人の住む驛に着いて、車中のこの話をする、獨逸人は決してバナ、の皮は厭捨の中へは入れないで、野菜とか、植木の根の肥しとして用ふことを忘れないのだと云ふことであつた。

役に立つものは、最後までこれを生かして使はなければならないものだといつづく感心されたことである。又、獨逸人は、柿、梨、林檎を食べる時でも、皮も食べれば、中の芯までも、食べてしまふのである。

これは、リンゴの榮養價は皮に多く、又芯にも多いのであつて、これを捨てることは、どう考へても賞めたことではない。

日本ではリンゴの皮は厚くムイで、中の芯は大きく捨てゝしまふ習慣があつて、芯を食ふと馬鹿になると云はれて居るが、獨逸人は決して馬鹿になるところではない。益々賢くなつて、益々元氣に太つて行くのである。

榮養價の多い部分を捨てる様に教へ込んだことは、根本的に考へ違をして居ると云はなければならぬ。

われわれは、あまりに皮相に育てられて來たのではなからうか、皮を食ふと胃腸を害すとか、ムイ

などいふ言ひは、生のもものは悪い等、教へられて來た。

で食べなければお行儀が悪いとか、生のものは悪い等、教へられて来た。

しかし、それが多くの場合、正反對のことを教へ込まれて居るのに氣付くことが吾人の日常生活の上には澤山あるのである。

色々の新しい學說理論も結構であり、必要でもあるが、理論や、學說のみを信仰して、手近かな、そして一番大切な生活に、反する學說理論を守ることは、百害あつて一利もないことになりはしないか。

實生活に則しない學說、理論は全く意味をなさない。

○ 獨逸の住宅

日本の駐在武官が數年間獨逸に生活して、其の間獨逸の實生活について色々研究した中で、最も變つて居ると思つたのは、獨逸の住宅であるとのことであつた。

その武官の話に依ると、獨逸の家庭、住宅と云ふものは殆んど煉瓦か石で作られて居ると云ふことである。それで焼ける心配がないから火事も少い。しかも、一戸一戸の住宅を作つて居る家庭は、少

數であつて多くは、ビルディング式の大建築の中に、多數の家族が各々の室を持つて居ると云ふのである。中には東京の丸ビルの様な、建築もあつて、仲々立派な建築が多いそうである。従つて市街地の建築は同じ様な型で立ち並んで居るのであるから、實に都市美は立派で、小さな屋根がゴチャ／＼して居て、屋根の上に赤い布が風に吹かれてゐるなどの圖は一寸見られない。その武官が、日本では多く、一つの家族が一戸を持つて居る、自分の家もそうであると話したところ、獨逸での一戸は、大きなビルディングであるから。日本はそんなにお金持かと眼を丸くして驚いたと云ふが、獨逸では日本の住宅は一寸想像されないらしい。

そのいづれの形式が良いか悪いかは別として、獨逸の住宅は、萬事が住み良く、生活するに便利な様に設計されてあるのに驚くと云ふことである。

例へば炊事場一つにしても、一つの家族の炊事場は何から何までキッチンと整頓してあつて、一つの場所に立つたまゝ水も出せるし、ガスの栓も開けられる。煮物が出来ると思へば、廻れ右すれば洗ひ物が出来ると云ふ様に設計が出来て、居て、食器や、什器等の備へ付けなど一寸手を伸ばさへすれば總て手に取れると云ふのである。

起つて見たり座つて見たり、五步前進して、三步後退、それから背伸びをして、ザルを取り、腰を落してタワシを持つ、などのことがないと云ふのである。萬事が能率本位に出来て居る。

調度品の如きも、決して近代的のものは備へてないが、便利で丈夫なものばかりが備へつけられて

調度品の如きも、決して近代的のものは備へてないが、便利で丈夫なものばかりが備へつけられてあると云ふことである。二十年振りて再び獨逸の下宿を訊ねた、私の友人などは、その下宿の調度品一切が二十年前そのまゝに備へられてあつて當時の柱時計が相變らずカチカチ動いて居たと話して居たが、獨逸人は大變に家具を大切にすると云ふことである。

獨逸大使館の應接間に通つた筆者はそこに備へてある調度品がいかにも粗末で、總て數十年を経過したらしいテーブル椅子、棚を見て、これだと思つた。更に獨逸人の住宅に對する觀念は、寝たり、風雨をしのぎ、食事をする一つの小屋位に考へられて居る様である。

獨逸人の本當の住み家は、大自然であり、草原であり、森であると云ふ考へ方が強い。それだから、獨逸人は常に戸外に出て、日光に浴し、新しい空氣を求め、森の静けさを味ふのである。

○ 獨逸の主婦

まづ主婦の話の前に、獨逸は女尊の國かどうか、と云ふことについて書いて見よう。

どちらかと云ふと、獨逸の男子が婦人に對する態度は、やはり女尊である。勿論それはアメリカの

如き極度の女尊ではないが、婦人に對しては相當の敬意が拂はれる。

筆者の友人の武官は、或る夜、獨逸高官の宅の晩餐會に招待されたのであつたが、獨逸の禮儀として、招待した家の主婦に對して敬意を拂ふために、客は夫人の手にキッスをしなければならぬ。ところが友人は武骨な豪傑肌の男で、どうも夫人の手を取つてキッスを呈することが出来ないで、マゴつて居ると、同じ日本の武官が、旺んにキッスを呈せよと云ふ。でないと、大變禮を失することに、なるからと云はれたので、恐るゝこの豪傑武官は夫人の手を取つてキッスをしたと云ふ。ところが何だか口にさはつたものがあるので、ハット氣が付いて見ると、その夫人の手には、赤い毛が相當澤山あつて、伊セエビの背中のような感じがした。なぞ、戲談を云つて笑はして居たが、日本の男子が婦人に對する態度とは相當に趣きが違ふ様子である。

さて、主婦としての獨逸夫人は、世界一で、あらゆる點に實に満點だと云はれて居る。

歐洲では、「轅を貰ふなら獨逸の女を」と云ふ言葉が話されると云ふが、主婦としての獨逸婦人は、まつたく申し分ないと云ふことである。

例へば、家計に對する細心の收支は云ふまでもなく、一切が家計簿に記入され、どんなに僅少な收入でも、それでチャント、それ相應の暮し向きを立てる手腕を持つて居ると云ふ。

殊に、月曜日から土曜日までの一週間の、家庭の行事は、チャント日曜日の晩か又月曜日の朝に豫

定が作られて、その通り、寸分の狂ひもなくピシピシ運ばれるのである。

毎日の朝、晝、夜の食事、料理それに要する材料、費用が、一見して割出されてある。更に起床の時間、就寝の時間、お掃除の時間、散歩の時間、家族の時間、讀書の時間、洗濯の時間、つくろい物の時間、お料理の時間、接客の時間、訪問先の時間、花に水を與へる時間、まで正確に豫定が出來て居て、その間、少しもボンヤリとして居る時間のない様に一日の時間割が出來て居る。

従つて、その豫定に依つて、主婦は、それこそ、朝から晩まで働き通すのである。

井戸端會議をする時間もなければ、大衆雜誌を前に置いてお菓子をムシヤムシヤやりながら、寝そべつて居る婦人など、凡そ見られない風景であるし、主人が會社へ出かけた後から、街の百貨店や映画場廻りをする有閑婦人も、稀れである。

その上、毎週一度はキット室内の大掃除が行はれる。だから、獨逸の家庭の清潔さは、獨逸へ行つた者は、まづ だれもが驚くと云ふ。

その代り一日の仕事の豫定が終へると、總てを忘れて、散歩もすれば、音楽會にも出る、映画も見ろ。殊に日曜日などは家族連れで朝から公園や郊外へ出る。日曜日に家に居る婦人は病人以外は稀れである。

働くときは、全力を出して働き、用事が終れば總てを忘れて遊ぶ、これが獨逸人の生活に對する根

本態度である。

獨逸の訪問日

獨逸の家庭では、訪問日や面會日が定められてある。

もつとも、これは、その家庭に依つて異なるが、金曜日が訪問日であれば、木曜日が、自宅の面會日と云ふことになり、その日は宅で訪問客を待つ日と云ふことになつて居る。だから、あの宅を訊ねたいと思ふ人は、なるべくその宅の面會日を選ぶのである。

尤も多數の客を迎へる家では、木曜日以外にも亦別な日も定められて居るが、どの家庭でも、客を迎へる日と云ふのが定めてある。

又、家庭の洗濯日も定めてあつて、普通月曜日が洗濯日、となつて居る。その日はどの家庭でも一齊に主婦が洗濯をするのである。斯ふした習慣を作ると自然づほらをして居る譯に行かなくなる。

近所の主婦連が、皆んなせいでして洗濯や乾しものをして居るのに、自分の家ばかり知らぬ顔をして居ることは出来ない。

共同の力で働く」と云ふことも日常生活の上に又大切なことであると思ふ。

土曜日はたいてい各家庭の大掃除が行れる日である。

其の他散歩の時間でも、各家庭が同じ時間に申合せた様に家を出るから愉快である。おやつ時間も、たいてい三時から四時の間に行はれる。この間に、客を迎へる人はお茶の席へ御出下さいと云ふことになるのである。

宅で夜會をする日も定められてあつて、その日は、家族が中心になつて、或は歌を、ピアノを、ヴァイオリンを弾いて客を接待する。これが家族日と云ふことにもなるが、又別に、家族ばかりで、主婦が歌ひ、子供がこれに合唱して、主人がヴァイオリンを奏すると云ふたのしい日も定めてある。

又、獨逸では客を招待するのに次の様な案内をする。午前十時に御出下さい。午後の三時に御出下さい。夕刻お出下さい。午後八時に御出下さいと。云ふ様な時間の制限があつて、朝の十時に來て呉れと云ふのは、お茶を差上げてお晝前まで話をしようと云ふことであり。お晝前の案内は、午食を頂きながら話ませうと云ふことで、午後三時と云ふのは、午後のお茶を差上げて、夕刻頃まで話ませうと云ふことになる。又夕刻においで下さい。は夕食をしてゆつくり話ませうと云ふ意味である。午後八時にと云ふのは、夕食をすませてからお出下さい。八時頃から夜中まで家族と親しく話そうと云ふことに解すべきである。

従つて人を案内する時は、かならず、そうした時間を指定して、その間は本當に親しく話し合ふために、用意される。

折角来いと招待して置きながら、客が訪問すると、いかにも忙しそうにして、實は今日は忙しいので一寸失禮するなどの無禮なこと等は斷じてない。

しかし、約束のない不意の來客に對しては、遠慮なく面會も斷るが、お茶一つ出さないと云ふ。

① 獨逸の下女

獨逸の家庭では、餘程の家庭でないと下女は雇はない。主婦一人の手では、どうにも足りない時に、初めて下女が雇はれる。

近所の手前とか、主婦が樂をするためにと云ふ様なことは全然ない。従つて、獨逸の家庭で下女を見ることは至つて少いと云はれて居る。

何から何まで家事に關しては一切主婦が、立廻るのであるが、止むを得ず下女を雇ふ場合は、單に仕事の手傳ひをさせると云ふ程度の雇ひ方はしないのである。苟しくも家事を處理し、管理する任務

はそう簡単に行くものではない。

そこで、下女を雇ふ場合は、主婦の手で嚴重なテストが行はれてから、雇はれる。だから、獨逸の下女は、立派に主婦の代理が出来る迄に總てに對して、科學的に頭を使つて立ち働くのである。

例へば、風呂を沸すのでも、チャント寒暖計をお湯の中へ入れて置いて、適度の溫度になつたら無駄な石炭を入れない。

度々石炭を入れるのが面倒だからと云つて、一度に澤山の石炭を投げ込んで、お湯を熱湯の様に沸した後から、水をどんどん加へると云ふ様な不經濟なことは斷じてしないのである。

室内を温める場合でも寒暖計によつてストーブを調節して無駄を省く、料理に對しても、煮過しと必要以上の材料は一切用ひないのみか、野菜の一葉と雖も、これを無駄には捨てないのである。

又、主婦が居ようが居まいが、そんなことで、働きを左右する様なことも無い様である。

主婦が下女に對する態度も、その下女の人格を尊重して、言ふべきこと、そうでないことを區別して居る。

ある獨逸の大學教授の家庭で、下女が御用聞き的青年と戀仲になつたが、その主婦は、それに對しては一言もオセツカイらしい口は利かないのみか、家の用事が終ると、自由に散歩の時間も與へれば、大學の講座へも出席させる。國民大學の講座を、その下女と戀仲の青年が並んで聽いて居る。そ

の前で家の主人が講義をして居ると云ふ風景が見られるのである。

下女に自由を與へると云ふことは、決して放任の意味でもなければ、自由主義的個人主義の立場からでもない。下女の一個の人格を尊重して、家事に差支のない限りは、下女の私的感情を壓迫しようとはしないのである。

自分は何もしないで下女を追ひ使つたり、食事の區別をしたり、散歩の時間も與へないで、叱り飛ばしてばかり居るのは大變な相違である。

日本のある女學校の校長が、どうも今迄の日本の女子教育は、自ら家庭の仕事をすると言ふのでなくて、自分は遊んで居て、どうして下女を使ふかと云ふことを教へた教育である。と話したが、そうした婦女子が、多くなることは、日本の家庭の將來に對して悲しむべきこと、云はなければならぬ。

① 獨逸の婦人と化粧

獨逸婦人は、さぞかし化粧が上手だろうなどとお考へになつてはいけません。

大戦中とはもとより、戦後二十年の今日に至るまで、獨逸の婦人の顔には、お白粉はもとより、クリーム、紅、等一切の化粧品は用ひられないのであります。

獨逸の街を歩いて見て、どの顔も、どの顔も總てが生地の顔であることに氣付くでしょう。まつたく生地の美しさを見なければ獨逸に行くことである。

どちらかと云へば、美人型でない獨逸の婦人は、しかし、その顔に現はれた健康色、美しい艶は全身の健康を表はして居て、これ程健康美を持った婦人も稀れであります。

「化粧美よりも健康美を、」これが獨逸國家が婦人に求めて居る美しさです。

白粉が塗られた、美しさは、粉が落ちると蒼白な顔であるのに反して、健康美は、全身の中から湧き出る眞の美しさであります。

だから、獨逸政府は「全獨逸の婦人よ化粧を捨て、健康美を作れ」と命じます。

殊に國家の法律は、寛間は如何なることがあつても婦人は化粧することはならぬ。と規定して居ります。

併し夕刻からは差支ないことになつて居りますが、進んで粉飾する婦人は少いのであります。クリームも實は法律で買ふことが出来ないものであります。晝間は働かなければならない。働く者に化粧の必要はない。自分の時間になつて家族が、休養する場合は自由を認めてある譯であります。

白粉のない顔を見るのに苦しまなければならぬ日本では、國産品で事足りず、舶來品が用ひられ、それも朝のクリーム、晝のクリーム、夜のクリーム、煉白粉、粉末、粉末も一色ではいけないとあつて、白と、黄、赤いのに、茶褐、それに香水、香油、ボマード等が鏡臺の上にズラリと陳列されて居る。

身だしなみとしての婦人の化粧は、ある程度まで必要と思はれますが、健康美を忘れ、蒼白、瘦身のからだを強くすることを考へないで、長い時間をかけて、物の美事にメーキアップされ、頭髮にウェーブ、をかけることは、婦人の幸福のためにも亦、民族の母としての立場から、一應考へられてよいことではないでせうか。

しかし、この問題は御婦人ばかりではない、筆者が先頃中國のある町に旅行した時のことである。町角に立つて、七時のラヂオニュースに、皇軍の奮戦の模様を聞き入つて居ると、町の若衆數名が頭髮を光らして、顔にはクリームの薄化粧をして、蒸せる様な匂ひを立て、通り過ぎた。

時恰も國民精神總動員週間の時であつたが、筆者は妙ならず暗くなつたものだ。今でもこの若衆

が懐に手を入れて、セツタを引いて通り過ぎた後姿が眼に見へるのである。

獨逸の婦人は國家の非常時に、房々とした頭髮をブツツリ切り落した。今でこそ斷髮流行で、切れと云はれてもさ程の苦痛はないが、當時の獨逸婦人の決意は、そのまゝ今の日本の婦人の決意でなければならぬのではなからうか。今に至るまで第三國家獨逸の建設に向つて、白粉も、紅も香水も、髪油も、クリームも用ひない獨逸の婦人達です。

そして母としての強い肉體、健康美の母を作ることに懸命な獨逸です。

化粧の問題はともかくとして、日本の婦人、日本の母性はもつと、健康にならなければなりません。

國を強くするためには、まづ母自らが健康になることであることを婦人は深く自覺して下さい。

獨逸婦人の活動

先年獨逸で開かれたオリムピックの状態を、映畫に記録した人は、レーニ・リーフエンシユタール女史であつた。

會場の要所要所に四十數臺の撮影機を据へ付け、數百人の男性に命令して、百三十萬呎がらの撮影を美事に完成したのであつた。云ふまでもなく、映畫の撮影は、特殊な撮影技術が必要であるほか、政治上の問題から、思想の問題、藝術的な考察等廣い範圍の智識を必要とするもので、専門の智識の無いものには到底出来る仕事ではない。

その上映畫の仕事は、精神を使ふことは勿論であるが、肉體的にも大變な勞働である。

この大仕事をリ女史は總指揮官となつてオリムピック全體に亘る記録映畫を完成したのである。オリムピックの映畫は讀者も見られたことであらうが、あれは總てリ女史の手で作られたものであつた。

リ女史は、今獨逸國立のオリムピヤ映畫會社の社長をして居る。獨逸婦人は自分の才能を、國家の、或は社會のあらゆる場面に活かして働いて居る。大戰當時男子に代つて、國內の工場に、役所に、會社に働いた經驗を持つ、人達であつて見れば、街頭に出て働らくと云ふことは何でもないことであるが、獨逸婦人の働く分野は、男性のそれと同等に、役所の課長に、會社の重役に、工場技師長に、女工に、或は醫者に婦人の生活は、男子と少しも變るところがない。

それだけ獨逸婦人の智識、並に勞働力は旺盛である。

ある獨逸の婦人は五十二歳で、會社員、それに餘暇を見て語學を勉強して居た。

しかし婦人は、男子と共に、男子の中に遁入つて活動はするものゝ、あくまで婦人であることの自覺は決して失つて居ないのである。獨身主義者や、婦人參政權を叫ぶ者は斷じてない、時を得ればいつでも、しとやかな妻となり、主婦となり、母となるのである。

獨逸政府は、婦人に對して、「家庭へかへれ」と訓令をして居る。そして、なるべく早く家庭を持たしめるために、國家は一定の補助を與へて居る。それは、婦人には婦人として尊いつとめがある。婦人は家庭を守り、強い次の國民を産まなければならぬと云ふのである。

従つて結婚後は、從來の職業を惜し氣もなく捨てゝ家の婦人となるのである。

我が國では、今だに一部の智識階級の婦人は眼鏡をかけて婦人參政權などを平氣で、口にし、政治上へ乗り出さなければ婦人の立場が、何とか云はれる人もあるが、これは婦人の仕事ではない。

それよりも婦人の要求は、民族の母の立場から、これを政府に提示し乃至は、婦人が協力して、婦人の立場を善導すべき政治家を、云ひかへれば、全體の男性を教育すべきではなからうか、なぜなれば、如何なる大臣宰相と雖も、等しく母の腹から生れるからである。近衛公も亦母の腹から生れ出た人である。善い國民を養育すること、これが母の嚴肅なつとめであるからである。それが出来ない人に參政も、社會問題もあつたものではない、母はいつの場合でも、家庭を守つて、皇國の強い國民を産むところの、民族の母である。と云ふ信念と自覺を失つてはならない。

もしも、世の婦人がこのことを忘れて、辛願し、病弱となり、弱い子を産み、或は家を亂すことがあれば、それは自己の重大なる責務に反する大なる矛盾である。

「女子は總て一人残らず民族の母である。」

獨逸人と食事

六七年も以前のことである。獨逸から商品見本を滿載して、各國の港に寄り、船内を陳列場所とした商品見本船が日本に來た。

その時乗組員の食事はどんなものかと、見せて貰ふと、朝が黒パンとコーヒー代用の、お茶だけである。晝と夜はジャが薯を主として、それに黒パンとリンゴを半分宛であつた。

時に野菜のキャベツ、人參、野菜豆の極少量と、牛、豚肉を少量食べることがあるが、それも一日一回で全々用ひない日もある。

高級船員は僅かにそれより卵を一つ多く食べて居たが、それで居て乗組員の總てが、筋骨隆々として居るから不思議である。

。し腹を食美は氏太恒野矢。いなく影が入るす害を康健てつ却、てした食美
。たし戻取を康健、てべ食みの菜野の煮水と米玄

獨逸人は特に牛や豚の肉を好むと云はれて居たが、戦後それ等の肉は次第に魚肉に変更されて居る。

街の料理店あたりで獨逸の人が、牛や豚肉の料理を注文する者は一人も居ないと云ふことである。それは好きではあるけれども、豚の飼料は、外國から輸入しなければならない。そこで、これを防ぐ方法として好きな肉も食はないのだと云ふことである。

一般家庭の料理にしても、一菜主義で五品も六品もの副食物はない。それに、今尙獨逸は黒パンを食べると云ふことで至つて粗末な食事である。尤も野菜と魚肉は相當に用ひられて居る。

しかし、卵はホテルとか料理店以外では用ひることを禁じてあり、一般の市場では販賣して居ない。

ホテルで、卵や牛肉を取扱ふのは、外國人の便利と、獨逸國へ少しでも多くの金を落して貰ふため、國民は決して贅澤を云はない。

又、バタの如きは、切符制度で販賣されて居て、一定量以上は與へられない現状である。云ひ方を換へると、全國民が好きな肉やバターを制限され、好きなものも食はせない様に、國家がこれを統制しても、獨逸國民はそれが國家のためになることであれば、喜んで従ふのである。

我國では國策上、どうしても統制しなければならぬ物資の一部を制限しても、國民は相當にやか

ましく壓きたてられるが、國家が大きな運命の前に動いて居る時は、自分の立場と云ふのではなく、總て國家の立場で、これを判斷することが國民の義務であり努めで、あると思ふ。時に親父の氣持にもなつて見ることも必要である。

「國を離れては國民は、存在しないからである。」更にそれだけ節約され、合理化されながらも今日も尙獨逸國民は、一週一度の減食半量デーを全國的に實行して、國內の物資が自給自足出来る様に協力して居るのである。

それであるから、食事に食べ残しがなく、料理をされる材料などは、根も葉先も、皮も、それこそ總てが活用されて、食事となる。それで臺所の横に備へられた屑籠の中に、野菜の葉や、大根や、人参の一片も、發見することが出来ないのである。

恵まれて居るのか、贅澤なのか、日本の屑籠の中には貴重な食糧が、まだ豊富に捨てられてある。東京市の調査に依ると、街の塵芥箱に捨てられたものの中から、年々四百萬圓からの有價物が拾ひ出されると云ふ。東京だけでこれである。これが全國的になると數千萬圓にも及ぶことであらう。これを毎日集めて居る人が、東京市だけで三千數百人もある。

獨逸人の榮養

前にも述べた様に獨逸人の食事は至つてお粗末である。

しかし食物が粗末だから、榮養價が少いか、と云ふと決してそうではない。

政府は、獨逸國民が大戦中食物が無くて榮養不良とつたことをよく記憶して居る。そうでなくとも國家の隆興は、まづ國民の健康をよくすることであると云ふことを、政治の第一に考へて居る獨逸國である。

だから、魚高等學校、野菜高等學校と云ふ國立の學校があつて、獸肉に代るに、北海の鰯、鯨を如何に榮養價を失はずに料理するかと研究されて居る。

これで、人間に必要な動物性蛋白、ビタミン、無機質、が補はれるのであるが、更に野菜を食べよと旺んに宣傳して、ビタミン、カルシウムの各種を野菜の料理に依つて補ふのである。

従つて適量の魚肉、適量の野菜を（大根、人參、チサ、ホーレン草、キャベツ、玉葱、豆）等の類も豊富に混食し、果物を食ふのであるから、たとへ粗末であつても榮養的には満點である。

別に、バタや、卵や、牛乳を攝らなくても充分なのである。榮養學者が獸肉や、卵や、バタや、牛乳を、推奨するからと云つて、そんなものばかり美食をして居ると、榮養は偏して、却つて、ヒヨロ

長い身體になるのである。

よく日本の良家の子女が發育不良であつたり、美食する都會の子供が弱い原因は、此處にあるのであつて、鯛の刺身の代りに鯛を、そして、卵の代りに野菜を、豆を食つて居る田舎の子供の方が榮養が適度に、偏しないで、からだに補給される。それで發育も良好なのである。

更に獨逸が食料に對して、どんな注意を拂つて居るか、筆者の友人である獨逸人の話を次に紹介しよう。

獨逸では「一般に、獸肉を食ふな、野菜と魚肉を食べよ」と宣傳して居る。

これは獨逸が食料の自給自足を計る必要から叫ばれて居るのであつて、牛や豚の飼料は、これをカナダから輸入しなければならない。獨逸はこれをなくする必要があるばかりでなく、土地が狭いので沼地を開拓して大いに野菜を作る計畫である。

魚は北海に豊富なので、別に外國へ金を支拂ふ必要もないから、大いに魚肉を獎勵することになつた譯である。

ヒットラー總統は、自ら、禁煙、禁酒、禁肉を實行して、野菜を主食とし、鯊を食べて、これを國民に徹底させて居る。又食物に對する衛生的、營養的攝取法は、専門に研究されて、特に此の點は注意され、一日一回は生の野菜、果實をかならず食へることを奨めて居る。」と云ふことである。

水産國日本は、やはり牛豚肉は不足であつて輸入をして居る。獨逸の食料政策は、そのまゝ現下の我國にも大いに考へられたいものと思ふ。白米を胚芽米に、獸肉を鰯に、卵を野菜に、美食よりも實質に、口にうまいと云ふよりは栄養本位に、そして食事は單なる嗜好でなく、あくまで、からだを養ひ、全身の鮮血を増すために頂きたいものである。

鰯一錢の栄養は實に牛肉の三十七錢分に匹敵すると云はれて居る。

獨逸人と辨當

獨逸では相當の人でも、汽車に乗る時とか、街や郊外に行く時はかならず簡單な手辨當を持つて出る。決して出先で無駄使ひはしないのである。

昨今我國では、汽車の中で握り飯を開いて食べて居る人を見ることは至難である。

更に、一般會社、銀行員にしても、街に出るか、社の食堂で食事をするが、收入のそれ程豊富に恵まれて居ない人達は、この食代が相當の負擔となるのである。従つて、出来るだけ安價なものを選んで、食事をすることになる、女事務員などは五錢のパンで空腹を胡魔化して居る。

これでは、都會生活者は健康を害さずには居られない。又それが節約にもならない。會社員や女、事務員が街で食事をするのは、「みんなが出て食べるから」と云ふ一つの虚榮でしかない。

これは何とか、會社や、役所の支配者が手辨當を推奨して、皆んなで辨當を持つて出る習慣をつけたらどんなものか、勿論切りつめた、晝食をする人が多いのであるが、サテ食堂へ遁入つて見ると、そこには人間の心的競争の意識が動いて、隣の人の食べて居る物が立派だと、つい自分も無理をしてそれ以上のものを注文する。別段おいしい料理でもなければ、榮養價の豊富なものでもない料理に、高い金を支拂はなければならないことがある。

これが一ヶ月も續くと、たちまち家庭に相當のくるひが生じてくる。多くの勤め人の中には、晝の辨當を食ふために勤めて居ると云ふ者も生じて來るのである。普通女學校出の女は二十五圓から三十圓迄だ。電車賃と辨當代を差引くと、一ヶ月の收入僅かに十圓足らずとなる、それに、おしろいや、靴下の一つも買ふと、少しの金も財布には残らない。

大學出のサラリーマンにしても、家庭を持つと獨身の女學生とあまり、變らない悲惨な状態である。

次に獨逸の子供の學校辨當はどうかと云ふと、これは又極めて簡單で紙の包から、パンの二三切れ、時に魚肉をはさんだサンドウィッチを持つて來る。

ところが、その辨當には、かならず果物が一つついて居る。リンゴとか梨とか、バナ、がそれである。やはり粗末でも、榮養はこれで足りて居る。此の點日本のサラリーマン以上である。殊に獨逸の小學生は晝前の十時になると、各々ポケットから果物や菓子を出して、運動場や、廊下でムシヤムシヤ食ふ。これは先生もやるのである。一寸日本では見られない風景であるが、一つの習慣であらう。ところが日本の小學生の辨當は、と云ふと、一番よく腹のすく時であるのに、量が尠いものや、榮養上よくないものが相當に多い。

第一、白米である上に、見榮を飾つて、卵焼があつたり、肉が入れてあつたりする。

野菜や、焼魚、干魚の類を持つて来る子供は極く少數である。

又おやつに對しても注意が足りなくて、甘いお菓子が多過ぎて、酸過剩症（アチドーチス）となつて子供を弱くする。學童の體位低下の一因が此處にあると思ふ。

子供の辨當や、おやつに對しては、もつとよく注意をして、果物や、薯や、干魚、豆なども併用されなければならない。

獨逸人と料理

六六

筆者の近くに住む獨逸人の宅へ行くと、よく食事を出された。

材料は至つてお粗末ではあるが料理が上手なので、いつもおいしく頂けるのである。

砂糖とか他の調味料を用ひられないで、それで居てうまい。總て、材料の生地の味を活かした、おいしさである。野菜でも、魚でも持ち前の味を失はないように料理されるのである。

殊に感心させられるのは、馬鈴薯一つで、三十種類位の料理をつくるのである。食事のときはいつも、この馬鈴薯が何かの形に代つて出て来る。

その二三を見たまゝに紹介すると、ジャガ薯を洗つて、これを亂切りとする。

恰度西瓜を横に二つに切つたものを、今度は從にいくつにも切つた様な形になる。

勿論薯の大小に依つて適宜の大きさに切られるが一口の頃合の大きさになつたものを、乾いた布でよく水氣を取つて、胡麻油で揚げられる。

やゝ強い火で狐色になつたところを皿に移して、食鹽をふりかけて出すのである。料理の方法は至

つて簡單であるがまづこの位シャレタ風味を持つたものは少い。栄養も満點である。由來筆者がジャガ薯を欠がさず、買入れるのはこのためである。御存じない讀者はまづ試みられる價值がある。これなら獨身者の男子にも出来る。其他、極く薄く輪切りにして揚げるもの、其他煮付けるもの、コロツケや蒸してサラダにするもの、アンの様にするもの。生のまゝスリ潰して水で布こし、をし沈澱したものとスリ粕を混合して丸め、上からメリケン粉を付けて揚げるもの等々あつて、これ等をいちいち紹介することは容易でないから此の位に許して貰ふが、これを見てまつたくジャガ薯の偉力、いや料理の手に驚いた譯である。

次には一般に西洋人は料理に對する色彩感が劣つて居て、眼を喜ばすことを知らないと云ふ。が、此の婦人は實にそれをよく心得て居て、色彩の調和を深く注意されて居た。例へば、白い薯の横に、青の胡瓜があり、黄色のトマトが添へられると云ふ譯である。

又鰯の如きも、フライにもされるし、煮付け、コロツケ、肉だんご、蒸し鰯し、等々鰯だけでも相當の種類が作られて居た。

そこで、思ふことであるが、たとへ材料は一つでお粗末であつても、これを色々の料理に依つて目先を代へ、味を代へて用ひれば、相當においしいものが食べられるのである。

殊に我國の農村では、從來材料の關係などで、あまり色々料理は作られない様であるが、生活をた

のしむためには、少し位い手数を加へてもまづ食事を、おいしくせなければならぬ。農村の青年子女が都會をあこがれる原因の一部には、たしかに農村の食事のまづいと云ふ切實な問題があると思ふ。いづれにしても、料理の材料を色々に活かして用ふことは、生活をたのしむ上に必要であるばかりでなく、愉快なことであり、しかも物資の不足した我國では、日常生活の大きな問題でなければならぬ。

獨逸人とお茶

紅茶や、コーヒーを出す場合、親しい間であれば、かならず、その人の好む濃さと云ふものを訊ねてから作られる。

一度、その人の好みが判ると、何度お茶を出されても同じ濃さに作られるのである。

これは獨逸へ留學した人の總てが同じ様に語るところで、その科學的に處理されるのに驚くと云ふことである。

砂糖にしても、角砂糖にしてもその人の好む程度に付けて来る。ある留學生が二つの角砂糖を付けて貰ふ様に注文したところが、次の時にはそれが一個になつて居たと云ふことである。

それで、その事を話すと、實は貴下の召上つたコップを見たら、約一個分の砂糖が底に残つて居たから一個勘くしたと云ふことであつた。又料理にしても、鹽加減、燒加減と云ふものが、いつも變らず一定して作られると云ふことである。

料理場には、チャント天秤計りが備へ付けてあつて、正しい量目で、必要以上の、無駄を省く様にしてあると云ふことである。

しかも、それが、日本のお料理の放送の時の様に「メリケン粉を何グラム、それに鹽何グラム加へて頂いて、それから」と云ふあの觀念ではなくて、あくまで、必要量を超過させまいとする考へから出發して居るのである。

だから料理の味も、主婦の自主的な味より下宿人の好みを尊重し、材料が省けるものなら、それによつて節約し多くを要するものでも、秤によつて使用量の限度を定めると云ふやり方である。

調味料を直接大瓶から注ぎ込み、入れ過ぎて、水を加へ、又薄め過ぎて、やり直し。と來る不經濟な方法は獨逸の主婦に限つて無い様である。

四五年前獨逸へ旅行した人の話に依ると、鶏の卵子が一個約邦貨の四十錢見當であつたと云ふことである。

これは特に、獨逸としては制限されて居る物資の一つであつて、高いのも無理はないのであるが獨

逸は一般に天然の生産物資に乏しい國である。

不足勝ちな生産、その上物資が充分でない上に、國家が窮乏のどん底に陥つたのであるから金もない。勿論外國の品は一錢も買ふことは出来ないと來て居る獨逸であつて見れば、そこに科學的な、生活を實行しなければ立ち行かない結果となるのである。

これが萬事につけて、無駄を省き、出来るだけの節約生活を實行させる根本原因であり、國家全體がよく働いて、生産を擴充する一方、貿易を盛んにしなければならない理由でもある。

この獨逸國の狀態は、そのまゝ現下の我が國の狀態であると思ふ。

「限られたものを、いかに活用するか、」これが節約生活の根本問題でなければならない。

獨逸人と煙草

筆者の友人は、戦後六年目に日本に來た獨逸人であるが、とても煙草が好きである。

その友人は、いつもバットを用ひて居たが、決して卷いたまゝマッチをつけない。

いつもポケットにタバコを卷く紙を用意して居て、煙草がほしいと思ふと、バット一本の三分の一

を折つて、中味をほぐし、自分の持つて居る紙に巻き代へて、たちまち細いけれども一本の巻タバコを作つて、火をつける。バット一本が、この友人の手にかゝると、三本になる譯である。云ふまでもなく、一函のバットが三十本になる。

この友人の意見では、「人間が、煙草を好むのは一つの習慣であつて、害はあつても別に榮養になる譯ではなく、欲しいと思ふときの間に合へばそれで足りるのだ、巻煙草一本の量は一回用ひるには自分には多過ぎる。それにあのまゝ用ひると三分の一は捨てゝしまはなければならない。」と云ふのである。それ以來筆者も、大いにそれを勵行して居るが、なる程喫ひ過ぎる心配もなく、巻くのが面倒であるから自然量が減るのである。これが健康の上にも餘程よい様である。

又ある人は、煙草を喫つて居るのを見ると、あれは獨逸人だと直ぐ判ると云ふ。なぜかと云ふと、獨逸人は、食べる時でも、飲むときでも、喫ふときでも充分その味を、たのしむ習慣があつて、一口喫つては、靜かにその煙を吐き出しながらよく味つて居るが、他の國の人にはそれが見られないと云ふことである。

なる程一面の見方であらうと思ふ。

煙草などは、凡そ無意味に吹かして居るものが多いが、落付いてよい思案を生むことになれば、たばこを喫ふにも亦大いに意義がある。

次に獨逸人は、どんな煙草好きの者でも、執務中は絶対にタバコを用ひない、欲しくて、どうにもならない時などは、空のパイプを、くはへて、がまんをする。それでも耐へられないときは、便所の一二分を利用して便所の中で喫ふのである。それ程欲しいタバコであつても執務場所では一切用ひないのである。

先日獨逸から歸つた友人が、日本へかへつて一番不快を感じたことは、會社でも、役所でも、所かまはず執務中自分の机で煙草を喫ひながら仕事をして居ること、要談中もブカブカやりながら話をするのであつたと、こほして居たが、全く場所を辨へず、事務室の中が、煙で一ぱいになるなどは實によくないと思ふ。

これは獨逸人に限つたことではなく歐米の各國は總て、執務中は喫煙しないと云ふ、よい習慣が出来て居る。その區別がないのが、支那と朝鮮と、印度と、シヤムだと云ふことである。

日常の生活と云ふものは、多くは一つの習慣で、執務中煙草をやらなければ、病氣をするのでもなければ、損をする譯でもない。たゞ何氣なく喫ふのである。

執務中喫ふことが、どうもよろしくないと云ふことであれば、決心次第では禁煙できることであるし、休みの時間もあることだから、これは一つ役所とか、會社の社是として實行したらどうだろう。それだけ仕事の能率も上るし、健康のためにもたしかに良い筈である。

獨逸人とビール

煙草の話が出たので酒について書いて見よう。

獨逸はビールの元祖だと云はれて居る。

それで、とても味の良いビールが澤山造られる。

従つて値段も安くて、日本ビールの半額以下であらうと思ふが、このビールを獨逸人はとてもよく飲む。と云つて、讀者にビールの宣傳をする譯ではない。

尤も酒を飲む時は、休養して居る時で、一日の仕事を終へた時とか、休日である。しかも獨逸人は休養を徹底的にしたのしむ國民である。

そこで、そのたのしい時に飲むビールであるから、飲み方も徹底して居る。街のレストランのテーブルの上には、たとへその客が婦人であつても、かならずビールのデョッキが置いてある位に、獨逸の國民はビールを飲む、獨逸のレストランで、獨逸人同志がビールを飲む競争をして居たのを見ると、その時の御大將は、大デョッキに二十一ばい平けて居た。しかしこれは、獨逸では驚く内へ遣入らないと云ふからたいしたものだ。

又、家族連れのテーブルで、一家揃つて、子供までビールを飲んで居ると云ふから、獨逸人のビー

ルに對する考へ方はサイダー位のものらしい。

「酒は飲んでも飲まいでも。」

ところが、いかに酔つても、チャントやるべきことは忘れないのが獨逸人である。

出る時は、テーブルの相客に、たとへその人が知らない人でも、外國人であつても、一寸目禮をして出て行く。

出かけに、よい氣持の千鳥足がたゝつて、チョツキが、下に落ちて壞れた。するとボ、ーイを呼んで、その代價を支拂つて、「手數をかけた」と云つて出るのである。

又ビールについては次の様な話もある。

日本へ來た、商品見本船の船員さんも、やはりビールは飲んで居たが、ビールの空き瓶を、ためて置いて、これを屑屋に賣るのであつた。

ところが當時ビール瓶は一本一錢見當であつたが、獨逸人の空瓶の始末は、瓶のセンから瓶にかぶせたコモス、それに函の釘に至るまで一本も捨てずに取つてあつた。
無くなつたのは中味だけだ。

それで屑屋の方でも、感心して、一本一錢三厘まで出したのである。

しかも、このビールの仕入はどうしたかと云ふと、同じ食料品を買ふ店へ注文して、一度に大函を

。る來出がとこるす濟完な債國が我、りなと億十六はに目年三十六
。るあでのるなと字數のこ、で酒節減半、同年々三、が人萬千一

注文する。その代り値段をウント安くせよと云ふ。食料店の方でも、他の品を、買つて貰へるのであるし、それに大函が一度に注文されて、現金であつて見れば、安くしない譯に行かない。そこで普通の値段よりも一本について五錢も安くして三十七錢で納入したのであつた。

その上、飲みかすの瓶代一錢三厘を差引くと、普通よりも一本について六錢三厘も安くビールを飲んだことになる。當時日本人でもこんなに安くビールを飲んだ者はあるまいとのことである。

獨逸人と服裝

獨逸人の服裝は、一般に質素である。

青年などは、日曜日以外は三ツ揃を着て町に出る様なことはしない。尤も一般の會社や、銀行へ勤めて居るのは別として、多くは、セーターやシャツの上着に、ズボンである。

殊にオシャレをした氣障なものなどは全くない。

しかし服裝は質素であつても、ために良いものを着込んで居る。又、ネクタイとかシャツとか、靴下などは、服の色彩によく調和させて、實に着こなしが洗練されて居て、第一清潔である。だから、

シャツや、カラー、ハンカチーフはいつも白いし、臭氣を衝く様な服装はして居ない。

破れはチャントつくろつて、着用して居る。筆者の友人などは、ズボンのヒザの破れをつくろつて着て居る上に、靴下にも布があてゝある。それで居てキレイに洗濯がしてあつて、ズボンの折目も正しくつけてあるから、少しも體裁は悪くない。

むしろ奥ゆかしさがあつて一層親しめるのである。流石は獨逸人だと何かにつけて感心させられることである。又服装は一般に薄着で、合服、合オーバーなどは用ひられないのが普通である。

そして主人のワイシャツから、子供の服自分の着物に至るまで、獨逸の婦人は、出来るだけ、自分の手で作ることゝたのしみにして居る。

背廣の古くなつたものなどは、宅で裏返しされて再び用ひられる。

こんな風であるから、凡そ無用の服飾、装身具と云ふものは少しも用ひないのである。ところが、日本の服装は、至つて混み入つて居て和服に、洋服、洋服に合服、合オーバーと云ふもの

まであるが、外國では、この合服と云ふものを用ひない。(尤も氣候の關係もあるが)、ところが日本の様に合服の上に、合のオーバーを着るに至つては、まったく贅澤過ぎるし、ホンの僅か一二ヶ月のために特殊な服を作ることとは全く不經濟ではなからうか。

暑い日などは、ワザワザ、合オーバーを脱いで持つて歩いて居る。筆者はかつて合オーバーを着用に

及んだことがない。

少し寒むいと思ふときは、下のシャツで加減する。だから、オーバーを脱いで持つて歩かなければならない心配もなく、それで少しも不便を感じないで長らく洋服生活を續けて居る。

合オーバーを作る費用をそれだけ、服の方へ加へて、もつと氣の利いた服を作つたら、どうだろうか。安い服へ、無理をして安い合オーバーを着て汗を出して居る様子は賞められたものではない。

更に、時節柄、服装の經費を縮少するために、夏と冬の國民服を作つて、國民一齊に同じ服を着ることにしたら、合服や合オーバーも無くなるし、服装に、うき身をやつすこともなくなるだろう。

婦人に至つては又格別だ。洋装を着るなら安くてもよいから仕立てだけは立派なものを、それが似着かない人は、絶対に洋装を廢して和服にした方がどれだけ良いか判らぬ。殊に男女共に夏羽織などは廢止したらどうだらう。

獨逸人と洗濯と衛生

これも、商品見本船の話であるが、どこの國の船でも、港に遣入ると相當に洗濯物があり、これを専門に廻る、洗濯屋さんが居るが、獨逸の船は、長い間碇泊して居りながら、少しも洗濯物を出さな

い。

そこで、その洗濯屋は、獨逸人位ひ不潔な國民はない様だ、少しも洗濯物を出さない。とこほして居たが。實はそれとは正反對で、獨逸人位ひよく洗濯をする國民は居ないのである。

船員が外へ洗濯物を出さなかつたのは、勿論洗濯代を省くためでもあるが、毎日朝食後の洗濯時間に、各人が洗濯をしてしまうので、外へ出すものが無いのである、船員に限らない。一般婦人はもとより、青年も、まだ獨身ものなどは盛んに自分で洗濯をして、いつもサツバリとしたものを身につけるのである。

しかも、獨逸の家庭では、藥品を用ひて、晒したり、クリーニングされるのであるから、所謂日本で云ふ西洋洗濯が自由に出来る譯である。

そして日曜日毎に敷布や被布が取替へられるのである。月曜日が洗濯日となつて居るのもこれがためである。

洗濯に次いで獨逸の家庭は、寢具をよく乾かす。お天氣のよい日などは、かならず、毛布や、敷布、それに衣類を日光にあてるのである。

これについて、ある獨逸の婦人が話したところに依ると「細菌は日光の無いところに繁殖するもので、獨逸では、つとめて窓を開けて日光を室内へ入れるのです。

獨逸の學者が發表したところに依ると、日蔭がどんなに恐ろしいものであるかと判ります。その博士は二本のタオルに依つて次の様な實驗をしました。

それは、二本のタオルに數萬の細菌をつけて、一本は、日光の直射するところに、一本は日蔭に置きます。そして、三十分の後にそのタオルを調べて見ると、日光に直射したタオルの細菌は全部死んで居たのですが、日蔭のタオルはそれとは反對に、細菌は數倍にも殖へて居たと云ひます。

今このタオルの細菌を全部死滅させるには、高熱のアイロンの熱が必要だと云ふことです。それで日光の直射の殺菌力の強いことがお判りでしょう。」と話した。

たゞ日光がよいからと云ふのでなく、此處まで、たしかな考へをもつて、日光に向ひ、衛生に注意するのであるから、決してズボラはしない。

事毎に日光に對して注意をするのである。今は政府の命令で禁じられて居るが、一時獨逸の婦人も子供も、男性も身に一物もつけず、素つ裸になつて、野外で運動した時があつた。裸體操がこれで云ふまでもなく全身に日光を浴びて、健康を増進しようと云ふのである。

殊に獨逸の北部では、今もなほ 正月が過ぎると太陽の祭りと云ふのがあつて、日光に、感謝し、光りを喜び合ふ日がある。

獨逸人と清潔と衛生

醫學の進んで居る獨逸では、清潔と、衛生に對しては最善の注意が拂はれて居る。

獨逸の街に這入つて、どこを通つて見ても、掃き清められてある様な感じがすると云ふことである。裏通りを通つて見ても紙屑一つ轉がつて居ない。

家々の金具は光つて居る。ドアの引手もそうである。

住宅の窓のカーテンは、純白で、黒く汚れたなどを見ないと云ふ、勿論窓ガラスは一つの曇りもない。

オリムピックでは、獨逸の選手が揃つて純白のユニホームを用ひて居るが、これは、云ふまでもなく清潔清淨な精神を表徴したものであつた。

獨逸では、黒いカラーや、黒い爪を長く伸ばして居ると、相手にされない。紳士として交際されないのである。

街のレストラン、家庭の食器は、いつも光つて居る。又獨逸の船員が船を手入して居るのを見たが、甲板と云ひ、船室と云ひ、各自が洗つたり、拭いたりして、ピカピカ光つて居て、それこそチリ一つ

甲板と云ひ、船室と云ひ、各自が洗つたり、拭いたりして、ピカピカ光つて居て、それこそチリ一つ

落ちて居ない。

自分達の服装も、労働する場合は別として、外出する場合は、手先も、顔も、ヒゲも剃つて、自分で洗つたものを身につけて出ると云ふ譯である。

又獨逸の小學校では、毎週學校で清潔検査をする。そして兒童の爪や、頭髮や、ハンカチーフや、服装、靴下、下着と云ふ様に兒童の清潔狀況に對して注意をする。

最近我國でも學校衛生は大變發達して、清潔検査もやれば、栄養問題についても注意し、其他の衛生についても、係の先生があり、學校看護婦もあるが、問題は家庭である。

學校では、あらゆる注意が與へられ、係の先生は、日夜そのことに心を盡して居るが、どうも家庭がよろしくない。兒童が一度家にかへると。

衛生も、清潔もあつたものではない。一寸のことで、よい習慣を作ることが出来るのだが、

食事の前に手を洗はない。一日中土にまみれた足でそのまゝ寢床へ這る、しかしそれを家庭では別にやかましくも云はない様である。

家庭の炊事場も汚ない、屑箱には蟲が居る。家の前の溝にはボロボロがウヨウヨして居るが、これがやがて蚊になり、人の血を吸つて、傳染病を媒介すると云ふことなども考へられて居ない様である。電車に乗つて見る。美しく化粧された婦人も不潔である。頭髮がブンと臭いと思つて、振り向く

と耳の中が汚ない、爪が黒い、下駄は洗つてない。

襟が土色をして居るなど見かける。

紳士はどうかと云ふと、これがまた甚だよろしくない。帽子は三年越しにブラシ一度もかけられて居ないのがある。髪も汚れて居る。カラーが黒いのが眼につく、爪に對する注意が存外足りないのがある。ワイシャツが汚れ過ぎて居る。

等のものが相當ある様である。街に唾を吐く（但しこれからは罰金もの）紙屑が所かまはず捨てられる。裏通りと來たら、これは又、お話にならない程に不潔である。

街の料理店の食器がボロで拭かれて居て、營業停止の處分を受けたものなぞもある。

不性さへしなければ、清潔にすることは直ちに出来るのである。まづ自分から、次に家庭、次に近所、そして街を、村を、キレイにして、日本全體をもつと、もつと清潔にしたいものである。

これはお互が一人一人一寸した注意で出来ることである。

又、日光や、空氣に恵まれながら日本に病者の多いのは、一般の家庭が、清潔、衛生に注意しないで、不潔、不衛生な生活をするからである。幼児の死亡率も、結核患者も、トラホームも、大いにこれが原因して居ると思ふ。

獨逸人と整頓

整頓とか整理と云ふ點では、獨逸人に及ぶものはないとさへ云はれて居る。

まづ家庭について話して見よう。

一つのネチ廻しが今必要な時に、母が子供にそれを持つて来るように命じる。すると小さい子供でも、すぐそれを持つて来る。

道具類の入れてある。場所は、チャント一定してあつて、家族のだれもが、それを心得て居るのである。

又「使つた後は、かならず元へ戻して置く、」これが獨逸人の習性であつて、やかましく云はなくても、自然に元のところへ入れるのである。決して使ひはなしに、そこらへ捨てゝは置かない。従つて一度そこへ入れたら、いつまでもその場所を代へることがないのである。

金槌が必要な場合に、家族總がゝりで、長い間サガシ廻ると云ふ様なことはない。新聞級の置き場所も、ブラシの場所も、ボタン入れも、紐の入れてある場所、家庭築のある場所が總て、整然として、定めてあつて、たとへ暗くても、いつでもそれが取り出せるまでに整頓されて居る。

炊事場所でも調味料一切の場所、皿の部、フォークの部、そしてタワシの横に磨砂があると云ふ様

に、總て順序よく整頓されてあつて、あれを！と思へば直ぐ手が動いてそこへ行く、それで少しも騒ぐことはない。萬事がそれである。

書籍などの保管整理は、書庫の番號、棚の番番が記入された、カードを作つて、これで索引が作られてあるから、あの本が欲しいと思ふと、そのカードを見ると數千冊の中から二三分かゝらないで、求める本が引き出せるのである。

先年獨逸へ行つた人が、オリムピック映畫會社を訊ねたところ、三十萬呎もある映畫の場面がチャント索引に依つて、整理されて居て、日本選手村社の轉んだ場面が見たいと云へば、たゞちにそれが引出せる仕組みになつて居たと云ふことである。

その時ヒットラー總統が手に力を入れて、村社を聲援して居られたと云ふが、そのフィルムは、と訊ねると、それはこのケースにありますと、直ちにそれが出されると云ふ譯で、整理、整頓、にかけるも亦天才的である。

そうしたよい習性は子供の頃からあるものと、見へて、試みに子供の室を見ると、子供ながらに、帽子を懸ける場所、ランドセルを置く場所、が紙に書いて貼りつけてある。又、繪本の場所、教科書の場所、玩具の場所と自分でチャント置き場所を定めて、置いて、萬事自分で整頓するのである。斯ふしたことについて、母親は一切關係しない。これは又不思議な位放任主義らしいが、子供が總て

を處理して居る。

街の番地なども、偶數番地の側が右であれば奇數番地の側が左、と云ふ様になつて、それが通りになつて居る、しがも、その家の番地が大きく記入され恰度人の眼の高さのところに示してあるので、家を訪ねる場合など至つて便利であつて、三十分も一時間も訪ね廻る必要がないなど、人々が便利をすることはそれだけでも、大きな時間が省け、手數と苦勞が助かる譯であつて、こんなことは國家全體から見てもどれだけ能率が違ふか知れない、都市計畫其他に多大の參考になると思ふ。

獨逸人と勞働

獨逸人は勞働することを人間の責務と考へて居る。だから自ら進んで勞働に従事するのである。

又、一たん與へられた仕事、職業はこれを天職と心得て、眞剣にその仕事に従ひ、不平不満を持つものがない。

しかも、職業に依つて貴賤を考へることもなく、總ての勞働は神聖であると云ふ信念に依つて活動するのである。従つて會社でも役所でも、工場でも、陰日向をしないで皆んなが忠實に勞働する。

家も外も、街も村も、獨逸は國を擧げて勞動する。「獨逸國の發展のために」。だから、獨逸國が今日の一大發展をしたのである。

役所でも、工場でも従業員は、始業時間前に準備をし、作業服に着換へて身構へて居る。

そして、始業時間の合圖と共に總てが一せいに仕事に取りかゝるのである。

仕事が始まるや、總てのことを忘れて、働らき、決して途中で雜談を交へたり、喫煙をすることなく、靜肅に懸命に働く。或る時、獨逸人の工場には勤務時間中面會人が來たが、本人は「今は就業中であるから」と云つて休みの時間を利用して面會すると云ふ譯である。

その代り、休憩時間が來ると、ピタリと働く手を休めて、休養する。今少しだから、ついでにこれを片付けて、と云ふことは、許されないし、又そうする人も居ないのである。

それについて、獨逸船が神戸に入港して居る時、船員は陸から何物かをトラックに積んで來て、本船に積み込んで居たが、晝の休みの時間が來たのも知らず働いて居ると、上の者が來て休みを知らせその仕事を中止させた。

又獨逸の工場を見學した人の話に依ると、見學者が工場に這入つても、一人として仕事から眼を放なして自分の顔を見る者もなく、仕事に夢中であつて、話し聲もしない至つて靜かである。仕事は一般に起つたまゝ行はれ腰掛や椅子は用ひられない。

多くの仕事は分業で行はれて居るが、自分の受持の部分は完全にして、次の人の迷惑にならない様に各自が細心の注意をして居る。

仕事に必要な材料はたとへ充分に與へられて居ても決してこれを亂用しない。材料の切り屑や、ボロ、油の類にしても工場内に散乳させないで、一定の函へ入れられる。

等はその一例であるが、獨逸政府は、労働そのものに對して、常に國家の目的に於て總ての労働の上に喜びを與へて居る。

即ち如何なる労働と雖も、それは、國家を隆興せしめるためであることを、深く國民の頭に徹底し、國民は又、國家のために、と云ふ強い信念と希望をもつて働くのである。

それで獨逸の労働は一層神聖化され、いつでも國民の労働力の最大限が發揮されて居るのである。

獨逸人の休養

切りつめるだけ切りつめ、我れを忘れて働く獨逸人はさぞかし窮屈な思ひをすることであらうな生ぞと考へる必要はない。

活に徹底し、勞働に徹底する獨逸人は、又休養に對しても實に徹底して居る。

いつも勞働服で、せつせと働いて居る商店の小僧さんも、イザ日曜日となると、暗れ着に着換へて、悠々公園を散歩する。郊外に出る。工場の従業員も日曜日は、勞働服を脱ぎ捨て、家族と共に街へ、教會へ、公園へ、レストランへ出掛けるのである。

又、村々の農夫は今日こそ鋏を捨て、或は街へ、教會へ、公園へ行く。會社員も役所の人も、女の事務員も、或はドライブに、或は映畫に公園に出る。そこで獨逸の日曜日とか祭日は、これ等の人の波で街も、公園も、郊外も、教會も、超満員となるのである。公園のベンチには若い青年と若い婦人のさゝやきも見へる。若い夫婦の散歩もあると云ふ譯で至つてなごやかである。

働くことをたのしむ獨逸人は、亦休養することを此の上なく楽しむ國民である。

勿論日曜日は法律に依つて國家が休養を命じて居るのであるから、街の商店は全部戸を閉めて營業しない。勿論工場も、會社も、役所も、そうである。僅かに花屋とパン屋だけは一定の時間營業が許され、レストランは、公然夜遅くまでの營業を許されて居る。

そこで獨逸の日曜日の街のレストランは、それこそ大入の盛況で、そのレストランで殊に目を惹くのは、多數家族連れでテーブルをかこんで居ることである。

日曜日は一般家庭で料理は作られない向が多く、外で食べ、或は宅へ運ばせて食べるのである。

又、日曜日は、これ等休養する者のために、郊外行きの列車が特別に仕立てられて、三割見當の割引がある。それで土曜日から日曜日へかけての旅行者、登山者、郊外散歩等、多數の人々が、山野に、一切から解放されて、明日の力を養ふために出掛けるのである。

又ある者は各々好きな運動を、あらゆる廣場へ行つて行ひ、或は新緑の樹々の下に、一家が集まつて青い芝の上に日光浴をする光景も見へる。

或は郊外の田園にはかうした都會人のために、一定の入場料金で園藝場が開放される、そうして都會の生活から解放せられた、家族、青年、娘達は、朗らかに歌ひながら、一日を土に親しみ、日光を浴びて、大自然の中に過すのである。

そして又、日曜日は夜遅くまで、休みの一日を心行くばかりたのしむのである。

そこで獨逸の日曜日の状況を見る人は、「よくもこれだけ遊べるものか」と思ひ、「獨逸人は實によく遊ぶ國民だ」と思ふと云ふことである。

しかし「よく働き、よく遊ぶ」これは獨逸人の生活である。「よく遊ぶから、よく働けるのである。」此の邊の區切りは、我國でも今少し徹底したいものである。

休養の一日は全國民が總てを忘れ總てから、解放されて休養し、そして新しい力を養つて、再び月曜日から、服裝も心も一變して、全國民が一齊に眞剣な勞働戰線に火花を散らすのである。

だから、國家が政府に勞働戰線の一局を有し、ひたすら全國民が、喜びの勞働をする様に心掛け、休養に依つて更に次の力を養ふ様奨めるのである。即ち休養も亦一つの心身鍛練であるからである。

獨逸人と娛樂

獨逸バツリヤの山莊に住まつて居るフアゼル博士は、もう六十を、いくつか出た人であるが、それで居て、ピアノを弾きヴァイオリンを奏するのである。

その博士の宅では、木曜日の午後から夜にかけては、家庭團樂の夕べであつて、その日には、家族一同でたのしい演奏會が自宅で行はれるのである。

父がヴァイオリンを弾くと、母がピアノ、娘が歌ふと云ふ譯であつて、六十の父が眼を細くして、母の、そして、わが娘の歌ふ聲に聴き惚れる風景は何としても嬉しい極みである。獨逸では娛樂は生活の一部として、どんな貧し家庭でも、村の家でも行はれる。

此の點どうも日本の家庭には娛樂がなく、娛樂が家の外にあるのではあるまいか。

工場から歸つた青年は、夕食を終へると、窓際に出て、ギタを弾き、若い娘は、或は歌ひ、或は、

生れ故郷の郷土色豊かな踊りを踊つてたのしむのである。

人間の實生活に娯樂の大切であることは、云ふまでもないことであるが、獨逸政府は、特に此の點を重視して國民文化局に音樂部の膨大な組織を有し、こゝで、全國民の音樂に依る精神指導をして居るのである。

舞踊に對しても亦同様に大なる關心が拂はれて居る。

即ち國民の娯樂を通じて、ナチス獨逸の精神を徹底しようと云ふ方策であつて、國民が娯樂に對する考へも亦極めて積極的である。

家族的なものは別としても、社交的なダンスとか、音樂會と云ふものは、しかし、單なる一つの團體とか部落の意のまゝに行ふのではなくて、國家に指導者があつて、多數人が集つての催し物は、獨逸民族の音樂會であり、獨逸國家の音樂會、舞踊會である。

即ちそれ等の娯樂を通じて、民族意識を高揚すると云ふことが主眼となつて居るからである。

そこで、映畫にしても、劇にしても、音樂會にしても、又舞踊にしても、國家が映畫を作り、國家が劇を監督し國家の手で音樂會や舞踊會が開かれるのである。

従つて一流大家の催し物の如き、實に安價な入場料で、觀たり聽いたりすることが出來、國民は自然にたのしみながら國家觀を強くし、たのしみながら國民相互の團結を強固にするのである。

獨逸國家は働くことについても嚴重な訓令を發すると共に、休養、娛樂に對しても亦嚴重に命令するのである。

「たのしませて働かせる。」これが獨逸政府の國民に對する總てである。統制の本案獨逸と云へば何もかも規則づくめで、民心を氷結させる様に思ふのは大變な誤りで、その正反對を行く獨逸は、流石統制の本質を心得て居ると思ふ。又國民にしても、働いて居るのか遊んで居るのか判らず卑俗な娛樂に眼を血走らせて居るのとは大變な相違である。

殊に、家庭内に於ける娛樂を持たない、日本の生活はあまりに淋しいと思ふ。勿論一部にはそうしたことがあつても、これは大衆のものではない。

醇化された娛樂は、生活を向上させるばかりでなく、人生を明朗ならしめるものであつて、常に歌つて暮らす獨逸人の幸せをわれわれは良く味つて見たい。陰慘なジメジメした家庭生活は、日本の家庭から追ひ出さなければならぬ。

と同時に、全日本の女性、日本の主婦は、もつともつと、家庭内の娛樂について考へ、苟しくも主人の娛樂場を家の外に置かないだけの用意があつてもよいと思ふ。それにはまづ婦人の娛樂に對する準備が必要であると思ふ。

獨逸人と花

「窓に花を！」これは獨逸政府が、常に獨逸の家庭にすゝめる言葉である。

それがためか獨逸の家々では、窓に色々の草花を植へて美しく飾つてある。光つたガラス窓の白いカーテン、その下には色々の鉢植の草花が置かれてある。これはたゞに家庭が明るくなるばかりでなく都市美を増し、人と共に町に生命を、生活を生かし、そして國家を生かすることである。

更にもつと大きな收穫は、草花を愛する心は、總ての、邪念を消し、精神に糧を與へるもので、人々が美しい無心の花に接することは、それから多くの教訓を得るものである。

われわれは、もつと草花を愛する心にならなければならないと思ふ。人生の仕事は日々の勞働を完全を終へ、火花を散らして働くばかりが仕事ではない。

花を知り、自然を知り、そして人生の如何なるものであるかを知つて、そこから湧き出るものでなければ本當の力とは云へない。

春芽立ち、夏長じ、そして秋に實を結ぶ花の姿は、同時に又、われわれ人間の姿でもあると思ふ。われわれは、自然の姿から本當の人生を見出さなければならぬ。

獨逸の商店が日曜日には全部戸を閉めて、營業を休むのに。パンと、花を賣る店だけは、一定の時

間營業を許されて居る事實は、獨逸國民が如何に草花を愛し、花が、パンと同様に生活の上に缺ぐことの出来ないものとなつて居るかを物語つて居る。

パンは肉を、そして草花は、その人の情操を養ふ糧でもあらうか。

政府が、それを許可して居るところに、草花による國民に對する無言の、教訓のあることを見逃してはいけない。

「うるほひのある人生」。それは大なる國民的試練と、人生の苦闘を越へた者のみの、心から求めるものであるからである。

大戦にあの大試練を受けた獨逸國民が、花を愛することも亦當然であると云はなければならぬ。

又獨逸の花屋さんは、世界の花屋と連絡が出来て居て、獨逸からニューヨークの友へ花を届けたいと思ふ時は先方の番地と花の名を注文すれば獨逸の花屋は連絡のあるニューヨークの花屋へ電報して即日ニューヨークの友人のところへ花が届けられると云ふ。

花に恵まれた日本人は、そして花の心を知る日本人は、もつと花を各自の生活の中に取り入れなければならない。

獨逸人と自然

「ゲルマン民族は、森の中に育つた。」

それがためかどうかは知らないが獨逸人が野を愛し、山を愛し、そして森を愛することは、一通りではない。

獨逸で有名な、ワングフォーゲル（渡り鳥）と云はれるのは、青年が休みを利用し、或は休暇を利用して、村から村へ、縣から縣へ、歩るき、山に伏し、或は野に宿つて、旅行を續けることであるが、今も獨逸の青年の間には、この旅行が旺んに行はれるのである。

だから、どの村々にも、この旅行者を泊める粗末な宿所がある。これは青年が自然を愛しての旅行であることは勿論であるが、この旅行中、名勝、古蹟を訪ねては、祖國の眞の姿を、それ等古蹟の中から發見するのである。

ナポレオンの大軍が侵入した、エナの町に遁入つては、愛國の情を焦がせ、偉人の聖地に到つては、自らの體内に脈打つ血を湧かせ、村に遁入つては、農民の活動を見て、一粒の麥の尊さを知り、村々の宿所に宿り合せた、青年は、互に語り合つてはゲルマン民族の同じ血が、お互のからだに脈打つて居ることをしかと自覺するのである。

此處に獨逸魂が、養はれて行くのである。

「人を見たら盗人と思へ」の教訓を逆に、「國民は互に抱き合つて進まなければならない。」と教へるのが獨逸である。

ワングフオーゲルは、此の意味に於て、意圖深いものがある。われわれ日本人は、もつと、もつと結合しなければならぬ。もはや、お互は他人であつてはならないのである。この偉大な獨逸人と雖も、大和民族の如く純潔な血をもつては居ないのであることを、お互は今こそ深く自覺しなければならない。「世界一純潔な血をお互の身體の中に流して居る日本人は、世界一仲善く強力に、手を握り、相抱き合つて起たなければならない。」

お互の間には反目もあつてはならない。まづ裸になれ、そして、たと一心に抱き合ふことである。民族的眞の力は、此處より生れる！

國家の隆興は、此處より出發する。

お互は今眞に、此處に目覺めなければならない重大な時が迫つて居ることを知らなければならない。

伊太利の血が、伊太利國を、獨逸の血が獨逸國を、今日の隆興に誘つた様に、日本の血は亦大日本帝國を、更に興隆し、これを、より世界に發揚しなければならないのである。

獨逸人が自然を愛することは、云ひ換へれば、國の山河を通じて、祖國を愛することなのである、休日的一天を靜かに新緑の森の梢に聳く小鳥の聲を聴き、古跡を訪ふて、我れ等の祖先の姿に學び、神社佛閣に詣で、は、亦我が國體の尊嚴に觸れることは、大いに奨勵されなければならない。われわれは、自然を通じて祖國を知り、祖國を愛する熱情を、より正しく養ふことに心掛けなければならぬ。お互は祖國日本の眞の姿を今一度見直さなければならない。

獨逸人と大形時計

よく獨逸人は、古い時代の大形時計を持つて居る。

そして、人前でも平氣で、それを出して眺めながら、「これはお祖父さんの持つて居たものを、父が貰ひ、それを又私が貰つたのだ」と云つて居る。

するとその大形時計は、親子三代も大切に用ひられて居ることになる。

こうして時計を出して見る度に、我が父を、祖父を憶ひ出して居るのである。

筆者はこれを單なる節約と云ふよりも、この大形時計から獨逸人の傳統に對する深い愛着と云ふも

のを感じないでは居られない。

日に進み、月に進む科學の國獨逸であるが、傳統の尊さは、あくまでこれを失はない。

例へば、父がレンズの磨き工をして居たとすると、自分も、そのレンズを磨くことを職とする。更に祖父もレンズ磨きを業として居たと云ふのが多く、決して簡単に自分の職業を變へる様なことをしない。だから、獨逸は世界に誇る優秀なレンズが作られるのである。

祖父の側でレンズの製造を見て居た父が、祖父の缺點を改良し、父の仕事を見習つた子供が、又その父の缺點を補ふのであるから、作られるものは自然優秀になる譯である。

機械工の子供が、機械を作り、パンを作る父の子がパンを作るのであつて見れば、自然にためによいもの、より優秀なものが作られる譯である。

これは、傳統を愛することであつて、實に羨しいことである。勿論自分に特殊の才能があつて他の職を選定すると云ふことは、獨逸と雖も相當にあるであらうが、自らの特長も心得ず、又子供の長所も知らない親が、單に、時代と共に進まなければならぬと云ふ考へで、祖先傳來の田地を賣つて、その息子を大學へやり、會社員や、役人にすることは、一應考へられなければならないことではあるまいか。

日本では、年々農村を捨て、都會に出る青年は實に二十萬人もの多きに達して居る。だから、農村

に青年がなく、女學校出の子女も亦都會に走り、その數割が實に哀れな末路を告げて居るのである。これは國家にとつても亦大きな問題であると云はなければならない。

忠勇なる上等兵が村に歸つても、女學校出の婦人は、村には一人も待つては居ない。

殊に、ある村の村長さんは、金時計を持ち、大學に通ふその息子は高價な腕巻きと、高價な寫眞機を持つて遊び廻り、村を忘れて、田を耕すことを省みない。

そして息子が、運よく就職でもすると、從來の農家は一變して茲に會社員、役人の家になる。

やがて、落付いた古風な藁ぶきの屋根が、赤煉瓦の文化住宅となり。更にその娘は優雅な日本服を捨て、洋装、斷髪的女となるのである。だから、これを見る村民は落付かないのである。

人々は此處に、發展があると云ふであらうが、尊い日本的な傳統を振り捨て、田舎が都會化し、都會が擧げて西歐化して、果して、日本は健康體なりと云ひ得るであらうか、獨逸人が祖父の大型時計を愛するが如く、祖國日本の傳統の美しさは、飽くまでこれを失つてはならないと思ふ。

又獨逸では、偉人、英雄、藝術家等の古跡は立派に、これを保存して、一詩人の住宅と雖も、椅子も、調度品も、そのまゝに保存されて居ると云ふことである。これも傳統を愛する現はれであるが、

我國では紫式部の墓所が、どこにあるか、それを知る人さへ稀れであらう。

獨逸人と靴

話は再び微に入つて行くが、獨逸人は、どんなものでも、最後まで有効に使ふことを忘れない。

商品見本市の船員達の靴は、多くは破れて居た。しかし、足の脂が出る位の破れ方であると、その破れ穴ヘツクを宛てゝ、縫ひ合せその上にクリームを塗つてこれを用ひて居た。

船員の話では、斯ふして用ひると、足の脂が出る様に破れてからも尙三四ヶ月は使用に堪へること、であつた。

指

そうして労働靴は、粗末なものを修繕しながら、用ひて居るが、外出用はチャント磨いて持つて居るのである。

東京の大森に獨逸學園があるが、その生徒は、輕快なズツクの編上靴を用ひて居た。勿論全部ではなかつたが。運動したり、走り廻る子供には革の靴よりも、餘程この方が樂でよいと思ふ。

學校の子供のことで思ひ出すことであるが、先日讀賣新聞の女性の立場欄に、次の様な記事が出て居た。

それに依ると、娘が、今年ある女學校の試験を受けて、入學を許可されたところ學校からの通知で

文房具、靴、服、靴、帽子と云ふものを一切學校の規定に従つて購入せよとのことであつた。

ところが服裝も、靴も靴も帽子も、總てまだ古びたものでもなく、規定のものより僅かに型が變つて居るばかりであるから、暫く從來のものを用ひさせて頂き度いと再三學校へ話したのであつたが、それは、許されなかつた。そこで仕方なく、市價よりも高價な規定のものを全部揃へて、入學させることにしたのであるが、その母は、この非常時と云ふのに折角利用出来るものもそのまゝ廢物にしなければならぬと思ふと、どう考へて見ても馬鹿馬鹿しくてならず。そんな事の判らぬ學校へ大事な子供を預けることは出来ないと思ふばかり、子供は折角入學したのであつたが、その學校へ通學させることを斷然止したと云ふことである。

それが事實であれば、學校としては、大いに考へられなければならない重大事であると思ふ。

次は小學校のことであるが、筆者の子供の通學して居る東京桃井第二小學校の校長は、常に兒童に對して質素にせよと、やかましく教へ、靴でも、帽子でも、新しいものを用ひてはならない。鉛筆は最後まで使へと、その例を學校の中で、實物を展示して見せて、質素に、儉約にすることを徹底して居る。これは實によいことだと思つて居る。

子供を通して居る筆者は、心からこの校長に感謝して居る。ところが、各家庭でそれを守らないのである。辨當の副食物は粗末にと云はれても、料理の展覽會になつたり、特に國民精神總動員週間

の遠足だから、服装はそのまゝにと云はれても、晴れ着の競争になるのである。

これは、學校は正しく教へて居るのであるが各家庭の自覺が足りないのである。

以上二つの例に依つて見ると、前者は學校が敗けであり、後者は家庭がよくないのである。して見ると、儉約とか、質素とか、云ふ事柄はまだ一般に徹底の域に達して居ないものと思はれる。同時にこうした習性の徹底のためには學校と家庭の兩者が、一つになつて、纏つた具體策を作り、これに對する一つの戒律が作られなければならないと思ふ。

これは單なる家庭、單なる學校の問題でなくて、國家恒久の大策でもあると思ふ。

獨逸人の廢物利用 (二)

筆者の友人は、日本に来て、もう十年以上になる。仲々の讀書家で、日本の文字も讀めるところから、多くの書物を買つて讀む。又英書も讀むが、讀んだ本はかならず本國の獨逸へ送るのである。

この友人の話に依ると、獨逸は今本が不足して居る。殊に外國の書物は、本國では一般に買はれない。そこで自分の讀んだものは、必要の箇所をノートして置いて、これを本國の友人や、知己に送る

のである。

そうすると一冊の本が多数の人に読まれるばかりでなく、本代も大變助かると云ふのであつた。この思ひやり、この祖國愛には胸を打たれるが、一冊の讀み終つたものを更に有用に使用してこれを活かす獨逸人はやはり偉いと思ふ。

獨逸の船が入港すると、その汽船によく豚を飼つて居るのを見ることがある。

勿論飼つて居ると云つても二匹か三匹位のものであるが、汽船になぜ豚を飼はれるかと云ふと、この豚は、船員諸君の殘飯の處理を仰せ付かるのである。

獨逸の船員は殘飯を作らないので有名であるが、それでも多少は出る。それをそのまま捨てないで、豚に與へる。豚はこの殘飯を、處理しながら太つて行く、そしてこの豚はよい時期に、船員諸君の食卓へ上ることになる。

此の間少しの無駄がないのみか、廢物で、立派な豚が育つて行くのである。

又神戸港に來た商品見本船の船員さんは、船着場の片隅にあるゴミ捨て場を三人掛りで整理して居た。澤山のゴミの中から鐵屑や、針ガネ、ブリキ屑等の金屑類、それに、ボロ糸屑、木片を各々目籠に拾ひ分けて居たが、僅か三四十分の間に、拾ひ集めたものが三つの目籠一ぱいになつた。金屑は三四十貫にもなつたと思はれる。ボロ、木片、類は山盛りになつて居た。

考へて見ると、その總てが役にたつものばかりである。これは心掛のよくない日本の船員が捨てたものである。しかし、たとへ捨てられたものゝ中にでも役に立つものがあると、決してそのまゝにして置かないのが、獨逸人である。しかもそうしたものを取出した後はゴミ捨て場であつてもキレイに周圍を掃いて散亂させる様なことはない。

さて、それ等のものを集めて何に使はれるかと云ふと、鐵屑は更にこれを選り分けて、修理の場所に用ひられるものと、そうでなく再生させるもの、ボロや米屑は、機械の掃除や、船の床を拭くために用ひられ、木屑は石炭の代りに使用されて居たのであつた。

更に驚いたことにはこの船の船員は、靴下の破れなぞ皆自分の手で修ふが、どうにもならなくなるとその靴下の上部を切り取り、それを集めて、大きな袋を作つて居た。しかもその袋が布切れの屑を入れる袋であつたのである。それ等の布切れは再び、紐に作られ、或は服の破れの修理に用ひられるほか又色々に活用されることであらう。

獨逸人の廢物利用 (二)

獨逸の家庭について見ても、街で買はれた瓶詰の食料品の中味が空くと、早速その瓶は自宅で活用されて、果物が潰けられたり、其他色々の用向きに依つて、利用され、みだりに賣拂はれる等のことがない。

屑籠にしても、その中味を捨てられる場合は、更にその内容を再び調べて、まだ何かの用に使用出来るものはないかを今一度見究めた上でなければ、最後の捨て場へは運ばれない。

獨逸人が、こうした心掛けを持つて居ることは、戦後に受けた尊い體驗が、それを教へ、長い間にこれが獨逸人の習性にまで、進んだもので、國家としてこれ程力強いものはない。

實に國家の財政、經濟政策の基本は、全國民の家庭生活がその最も大きな單位となつて居ることを忘れてはいけない。

身に衣ること、食ふこと、住むことによつて國家の生産、其他の金融機關が動いて居るのである。今、日本は國を擧げて戦つて居る。殊に次の様な物資は各家庭で粗末にしてはならないと同時に、もつと廢物を利用して更生の道を開き消費の節約を一層徹底したいものである。

戦ふために如何に多くの物資が必要であるかを、歐洲大戰に例をとつて見ると、

大戦中英國の羊毛使用量は、戦前の恰度國內使用量に匹敵するまでに多量となり、靴の如きは、平時二十五萬足位であつたものが、戦となるや一年一千三百萬足と云ふ數に上つた、勿論この中には聯合軍のものもあるが、結局英國は四年間に一億六千四百萬足と云ふ靴を作つて居る。

戦時に於ける軍の需要は平時に比して著しく龐大となるものである。加ふるに多くの物資は海外から輸入しなければならないものが尠くない。

我國では今棉花、羊毛、バルブ、ゴム、石油、金、白金、黄銅、鐵、銅、鉛、錫、ニッケル、水銀、アルミニウム、紙、麻、革、木材、揮發油、等は國內資源に乏しく特に大切にしなければならないのである。従つて次の様な品物に對しては、工場も、會社も、役所も、學校も、家庭も、それこそ、國民總動員をもつて、廢品を捨てないで、これが再生利用を、心掛けなければならない。

目

再生

品

綿襪、襪、綿屑	古着、古シャツ、古靴下、古綿絲	↓	バルブ	人絹、ステール、ファイバー、セ
毛襪、毛屑	古洋服、古着、古帽子、古襪等	↓	綿絲布、蒔圓綿等	
紙屑	反古紙、古雜誌、古新聞、裁落紙等	↓	印刷用紙、包裝紙、紙袋等	
古ゴム	古ゴム靴、古ゴムタイヤ、古チヌ	↓	再生ゴム、麻裏、防絨材等	
	古ゴム紐、古ゴム襪、古ゴム袋、古麻裏等			

屑	鐵	古船解體屑、自動車解體屑、古ト タン板、古レール、ブリキ屑、古 針金、古金網、古釘、古銅釜、古 双物、ブリキ罐、パイプ屑等	↓鐵鋼、鑄物類
鉛	屑	古電池、標章銀紙、古活字、寫眞フ イルム包裝、鉛管屑、ケーブル屑等	↓鉛地金、半田、活字、繪料、顏料等
亞鉛	屑	古トタン板等	↓亞鉛地金、眞鍮、洋銀、亞鉛末等
錫	屑	古錫器、齒磨チニール、菓子包裝 ブリキ屑、ブリキ罐等	↓錫地金、青銅、半田等
銅、眞鍮、青銅屑		銅板銅線屑、古銅鐵銅屋根、古金 網、電球口金、金ボタン、古什器等	↓銅地金、眞鍮地金、青銅地金等
アルミニウム屑		古玩具、古水筒、古飯盒、古辨當 箱、古銅釜等	↓アルミニウム地金等
廢	油	古機油	↓機油

要するに物は總て之を大切に、無駄のないやうに使はねばならない。襤褸、屑の廢品、不用品も、之を捨てたり又は徒に藏ひ込んだりしないで出来るだけ整理して之を集めて置く、廢品取扱業者は之を誠實に買受け或は選分けして價值多く更生利用出来るやうにする又、之を原料とする工場は誠實に之を買取り新しい原料使用の抑制を圖る。各人は廢品を原料とした製品を喜んで使用するやうにする等此の際、我國民は皆此の點に就て特に意を用ひなければならぬ。

獨逸人と機械

獨逸人は實に機械を大切にする。

筆者の近くに住んで居るバスの運轉手は、運轉時間を終ると、かならず一通りエンジンを検べて、一日中に積つた塵や、ゴミを拭き取り、＋レイに手入れをした後でないと、車を車庫へ入れない。それが雨の日も、風の日も一度として手入れを缺かしたことがないのである。

終業は早い日で五時、遅番の日は十一時であるが、どんなに遅い時でも一通りの手入れをしてからでないと歸らない。

又、朝、車を使ふ時は、まづ油の状態を調べる。そして機械全體の調子を検査した上でないと發車させない。

運轉中でも、決して機械に無理が行く様な走らせ方はしないのである。

十四五臺もあるバスの中で、獨逸人の使用して居るバスが一番故障が少くて、一番新しく見えて居るのも一つは手入が行届いて居たからである。

タイヤの損じ方も大變な違ひで、他の車よりいつも二三ヶ月は長持ちして居た。

この車よりいつも二三ヶ月は長持ちして居た。

これは獨逸人が、機械に對する智識が豊かであるばかりでなく、たとへ經營者の車にしても、出来るだけ大切に、これを大事に使ふと云ふ考へがあるからで、發車の場合でも、停車の場合でも實に物靜かに車を扱ふのである。

だから一般の乗客は、獨逸人の車に乗ると目立つて乗心地のよいことが判つて居た。

何んでもないのに急停車して乗客を揺り動かしたり、カーブを急角度で曲つて乗客を苦しめたりすることがない。

路面に對しても常に注意をして、車の動搖を防いで居た。

そうした心掛が機械に無理を與へずタイヤまでも長持ちさせる結果となるのである。

日本はまだ國產自動車を多量に生産するまでに至つてない。従つて自動車は、自然海外からも輸入しなければならぬ状態にある譯で、一臺の車と雖も之を大切に使ふのと、そうでないのとでは國家の經濟の上に、大變な相違となる。

又タイヤにしても、その原料は總て外國から輸入して居るのである。ヨコハマタイヤに居る筆者の友人は、次の様に話して居た。「社ではよりために良いタイヤを作つて長持ちをさせ、ゴムの輸入を少しでも少くしたい。それと今一つは需要者がタイヤの使用上に注意して、長持ちさせる様に心掛けて貰ふ事で、そうすると、タイヤのいたみ方が大いに違ふと思ふ。僅か一本のタイヤと思ふが一臺の自

自動車には少くとも四本のタイヤがある。トラックになると六本も備へつけてある。これが全国で三十萬臺とすれば、一臺四本としても百二十萬本のタイヤが毎日少しづつ耗つて居る譯である。」と、

又、ある印刷工場を見學した獨逸の技師が、その工場へ還入ると、すぐ機械の齒車の間に一ぱいに積んだ塵や、小釘を掃除させ、油の不足の箇所を、示して油を入れさせてから「この機械を今迄の様に使つて居ると、あと半年も使へない。」と注意した。

又、「この機械は印刷中に微動して文字が鮮明に出ないだらう」と訊ねて居たが、まったくこの獨逸人の云ふ通り、新しく据付けて、僅か半年にもならない機械が既に故障を起して居たのである。

これは手入れ、油差しの不充分、機械の扱方が原因して居るのであるが、獨逸人が使へば二十年位いは少しのクルヒもなく使へる機械である。

一般に機械類は注意次第で、機械のいたみ方も倍も三倍も違つて来る。どんな機械でも其の機械の能力に従つて扱ふことは云ふまでもないことであるが、手入や油を與へないで、機械を酷使することは、資材愛護の上から、大いに注意されなければならないと思ふ。

獨逸人と油

機械を大切にする獨逸人は、また油を大切にする。それこそ一滴の油も無駄にはしない。

たとへば、機械に油を差す場合でも、機械が手で、さはれる箇所は、手をもつて機械の熱した程度を計つてから、必要量の油を用ひる。

小さな機械に、流れる様な油の差し方などはしないのである。

油の話で思ひつゝが、前記のバスの獨逸人は、他の車と同じ時間運轉して、一日に一ガロン位のカソリンを節約して居た。

これも一寸の注意が生んだ賜である。

日本の工場へ這入つて見て、まづ驚くことは、機械の附近が油だらけであることである。場所に依ると、床の上に油が流れて居るのがある。

そして、やたらに、油を注ぎ込まれる。それで油は完全に用ひられて居るのかと云ふと、決してそうではない。機械の一番大切な箇所へ油をやることを忘れて居ると云ふのが尠くない。

横濱の港で日本船が、澤山の積荷を本船から降して居たときのことだ。獨逸人の友人は、そのウインチの側へ行つて、「そのウインチには大切な所に油が無い。」と注意して、油を用ひさせた

同時にウインチの調子は大變良くなつたのであるが、無駄使ひもよくないが、必要な場所に油を用ひないのは更に善くないことである。

一滴の油、と云へば、ホンの僅かなことであるが、これが毎日のことであつて見れば、決して馬鹿にはならない。

一臺の機械に十ヶ所の油を用ひるとすると、一つの機械で一日十滴の油が節約出来る譯である。これが一ヶ月一年と積れば相當の量である上にこれを、工場全部の機械に計算し、更に、日本全體の機械について考へた時、一滴の節約から、一ヶ年何百噸と云ふ油を節約することが出来ると思ふ。

石油が土地の中から湧き出るアメリカや、ロシヤ、蘭領印度あたりでは、油の一滴位ひ別に問題にならないとしても、日本は特に油の産額が乏しく、國內の産額は全需要量の僅か八分にしかあたらない従つて九割二分を海外から輸入しなければならぬのである。

今の時局は、殊更重油、石油が必要である上に、これを外國から輸入することが出来ない状態にあるのであるから、油を扱ふ者はそれこそ、一滴も無駄にしてはならない。

ガソリン統制が行はれて居るのも、それがためであるが、機械油も等しくこれを節約しなければならぬ。

軍艦も潜水艦も油が絶對必要であるが、飛行機や、戦時輸送の自動車にはガソリンは缺くべからず

る軍需品である。従つて節約しようと思へば、これは一寸した、お互の心掛一つで、どうにもなることである。しかも、一滴の油を有効に活かすことは、それだけ國力を伸ばすことであり、經濟的に日本の血潮を増すことで、それが延いて戦局を容易に好轉せしめる原動力にもなるのである。

十二年度に於ける、重油原油の輸入額は實に、一億九千萬圓の巨額に達して居る。

獨逸人と石炭

獨逸の船員が本船にかへる時、道に落ちて居た、拳大の石炭を三つ拾ひ、これを本船に持つて歸つた。

戦後石炭に窮乏した獨逸では、寒中學校を休校しなければならなかつたと云ふ。又、當時焚くものが無くて寒さに凍死したのも、相當あつた程に、深刻に石炭の大切なことを味つたのである。

汽罐を焚く場合でも、罐の焚き方をよく心得て居て、決して一度に多量の石炭を入れない。面倒でも少量宛度々入れるのである。又石炭の有効に燃へる方法を心得て居て、石炭の入れ方、を加減する従つて、全部の石炭が、完全に燃へることを工夫し、僅かな石炭をもつて、多くの熱量を出すことを

忘れない。だから、一度に澤山の石炭を入れて、燻ゆらせたり、灰を出して見たら、燃え残りの石炭が澤山ある、と云ふ様なことは、まづ獨逸人には見られない。これは、至極當然なことの様であるが仲々出来ないものである。自宅で焚く風呂一にしても、これは容易でない。

市内の銭湯が營業時間を縮少して石炭の節約を實行して居るが、これは時間を節約するばかりでなく、石炭の焚き方についても、尙研究の餘地があるのではなからうか。一ケ年百萬噸も使用する銭湯で、罐の焚き方を一寸上手に加減すれば二十萬や三十萬噸は節約出来る。又、全國的に、石炭を消費する量は全部で約四千萬噸であるが、これが一割節約されると四百萬噸で、それだけで全國の湯屋は四年間も焚き續けられることになる。

石炭について、我國では、木炭を多く用ひられるが、その使ひ方に大變な無駄があるのではないかと思はれる。

殊に冬期など、役所や、學校、公番等で用ひられて居る木炭の贅澤さ加減はまづたく驚くの他はない。

所謂官給品に對しての、思ひやりがないのであらう。學校あたりでは殊に官立にそうした例が多いのを屢々目撃したものだ。今その名前を列舉する譯には行かないが、筆者は、そうしたところへ出入りして、いつもそれを思ふ。

「何と恐ろしい無駄！」なことがと考へさせられるのである。

尤も定められた、豫算は、その期間内に無理にも使つてしまはなければ、翌年度の豫算を減ぜられると云ふので、與へられた、豫算が餘りそうであると、或は旅行、出張、見學と云ふ様に使ふ道を考へて、使ひ果すのが、從來の役所の例であつて見れば、木炭あたりでも、なるべく多量に使ふのがよいのかも知れないが、これは大いに考へられなければならないと思ふ。

更に木炭一噸の價は百圓内外で石炭は二十圓内外である。火力に於ても石炭が優つて居るのであるから、木炭を節約してこれを石炭に代へることも亦大いに考へられなければならないと思ふ。節約とか國家の材を活用することは、まづ、役所とか、學校に於てそうした見本を示さなければならない。次はスチームである。室内の溫度も正しく計らないで、寒い時は、やたらに、石炭を焚き室がムセル迄スチームを送つて居る。

適度であつてこそ、スチームも心地よく、事務の能率も増進すると云へるのであるが、これでは、却つて室内の人を苦しめ、逆に能率を低下させる結果になりはしないか。

室のスチームの熱し過ぎて居ることは既にそれだけ石炭も勞力も共に無駄になつて居るのである。しかも、相當の人が多數その室へ陣取りながらも、一人として、スチームの過度について注意をする者も居ないなどは、まづたく常識を逸した世界であると思ふ。

これは、都會のビルディングあたりでも相當に多いのである。

一一六

獨逸人と水

水の有難さと云ふものは一般にはあまり考へられない様である。

東京の大震災の時、罹災者が、まづ最初に要求したものは、食事よりも、金よりも、一口の水であつた。イザと云ふ時、食物も、財寶も問題ではなく、人間が一番に要求したものが水であつたと云ふ。たとへ、恵まれて居るからと云つて、その恩恵を忘れて居ることは、まづたく、不幸なことだと云はなければならぬ。物は有難味を感じてこそ、節約もする。無駄にも使へなくなるのである。

神戸港に居た獨逸の船汽に汽罐用の水が入用なので、それを運んで數隻の水船が本船の横へ着いた時のことである。

事務長は、大變慌てゝ、實は汽罐に用ひたいから注文したので、飲み水でなくてもよろしい。と云つて來た。そこで飲み水も、汽罐用の水も、同じで、値段も同じだと話したところ、それで得心したと云ふ話があるが、これなどは大いに味ふべき言葉であると思ふ。

又その船員は、自分達の用水は、港にある水道の所までバケツを携けて汲みに行き、決して船内のタンクにある貯水を使用しなかつた。

獨逸では家庭でも、一般に水を大切ににして、水道の水を、廊下や庭に撒くと云ふ様なことをしないと云ふことである。

日本の留學生が洗面の時下宿のおかみさんに「水を大切にしない。あなたが來られてから二人分の水が消費される様になつた」と注意したと云ふ事であるが、この下宿のおかみは、一人について凡そ、どれだけの水があればよいかをチャンと、計算して水を大切に居たらしい。

此の點についても、日本の家庭はもつと、もつと、注意されなければならないのではあるまいか。道路や、庭に撒く水は、出来れば、用水桶を容易して置いて、雨水を貯め、不用の水をそれに入れて置いて、必要に應じて用ひられたらどうたらう。

東京市では數年前から愛水運動が初められて、「水を愛せよ」と宣傳して居るが、これが少しも市民に徹底して居ない。不相變らず、水道の口か、らホースを引ひて路面や庭へ水が撒かれて居る。

市中で、水道の栓が壊れて、水が吹き出して居ても附近の人はそのまゝにして居る。ひどいのになると、三日も四日も、路面に水が吹き出して居たりする。

水は別に外國から輸入するものではなく、いくら使つても心配はない様なものであるが、水道で水

を多く送るためには、やはり多くの動力が必要であるし、勞力もそれだけ多くを要することになるもので、水だからと云つて、斷じて無駄な使ひ方をする必要はないと思ふ。

水に恵まれない海上生活者や水兵達は僅か一升餘りの水で顔を洗ひそれで洗濯もするのである。水に對しても、そうした道德的な考へから、節約を守ることは、やがて、家庭生活に於ける全般に對して注意する動機ともなると思ふ。

殊に女學校あたりで家事や、料理の時間に、水を通じて、自然の恵みを教へ、節約生活に對する一つの習性を養ふことは、やがて一家の經濟を切り盛りする主婦に對する、大切な事柄であらうと思はれる。

獨逸人と木屑

獨逸船を見學に行つた筆者は、本船の近くの波止場を袋を携けて、その中へ木屑を拾ひ集めて居た船員を見た。

この集められた木屑は、石炭に代つて炊事の煮焚きに用ひられるのであつた

これは云ふまでもなく、高價な石炭を節約するためであつて、その船では、石炭に代つて、木屑が用ひられるために、炊事に割宛てられた石炭が、入港以來少しも、手をつけないでそのまゝ貯蔵してあると聞かされた。なる程炊事場の横には木屑を入れた袋が、まだ七袋も積んであつた。

今、かりに炊事用の石炭を半年に一噸の割合で、用意されてあるとすると、石炭を使はないで、木屑を代用することに依つて、それが、一年も、一年半も、繰延べされて使用することになるのである。云ふまでもなく廢物の木屑で多額の經費が節約出来るのである。

又、他の船員は、波止場に落ちて居た鉄釘を一本拾ひ、それを本船へ持つて歸つた。

この鉄釘一本も獨逸人の手にかゝると、決してそのまゝにされないで、かならず又何かのために活用されるのである。

釘について思ひ出すことは、日常、役所や、會社、銀行或は學校で使つて居るペン先の古である。一たいこの古ペンは、どこへ捨てられて居るのかと考へる。これを全國的に集める運動が起れば、それで飛行機の拾臺や二拾臺は、作れそうに思ふのである。

先日北海道廳は、全國に先がけして、足袋のコハゼを集めたところ、北海道だけで千六百貫のコハゼが集まつたと云ふことであるが、「塵も積れば山となる」と云はれて居る通り、足袋のコハゼも馬鹿にはならない。

煙草の銀紙で飛行機が出来たことは、讀者もよく承知のことであるが、古釘を集めても、これは出来る。

と云ふ様に、手近に捨てられて居るものゝ中から、これを活かして行く心掛けは、各々家庭にしても、工場にしても、商店にしても、組合にしても、無から有を生じることであつて、これ程大きな收穫はない。

又、先年、横濱に入港した獨逸の汽船は、修理のために二百枚程のムシロが必要であつた。

ところが、船の事務長は新しいムシロを買ふと一枚二十銭もかゝると云ふので、中古のムシロを集めて呉れる様に注文した。これは日本人も氣付かなかつた事であるが、中古のムシロは一枚僅かに二二銭で手に入つたのである。

廢物を再生させることも大切であるが、差支ないものは古いもので間に合はせ、これを最後まで使用することも亦忘れてはいけない。

われわれは、今後の實生活に於て、特にそうした心掛けで、實際にそれが生活の上に一つの習慣、習性になでになる様に、自らを訓練し、そして子弟を、家族を、教育することは、家を愛せ、國を愛せ、社會風潮を一新せよ等の抽象的な、注意よりもはるかに優れた實物教育であると思ふ。

經濟的に、或は思想的に、その家、その店、その國家を安きに置くためには、いつの世にも以上の

様な心掛が必要ではなからうか。

獨逸人と勤儉貯蓄（二）

筆者の友人は獨逸へ旅行して、ある下宿へ世話になつた。ところが、その友人は三ヶ月目のある日、急に豫定を變更して伯林を去らなければならなかつた。

そこで、下宿のおばさんに「明日の午後出發いたします」と話したところ、下宿のおばさんは二人がゝりで、明後日にして呉れと抗議を出したと云ふのである。

その理けを訊ねて見ると、斯ふである。

「今、貴下の靴下二足、それにワイシャツ二枚を、修理して、洗濯中であるから明日では乾かぬので、是非明後日に願ひたい。」と云ふのであつた。

ところが、靴下は踵の箇所に穴のあいたもの、ワイシャツは襟首のところが破れて居たので、實は友人が、それを塵函へ捨てたのであつた。それで「あれは破れたから捨てたのです。」と話したが、「捨てる」と云ふことが、どうも通じないらしい。言葉が判らないのではなくて、そんなものを捨て

即ち一九二四年四月一日にレンテン銀行からの借入金を始めとし、ドーズ外債、ヤング公債、クロイガー借款、レイノルド公債、ヒルフアーディング公債、等があり、本日まで實に百回近くの公債を發行し一九三三年の如きは二十數回の内外債が募集せられて居る。

専門家は、獨逸は果してあれだけの公債を發行して、これをよく消化し得るかと心配して居たが、兎にも角にも現在の獨逸が現出し、經濟的に何不安なく國內の自給自足が出来るのである。これは等しく國民が國家のために協力して公債を買ひ或は貯蓄を勵行したからである。

獨逸人と勤儉貯蓄 (二)

資源と云ふ資源、あまつさへ食糧、さへも奪はれた、云はゞ無一文の貧乏國が、どうして、現在の如く國內産業を振興させ、輸出王國となり、歐洲の各大國がオチケをなす程に、その國防力を備へるに至つたか。これは一言にして云ふと、「國民が無駄を省いて、よく働いたからである。」そして國民が得た収入は、或は國債、或は貯蓄をして、政府の仕事を授けたからである。

外國に對しては一錢の金も出さず、そして、國民は頑張つて働け、作つた品物はどしどし輸出をせ

よ。品物を賣つた金は獨逸の金になる。そこで勞働者は收入が増加する。その收入を節約して、貯蓄するから、國庫の金は次第に増加すると云ふ事になつたのである。

もしも、いかに獨逸人が働いても、國民の一般が華美な生活をして、得た金をどんどん消費して居たら、獨逸國は、とつくの昔に減乏して居たであらう。

國を富ませるためには、まづ、その國民が、古い言葉だが、「勤儉貯蓄」して、國內産業を振興させ、輸出を一層増加して、外國の金を取り入れなければならないのである。殊に現下の我國は、絶對その必要に迫まれて居るのである。

戰ふために金と物資が必要であることは言ふまでもないことであるが、今回の事變で、既に七十四億からの金が使はれて居る。日露の戦ひに費した全費額二十億の三倍強となつて居るのである。その上國內の一般經費、日滿の生産擴充等に要する費用の合計は、六十億にもなる。更に今議會で臨時軍事實費が特別會計で、四十八億を決定されて居る。従つて政府はこれを捻出するために公債を發行しなければならぬ。

これが今後一ケ年に五十億にも達するものと見られて居る。

ところが、軍需品製造のために、國內へ支拂はれる五十億からの金は、民間の工場とか商店とか勞働者の手に遣入るのであるから、成る程外見は實に景氣が良い。

筆者の住む近くには住宅を増築するところもある。新しく外國の自動車を買入れた家もある。又、紅燈の街は、大變な景氣を見せて居る。

しかし、これは、國家が武器や、彈藥を作るために民間に支拂はれた金が、或は増築となり、自動車となり、ドンチャン騒ぎとなつて居るのである。

親の金が息子の手に移つたまである、景氣どころの騒ぎではない。

そこで此の際、たま／＼親の金を貰つたからと云つて、これを使ひ果してしまふと、その親は無一文になる。それでは一家が危機に直面する。

次に何か必要なものを作り度いと思つても作ることが出来ない結果となるのである。

政府が支拂つた數十億の大金が、國庫に歸つて來なければ、武器も、彈も作ることが出来なくなるのである。一線へ糧食も、衣服も送つてやれない。それでは戦争が出来ないのである。

金が國庫に歸つて來ない場合、これを人體に例へると、全身貧血の症狀になるのであるが、反對に金が貯蓄となつて國庫に這入つて來れば、國家の血のめぐりは大變よくなるのである。

乙獨貯蓄宜傳之メタノ文案ノ

貯蓄は金か ← 儲くは金貯 ← 貯蓄は事仕を産み ← 失業者は事仕を與へる ← 仕事は事
入收は購買力と貯蓄の餘裕を與へる ← 貯蓄は身のため ←

獨逸人と勤儉貯蓄 (二二)

従つて國民は、戰時の所得が増加したからと云つて、これを單に自分のために使ひ果さないで國債に代へ貯蓄にして置いて、政府のやりくりが、意の如くなる様に全國民が協力しなければ長期の戰に勝つことは出来なくなるのである。

これが、貯蓄獎勵の第一の理由である。

次には、國際關係を考へて、日本の信用を落さない様に爲替相場を保つて居なければ、どうしても必要な物資を買入れる時とか、國內の産業を振興して、外國へ物を賣る場合に大變な損をするのである。これが第二の理由である。

次に考へられることは、出来るだけ此の際外國へ金を支拂はない様にしなければならない。そこで、輸入原料や、製品の輸入を制限されて居る。しかし、現在ではまだそれ程苦痛とは感じられない。程度の、二百四五十種類の輸入品制限であるが、これは情況の變化と共にまだまだ全面的に生活上の物資の上に制限されて來るものと覺悟しなければならぬ。

すると、生活上の物資は極度に窮乏して來る。

勿論日本はどんなことがあつても、國民が政府の政策に協力さへすれば、米も充分であり、野菜も食へる。魚も相當にあつて、大戦中の獨逸の如く食ふものに困窮することはないが、其他のものについては相當に不足するのである。その場合國民が贅澤に金を使つて行くと物價は愈々暴騰する。そこで節約生活を実行して、今から貯蓄しなければならないのである。これが第三の理由である。

更に政府は、事變解決の後には現在の如く軍需品の製造も急に必要ではなく、いつまでも民間へ現金を支拂ふことはしない。その時貯蓄もなく、収入を使ひ果して居たのでは、その家庭はたちまち苦しまなければならぬ。これはお互に自分として、貯蓄を心掛けなければならぬ理由である。

いづれにしても、われわれ國民は、此の際積極的に貯蓄をし、積極的に節約をして、物資を大切にする習慣を養ひ自分の生活を守ると同時に自分の國家を護るために協力しなければならないのである。

それでないといふ、國家も、家庭も共に苦しむの重大事を招致することになるのである。

殊に物資が少なくなつて、それできなくとも、物價が騰貴するの傾向にある時、各自が節約をしなければ、物價は今後一層高騰するのである。資財を有する人は、まだ我慢が出来るとしても、収入の僅少な、中産階級以下の人々、云ひかへると、國民の殆んどが、四苦八苦しなければならぬ事になるのである。國民の殆んどが、生活上に苦悶する結果は、社會的にも、思想的に見ても、甚だ面白くない結

果が生れて来る。

政府が物價の騰貴を調整し、消費節約の勵行をやかましく云ふのは、以上述べた様なことのない様にと色々考へて居るからである。

だから、これを解決し、そうした不祥事を未前に防ぐためには、國民が互にマッチ一本、石鹼の一つにも、節約生活をして、購買量消費量を調節さへすれば、物價は決して高騰するものではない。

外國の主婦は、消費組合を作つて、生活上の物資が高くなると擧つてその品を節約し、用ひないことにする。するとその物價は、次第に調節される。

我國ではそうした全國的な組織はないが、消費組合を初め各家庭、各人が、その氣になれば 物價は消費量に依つて自由調節に出来るものである。

國民は今擧つて、貯蓄報國、消費節約を實行し一線の將兵が少しの心配なく戦べる様に、更に銃後の生活が安定する様にお互は深く相戒めなければならぬと思ふ。

獨逸人と權利義務

獨逸の下宿では、下宿料以外に一回いくらで入浴料金を取られる習慣がある。

しかし、朝食をしなければ、それだけ下宿料から差引ひてくれる。等至つてハツキリして居る。

下宿料を渡す時に、入浴料を忘れて居ると、これはチャント後から、おかみさんが請求に來る。

ところが、洗濯や色々の雜用を頼んだ手前もあるので、謝禮の意味で寸志を包み「色々御厄介になるから、これはホンの心持です」と差出すと「世話をするからこそ下宿料を頂いて居る。その他の金は一切不用であります」と、どんなに誠意をこめて渡さうとしても、約束しなかつたから、規定外だからの一天張りで、斷じて受取らなかつたと云ふことである。

これが日本式であると、「あら、何をなさいますの、そんな御心配をして頂く譯はありませんの、アラ、まあそうですか、では遠慮なく頂きます。」と云ふ様なことになり勝ちで、斷つて居るのか、頂いて居るのか不得要領の内に包を受取つてしまふ。此の邊の云ひ廻しは、飯田蝶子氏にでも實演して貰はないと、表現し難い一種特有の所作が日本にあるが、獨逸ではあくまで、權利と義務を心得て居て、それから一步も出ないのである。

所作で胡魔化したりなど、全く見られない様である。

又獨逸のウンターデンリンデ街（東京の銀座の様な本通り）のあるレストランで、客が起つて出がけに、テーブルの釘にズボンを引き掛つて、引裂いた、するとその客はボーイを呼びつけて、服の破れに對して賠償料を取つた。

これなぞも、大いに獨逸式らしいところがあると思ふ。賠償料を請求するのもガツチリして居るが、これを當然として支拂ふ方もガツチリして居る。

これが日本的であると、お互ひに文句の交換で、「オイ、ボーイけしからんぢやないか、テーブルに釘なぞ出して、これ見ろ一となる。すると、ボーイの方では、何んだ、勝手に破つたんだろ、と心の中で思ひながら、「ヘイどうも相済みません、少し御氣をつけて頂ければ」位は云ひかねない。そこで一騒ぎが持ち上ろうと云ふものである。

この權利義務の明らかになつて居る獨逸では、萬事に對して、問題が簡單に解決するのである。斯ふした考への集まつて居る社會は、そこに一つの社會正義が各々國民の間に自然に生れて来る。

これを社會道德と云ふもよく、又國民性と云ふも間違ひではないと思ふ。

だから、街路の兩面に熱して居るリングを盗む者も居ないし、公園の樹の葉を手折る者も居ないのである。

獨逸國民の權利義務に對する觀念は、社會的道德にまで進み、これが人生觀となり、國民性にまで

なつて居るのである。國民の節約も、これは國民舉つてしなければならないものと強く自覺し、國家に對する國民の義務だと考へて居るからこそ總てに徹底した無駄廢止、節約生活が出来るのである。此處に獨逸國民性の尊さがある。

獨逸人と禮儀

獨逸人は一般に禮儀に厚く、婦人、長上、年長者に對しては特に禮儀が重んじられる。

だから道を歩く場合でも、婦人や長上、年長者を右側にして歩く、電車の中で、席を譲ることも云ふまでもないことであるが、ホンの一寸、自分の足先が、他の乗客に觸れる程度であつても、「失禮いたしました。」と挨拶する。隣の席で、新聞や、雑誌を読んで居るのを、のぞき込んだり、盗み見る者なども見られない様である。

日本の電車の中となると、キレイに磨いた靴を、いやと云ふ程踏みにぢつて居ながら、知らぬ顔をして居たり、殊更押し合つて見たり。隣の人の讀物を平氣で、盗み讀むものがある。

甚しいのは、二人分の座席を失敬して平氣で居たり、車内へ唾を吐き出す不届き者も居るのであ

る。獨逸人の禮儀の正しい例で、人前で煙草を喫いたい時は、一應相手客に進め、相手が用ひない時は、「失禮いたします。」と斷つて自分が用ひるのである。

それで居て、少しも堅苦しいこともなく、長上も目下の人も、共に和氣霽々として居るのが獨逸の社會である。

又、人に御馳走になつた時は出されたものを全部頂くことが、禮儀とされて居る。獨逸では食べかけてから、あれこれと箸をつけ、どれもこれも、食べ残すと云ふことがない様である。

それについて、筆者は獨逸の婦人二人を料亭に案内して大變な失敗をしたことがある。一應相手の好みを聞いてからにすればよかつたのであるが、支那料理がよからうと、ウンと思ひ切つて高級の料理を注文した。

ところが、筆者と共に三人であるのに、少し思ひ切つたために六七人前の料理が次から次へ出される。實を云ふと、筆者は食事の途中で満腹してどうにもならない位ひ參つて居たのであるが、獨逸の婦人は、それでも汗を流し乍ら、苦しうに食べて居た。

するとその一人が、「一寸失禮いたします。」と云つて席を起つた。

食事の途中席を、はずのは失禮とされて居るので、何か餘程のことがあつたのであらうと、一人の婦人に聞いて見ると、便所に行つたのだと云ふ。そして、獨逸では御馳走になる場合は、全部頂かな

ければ、招待者の誠意を受けたことにならないから。」と笑ひながら、勇敢に便所へ立たなければならなくなつた理けを辨解して居た。

それで「出された御馳走は死んでも食べます。」と云ふのであつた。

うんと御馳走して、好きなものを食べて貰ひたいと思つた筆者は大變申譯ない失敗をしたのであるが、相手の心を受けようとする努力に對して深く敬意を拂ふと共に、厚く遇した筈の筆者の考へが、却つて間の抜けた、申譯ない結果になつたことを今でも、相濟まないことをしたと思つて居る。

獨逸人の勤勉

日産の鮎川社長のところへ、獨逸の青年實業家が訪問した時の話に、「私は一日に三十時間必要です。」と云ふので、鮎川社長が、その理けを訊ねると「自分はどうしても、一日廿四時間は働かないと仕事が整理出来ない程に忙しい、それに六時間は休養の時間にしたいのだ。」と答へたと云ふが、もつて、獨逸人の意氣と、いかに獨逸人が勤勉であるかを物語つて充分であると思ふ。

特に勤勉の一方法として、われわれは、時を活かして用ひると云ふことを、もつと、もつと、考へ

て見たらどうかと思ふ。

最近の新聞に依ると、「日光節約」を一部の人が提唱して、正午を十一時とし、八時始業を、七時に切り上げて、終業時の四時を三時にしようと云ふ案が、出て居るがこれも仕事を早く切り上げて、少しでも日光の恵みを受け、自分の時間を多くして、保健上に資しようと云ふことであらうと思ふ。それはともかく、知らず知らず吾人が毎日時間を浪費して居ることは大變なものだと思ふ。

殊にこれが智識階級に多いのではあるまいか。執務中に新聞を見る煙草も喫ふ。面會時間もだらだらして長いし、肝心の要件に入る前に一通りの世間話の無駄口を利いて、さて要件となると、ものゝ一二分、二、三、語で足るものが、三十分になつたり、一時間にもなることがある。

早く歸つて下さいとも云はれないまゝに相手になつて居ると、つい一日の豫定が根本から駄目になる。

會合だと云へばキツト三十分は遅れて開かれる。

その間の時間の空費は、これを全國的に觀ると大きな無駄になるのではないかと思ふ。

能率増進と云ふ言葉が、再び提唱され出したのも無理のないことであつて、無駄な時間の無い様に、時間を活用すれば、從來六時間かゝつて居たものは、四時間で方付くだらうし、十人の手を要して居たものは、六人でも充分だと云ふことになる。

更に日常の時間を活かすことに依つて、六時間で二百個の製造能率があつたものは、これを三百個四百個にまで向上させ、十人で、一日千圓の仕事をして居たものは、これを二千、三千圓の額に進めることが出来るのである。

獨逸人の研究心

肥料に苦しめば、空中から無限に窒素を製造する。その製造工場はと云ふと、實に驚くべき大規模

の工場でありながら全部が機械の操作で製造され、工場内の従業員は僅かに四人だと云ふから驚くのはない。肉類に窮すれば、空中窒素を利用し、酒精酵母を固定して人造肉を作る。ゴムが欠乏すると、合成ゴムを製造し、絹物が必要であると人造絹絲を作ると云ふ譯である。

戦後大艦の建造が許されないとすると、早速、豆軍艦を作つて世界を驚かせた。物資に恵まれないことが、必要なものを發明させるのでもあらうが、それにしても獨逸人の研究心と云ふものは、萬事について、つきつめて、考へられるのである。手近な例を擧げると。

家庭で使ふバケツにも、チャント目盛りがついて居る。商品を入れた瓶にも目盛がついて居る。

布を切る鉄にも目盛りがある。よく目盛りを用ひるものだと思ふが、實際にあたつてみると、バケツにしても、瓶にしても、鉄にしても、それ等を使ふ時は、目盛りの必要を感じる場合が尠くない。目盛りは、單に便利であるばかりでなく、水を使ふ場合でも、調味料を合す場合でも、紙や布を切る場合でも、決して無駄や粗末にならない様に、目盛りが利用されるのである。

大は軍艦、飛行機、飛行船、タンクから、あらゆる諸機械、精密機械、一つのバケツに至るまで、その利用向きを考へて、便利に、しかも、經濟的に、最もためのよいものが作られるのである。

これが獨逸國民の優れたところである。

そうした心掛が、「獨逸品は優良だ」と云ふことになり、精銳な武器が作られ、便利で堅牢な機械

が製造され、無駄のない合理的な器具が製造されることになるのである

しかもその總てが、使用向きによつて、考案され最上のものを、製造されるために、國內の産業が發達して、輸出が、年々増加する事となるのである。

例へば一つの石鹼を製造するにしても、内地用のものと、北歐へ輸出するものとは、その製造行程が全く違ふのである。

戦後一時獨逸の産業が中止して、石鹼が北歐へ輸出されなかつた時のことである。或は佛蘭西、英國あたりから、北歐市場獲得のために、色々の石鹼が送られたが、どうも獨逸の石鹼の様に、うまく洗濯も出来ないし、からだの、汚れもよく落ちない。従つて佛蘭西品も英國品も次第に人氣を落してしまつた。

そこで再び獨逸品が輸出される様になつたのであるが、なぜこれが獨逸の石鹼でなければならなかつたかと云ふと、獨逸は輸出用の石鹼を製造する前に、まづその地方の水の質を調査研究し、鹽分と礦物質を含んだ硬水に、適する様に製造されて居たからである。

「まづ事にあたつて、根本から研究してかゝる。」この獨逸のやり方は、われわれ日常生活の上に萬事について大いに参考になると思ふ。

獨逸人の教養

獨逸のレストランのボーイは、客を相手に、國際情勢を論じ、下女や、パン屋の小僧さんまで街に設けてある民衆大學で夜間勉強をする。

だから、下宿の主婦が、衛生學を論じ、營養學を云々することに不思議はない。

住宅の窓には一般に三重になつた扉が用ひられて居て、濕氣の多い日、雨の日、晴天の日、午前、午後に依つてその扉の開閉が調節される。

不用意に開け放つて置くと、いつの間にかこれが直されて居る。氣象と健康に對する細心の注意が、窺はれる。

又獨逸の友人は省線電車に乗ると、「私は新しい空氣が好きだから、」と云つて、電車の窓を開け、新鮮な空氣を車内へ入れる習慣があつた。

全く人混みの蒸せた車内の空氣は、よくないと思ふ。

獨逸の大衆、それこそ長屋のおかみさんでも、一般に藝術に對しては鋭ひ批判力を持つて居ることも、獨逸人の教養を語る材料になる。

村上瑚磨雄氏著のドイツ精神の中から、民衆大學の一節を次に紹介して見よう。

「民衆大學とは、晝間業務に妨けられて、正規の高等教育の受けられない人々のために、夜間を利用して、種々の講義演習等に参加させられる制度であることは、「成人教育」などの名で我が國でも試みられて居る通りである。（中略）その講義の題目も、政治、經濟、法律、文化の各方面に亘り、つとめて、大衆の興味に合致しその關心を湧かせるに足る様のもものを選び出して掲けられた様である。

聽講者の顔振りも、實に千種萬様で、女學校を出たばかりの、お下けの令嬢から、その昔三軍を叱咤した、老將軍に亘るといつた調子である。聽衆の多様性は、その頭腦や經驗の難多を豫想させるが、（中略）「學力が區々で困ります。」などいふ愚痴は、教育教授の何たるかを解しない人の口からだけ出る言葉である。いくら學力を揃へて見たところで、身長が違ふ様に、頭の程度も違ふに定まつてゐる。否頭が不揃なら不揃だけにまた、それに應じた教授法が、チャンと編み出されてこそ、民衆大學が生きて來るのである。」と書いてある。しかもその大學で講義をする先生が大學教授であつて、集まつた民衆に對して、理論めいたことよりも實際に即して話を聽かせると云ふのであるから、一般の人にとつては、實に有難いことである。

斯ふした教育方法が、六つかしい理論を學ぶインテリ根性の持主とならないで、實生活に即した教

養ある人間として生れ出るのではなからうかと思はれる。

どうも、從來、我國の學校とか大學で學び、かつ教へられることは、足が宙に浮いた様なことが多くて、「實生活」そして「人間とは」に對する一番必要なことが省かれ、忘れられて居る様な氣がしてならない。

これは單に筆者のヒガ目でもない様だ。

獨逸人と健康（二）

健康のないところに人生もなければ、國家の存在もあり得ない。

人生も、國策も、總ては人の健康を前提としなければならぬ。

一國の生産がそうである。國防がそうである。人を作る教育もまづ健康からである。

家庭がさうであり、母の問題も亦さうである。

この重大問題、しかも不健康であることの苦痛は一日として堪へられないところの人間が、從來あまりに、この問題に對して、注意されなかつたのではなからうか。

我國では漸くこの問題に對して、最近厚生省が出来て積極的に國民の健康向上に向つて乗り出したのである。

我國に於ける、學校衛生は既に十數年の歴史を有し、小中學校の兒童生徒に對する保健衛生に對しては不斷の努力をされて來たのである。

例へば、全國に六十萬からもある欠食兒童の問題にしても、これは單に文部省ばかりの力をもつてしては及ばないし、更にこの數字に現はれない栄養不良兒はこれに數倍、十數倍するものと見なければならぬ。

これは國家として極めて重大な問題であつて國民保健國策中捨て、置けない事であると共に、一般家庭としても、生活の基本を、まづ家族の健康に置かなければならないと思ふ。日本は未だに乳兒の死亡率が世界一であり、結核患者の數も亦世界一の日本である。

獨逸では大學でも、まづ健康を重視して、一樣にスポーツの課目を與へて居る外、高等學校、小學校はもとより、全家庭の母に對して、政府は、徹底的に健康の重要性を説いて居る。

だから戰後僅かに十數年にして、あの多數の結核患者を出した獨逸國民の體力が今日では一變して良くなつて居る。

現下獨逸の國策の根本は、強健な國民を養育するにあると云つて良い。

同様に一家の經營の根本も亦強い家族を育て上げることではなければならない。

總ての問題はそれからである。

殊に實生活上各家庭では、家族の保健に注意して、皆んなが揃つて、なごやかに、丈夫になることを考へなければならぬ。

家族が健康になることは生活改善の根本問題であるからである。

。軍亡死の犠牲い多もりよ士戰

。がる居てれば云と人五拾三百四千四萬八で部全は士勇たし死戰で戰大の露日
。る居てし達しに萬六、五拾々年は民國るす亡死で核結

獨逸人と健康 (二)

今少し、獨逸の國民がどんなに健康を向上して居るかについて書いて見よう。

大戰の初まつた一九一四、一五年は、まだまだ獨逸國民は元氣であつて、聯合軍も獨逸人の體力の強いのに驚いた位であつたが、一九一六年に入る頃から國民は次第に健康を害し初め、體力も一般に弱つて來た様である。

一九一四年には戰は初まつても、結核で死亡する人は九萬二千人、人口一萬に對して一四・三人の割であつたものが、一九一七年には拾三萬三千人となり、人口一萬に對して、二〇・六人となつたのである。

翌一九一八年の秋には一四萬七千人となり、人口一萬に對して、二三・〇人と増加したのである。

ところが、これは死亡率であつて、實際に罹病し、榮養不良状態になつた國民は殆んど云つてよい位ひに一般國民の體力は低下し、乳兒の死亡率も、欠食兒童も増加したのである。

この實情に對して、政府は結核療養所を全國的に増築する一面、全國民に對して、健康の必要を説き、國民が擧つて、保健運動を行ふと共に榮養本位の食事を奨勵して、體力を鍊へたのである。

休戰直後の一九一九年には、それでも、まだ十三萬一千人、人口一萬に對して二一・一人であつた

年々大戰の二倍近くの人が、多量の資物を費はしながら死んで行くのである。
「養生救済」は「づま」に「ら」で「あ」る。
今年死にける者を五十萬人と見ると、十一月には一萬三千人となり、一

が、一年後の一九二〇年には、既に、戦前と略同数の九萬二千人で、一萬人に對する比は一五・四人となつて居る。

一九二一年には、八萬三千人となり一三・六人と云ふ減少振りとなり、一九三三年には、四萬七千人で、その對比は七・二人となり、大戰前の三分の一になつて居る。

大戰當時生れた、獨逸の子供は、今は二十近くの青年で、ナチスの意氣に燃へて居る強い青年であり、婦人も子供も國民全般がウンと體位を向上したのである。

これに對し日本は今尙結核に依る死亡率は年々十五六萬人もあり、その殆んどが前途有爲の青年子女である。殊に年々それが増加の傾向にあることは、何りよも不幸な現象であると云はなければならぬ。

乳兒死亡率に於ても、獨逸は百人に對して、六・六であるのに日本は、その二倍強の高率を示して居る。

勿論國民の健康問題は、これに對する社會的設備も必要であるが、まづ家庭でお互に注意して、健康の向上に努力しなければならない。即ち常に日光に浴すること、病氣自體に對して心配をしないこと、（結核は手當さへ早ければ絶對全治するものである）次は新鮮な空氣を求めて、野道や、樹の下や、山や、海に、親しむこと家の中を清潔にすること通風、採光をよくすること、食事は榮養に偏しな

るあてで歸る來出が者亡死のく近人十二間時一。るなと強人十三百四に日
 還し故めたの家國、はところあて女子年青の後前歳十二が々人の等れそに殊
 るあて歸

いで、野菜でも、魚肉でも、何んでも用ひる等のことが、家庭で實行されなければならぬ。結核に罹つたら、榮養が必要だと云ふので、卵や、肉や、牛乳の様なものばかりを偏食すると、却つて榮養が偏したり、酸過剰性となつて一層病狀を惡化させることがある。

獨逸の國民が、最近全面的に強くなり、結核患者が激減したのは、療養設備以外に常に自然に親しみ、適度に日光に浴し色々なものを混食をすることが徹底したことに、大きな原因があると思ふ。

獨逸人と健康 (二)

獨逸の氣候は、一般に惡く、日本の様に恵まれて居ないのである。

冬季になると日の出が朝の九時、日の入りが午後の三時頃である。日本人が考へると嘘の様な話であるが事實である。従つて日中と云つても僅かに五、六時間しかない。

今かりに地圖を出して、獨逸の位置を見るとその理けが、なる程と判ると思ふ。

即ち緯度から云つて、北緯五十二度、樺太境界線の尙北に位して居るのである。

従つて冬は寒さも厭しい上に、晴天と云ふ日が少なくて、陰氣な曇つた日が續くのである。

が士博伯佐と。い弱に般一が供子のそしかし、るれ産く多が供子にはに母い弱
。圖五・四が中の養榮、同四・三は車飯艇の母な好良養榮ち即。る居てし表發
。る居てつなと録記の同三・五が良不

もつとも、夏は、日中が長くなつて来るが、それでも六時過ぎには日が入る。

日光の恵みを受けることも、われわれ日本人から見るとお話にならない位ひ僅少である。

この氣候に恵まれず、日光に恵まれない獨逸國民の、健康が優れて居て、四季に恵まれ、日光は充分に與へられ、日出る國とまで云はれる日本國民の健康が劣惡であるのはどうしたことか。

更に醫師について見ても歐米の人口七百乃至八百人に對して、一人の割の醫師しか居ないので對して、日本は、人口百二十四名に對して、一人の醫師が居るのである。醫學に於ても決して歐米に劣る國ではない。

その日本の國民の體位が、死亡率に於て、又、平均壽命に於て、結核患者に於て、胃腸病に於て世界第一位である現状である。

筆者はこの實情に對して、「恵まれた者の不幸」と云ふ判定を下しない譯に行かない。我が國民の體位の劣等であることは、あまりに恵まれて居て、その恩恵を受けようとしないとところに却つて、健康を悪くする第一の原因があり、恵まれて居るが故に健康法について考へ様としないところに第二の原因がある。従つて國民の健康増進は、單なる政府の施設のみに依らず、まづもつて、全國民に、大自然を活用するの心掛を持たしめると共に、積極的に保健、衛生に對する智識を作ることであり、この兩者が、各々日常生活の上に各家庭、各人の習慣とまでならなければならないと思ふ。

殊に乳兒死亡率の多いことに對しても、生れた子供が弱體であるのではない、その母が育兒に對す

殊に乳兒死亡率の多いことに對しても、生れた子供が弱體であるのではなく、その母が育兒に對する智識の乏しいために、健康に育ち得る者も、死亡する。この結果が、現在の數字を示して居るのではあるまいか。

我國は、都會と云はず農村と云はず、薄暗い部屋に寢具をそのまゝ萬年床として居る家があつたり、手拭、食器等の手入を怠つて不潔なもの或は、室内に濕氣が充満して家の中がチメチメして居る不健康な生活を敢て平氣で居る家庭が尠くない。それで、都會にも、農村にも病者が絶へないのである。

國民の健康問題も、節約生活も、共に、これが各人各家庭の自覺に依る日常生活の習慣とならない限り斷じて、これは改善され得る問題ではない。

物資の乏しい獨逸國が合理的節約生活の習性を作り、氣候に恵まれない獨逸民族が、積極的健康生活を実施して強くなつて居るが如く、吾人も亦その兩面に對して、もつと忠實でなければならぬと思ふ。更に今一つ希望したい事は、健康と精神の問題であつて、國民は一般にもつともつと、なごやかな實生活をしなければならぬと思ふ。

一日の勞働が終つたら、たのしく休養することである。正しい休養、正しい娛樂は健康を増進するために大きな意義があると云はなければならない。

非常時局に際して一層その必要を痛感する。

獨逸の文化

獨逸は傳統的に優れた文化をもつて居る國である。文學に、哲學に、醫學に、音樂に、建築に、繪畫に、化學に、世界に優れた文化を持つて居る。

獨逸の醫學は世界一と云はれ、我國が獨逸醫學の流れを受けて居ることは何人も知つて居るところであるが、文學にしても古くはドウラングやシルレルがあり、カント、シヨールペンハウア、ヘーゲルの大哲學が出で、近くはオイケンの哲學或は詩聖ゲーテが生れて居る。

殊に獨逸の音樂は素晴しく、バッハが生れ、モツァルトが出で、ベートーヴェン、ハイドン、シューベルト、ウエーベル、メンデルスゾーン、シューマン、リスト、ワグナー等これ等著名の音樂家は總て獨逸人である。

獨逸音樂は、まづたく世界的に有名であつて、國民の殆んどが名曲を鑑賞する力を持つて居るのも亦當然であると云はなければならない。

まづたく獨逸は音樂の國、歌の國と云ふことも出来るのである。

だから、獨逸では、音聲言語醫學と云ふ音樂と醫學の關係を研究する特殊の醫學があり、これを研

究する専門大家も相當にあるのである。

獨逸の國立音樂劇場が、いつ行つて見ても満員で、その切符は、年中一週間前に申込まなければ手に這入らないと云ふ。

數年前の話であるが獨逸へ旅行して、國立劇場へ這入りたいと思つても切符が買へない。そこで下宿の人に頼んで漸くその日の切符を一枚譲つて貰つたのであつた。ところがその切符の持主は夫婦暮しではあるが、至つて、まづしい階級の夫婦で主人はどこかの工場に働いて居たと云ふ。しかもその切符は一等席、邦貨の十四圓見當（今はもつと安い）のものであつたのである。

夫婦二枚の切符代は、二人の半ヶ月の生活費に近いとのことであつた。

この一事でも、獨逸人の音樂オペラに對する考へ方が、如何に生活の中に溶け込んで居るかが窺はれる。だから何を節約しても、蓄音機と、ピアノを備へたいのが獨逸の家庭の希望である。

かくの如く音樂は飯より好きな獨逸は、又學問の國でもある、だから國民は出来るだけ、上級の學校へ進む、進み得ないものは民衆大學で學ぶ、圖書館を利用するのである。

又獨逸は、化學についても世界一の稱を持つて居る。

藥品、染料、其他獨逸の工業製品に追ひ付く國は無いとさへ云はれて居る。

諸機械、工具も亦そうである。

化學の國、技術の國、あらゆる點に於て獨逸は優れた文化を備へて居るのである。此處にも亦獨逸の強味がある様に思はれる。

獨逸の力

優れた文化を持つ獨逸の強味は、たゞにそればかりではない。

獨逸人の粘り強き精神力、この力は、直ちに獨逸國の力である。これは、そして獨逸國傳統の力でもあるのである。

伊太利を訪問した。ヒットラー總統に對し、ムツソリーニ首相は、獨逸民族の偉大な力を、次の如く賞して居る。

「閣下の國の平和と力の功業の驚嘆すべき範例を茲に想起する。閣下の國はその國民の偉大さを物語る鍛鍊と勇氣と粘り強さなる美德の基礎上に閣下の力に依つて復興した。」

獨逸の偉大さは、色々あるであらうが、筆者はまず、獨逸の偉大さを、國民の粘り強き精神力にあると云ひたい。

まことにムツソリーニ首相の言の如く、獨逸民族が起ち上つた力は、この精神力であつた。

憶へば、獨逸の第一帝國は、彼のナポレオンの大軍のために破れ、第二帝國は、あの歐洲の大戦に破れたのである。しかし偉大な獨逸は再び起ち上つたのである。ナポレオンの大軍が獨逸の國境エナの町に迫り首都柏林を占領したのは、今から百年前のことである。

この時エナの町に代用教員をして居た熱血青年ヤーンは、眼のあたり祖國獨逸の不甲斐なき敗北を見て、「こんなことでどうする、耻を知れ！」

祖國獨逸を滅してはならない。その燃ゆるが如き熱をもつて、熱血兒ヤーンは起つたのである。

全國を行脚しては熱辯を振ひ、到る所の緑の空地、町や村々に體操道場の大杭を打ち立て、全獨逸の若人に體操熱を鼓吹したのであつた。不撓不屈、ひたすら國民の意氣振興に一身を捧げたヤーンこそかの有名な、獨逸國民體操の鼻祖、フリードリツヒ・ヤーンその人である。

かくて、全獨逸青年の血を湧かせ、體力を充實し、七年後のウォータローの大激戦に於ては、みごとナポレオンを惨敗させたのであつた。

かくて再び、歐洲の大戦に破れた獨逸は、今やヒトラーの現出に依つて、「祖國獨逸の第三國家完成へ！」の標語に向つて前進し、此處に再び世界の大獨逸國として起上つたのである。

破れて屈せず、如何なる困難に遭遇することがあつても斷じて挫けない精神力は、まさに獨逸民族

の境であらう。

「農村から街に出る獨逸の農夫は、その手にその肩に自ら作つた煉瓦を運ぶと云ふ。云ふまでもなく、國家へ捧げるのである。自ら作つた一個の煉瓦を運ぶことを忘れない獨逸民族は永久に亡びない。」

筆者はそこに祖國を愛する獨逸國民の熱情を見るからである。

獨逸精神

「一男子の一言」と云ふ言葉が獨逸にある。

これは、多くを語ることなく、最善の一言を、口にすべきであると云ふ事であると思ふ。同時に此の言葉は、愚痴や、泣き事を言はず、日常の各々の業務に、或は健康に、實生活に、そして休養に、その最善を盡すこととなるのである。

だから、獨逸人の生活は、あらゆる點から見て、國民各々の屬する業務の上に最善が現はれて居るのである。

等しく國民の國家に對する考へも亦同様であつて、國民は、國民としてなすべき最善を國家に捧げるのである。

従つて獨逸に於ける道德律は、その國民の行ひが、果して國民として、最善を盡して居るかどうかに依つて判定され、人の價値の評價が決定されるのである。

そこで、獨逸の社會秩序は、より最善なるものを尊しとする絶對の規準がある。偉い人の惡口や、陰口を云ふ者もなければ、自ら及ばざるに、その人の地位を妬む者も無い様である。

物を製造するにも「最善のものを」と云ふ考慮が拂はれる。一本のペン先、一本の針を作る場合もそうである。物資を消費する場合も亦、最善の消費の方法が考へられるのである。

其他、時間の活用、能率の増進、等總て、此の最善の一點について、つきつめた考慮が拂はれるのである。

一本の煙草を喫ふにも、獨逸の國民は、最善の喫ひ方をする。落付いて火をつけて、靜かにその煙草を味ひながら喫ふのである。

この場合決して無意味に煙にしない。

獨逸人を評して、廻りくどく簡明さが無い國民だと云ふ者もあるが、これは、人に對して、自己の最善を回答しようとする獨逸人の用意が、相手方にそうした考へを起されるのである。

相手の眞意をよく聴き、これに對して、自己の最善の言葉を返すのが獨逸人である。

しかし、それは、外形的のお上手とか、美辭麗句とか、お世辭を云ふのではなく、飽くまで、内容的な、最善さである。従つて時に、獨逸の言辭は、ギョチないと云ふ批評も出るが、言葉にベールを掛けて、心にもない事も言はれるのよりも遙にその方が良い。

「巧言令色仁鮮」とは東洋の教へである。しかし吾々日本人は、未だに最善の言葉を用ひず、如何に美しい云ひ換へれば、如何に飾つた言葉を用ふべきかについて考へられて居る向きが尠くない。

これは單に言葉の上ばかりでなく、あらゆる點に於てそれが窺はれるのである。服裝に、家庭生活に、街頭に、社交に、見榮となつて現はれ、虚榮、虚飾となつて現はれるのである。

此處に虚偽の社會が発生し諸々の罪惡が生れるのである。

精神文化に代つて物質文明が現出し、科學萬能の技術的社會が現はれるのである。

われわれは、もつともつと、内的完成に向つて前進し、眞の日本の精神を取戻さなければならぬ。

オリムピック餘談

ヒットラー總統は、先手オリムピックを自國で開催するにあつて、全國民に次の様な訓示をした。「國民の行動は、總て獨逸國を代表して居るものであるから、各自は總てに注意して、獨逸國の尊嚴を傷けない様にしなければならない。」と、

又、オリムピック開會中は、「窓へ花を！」と云ふスローガンを用ひて、都市美を強調し、列車の沿線は一齊に清掃して、旅行者に不快の念を抱かしくない様に意を用ひ、更に外國人に對しての應接、言語、態度に至るまで、いちいちこれを訓示して居る。

流石統制の國獨逸の行届いた注意が窺はれる。

近く日本でもオリムピックが開かれようと云ふのであるから、こうした點について、國民は、もつともつと注意したいものである。

外國人が來れば、港へ押しかけて、サインをして貰つたり、狂氣じみた態度で、送り迎へをする日本の若い婦人は、日本獨特のものであると云はれて居る。

これは、まさに國辱物である。

次に街や、公園其他、觀光地と云ふ場所は、至れり盡せりの案内揭示がしてあつて、旅行者はたと

へ、その土地に不案内の者でも、見當さへ判れば人に道を訊ねたり、まごついたりする心配のない様に行届いた説明がしてある。

橋の畔にそれがある。辻々にその説明がある。公園に這入ると公園内の説明が行く先々に書いてある。

電車に乗ると、その切符に乗客の注意が記入してあると云ふ譯で、總てが、行届いて居る。人々の便利な様に、そして、あくまで手数が省ける様に總ての點に手の届く様に考へられて居るのである。この點についても、日本は、全國的にそうした施設が欠けて居る様に思はれる。

日本人が、國內の觀光地へ行つて見ても、その土地の人が案内人に訊ねなければ、どこに何があるのか、公園内で何が見るべきものであるか、一向にそれが、判らない。

早い話が、東京に永く住んで居るものでも、日比谷公園の中へ這入つて、何處に何があるのか、道を示した札もなければ説明も書いてない。

漸く十回も二十回も行つて見て、此處にこんなところがあつたのか、と思はせられる。それは廣ひからではなくて、公園に来る人を案内して色々の場所を見物させ様と云ふ親切が當局者に欠けて居るからである。

これは日比谷公園ばかりでなく日本全國の觀光地に欠けて居る點であると思ふ。

折角海外へ観光客誘致の宣傳をして置いて、國內の手近かで、最も大切なことが整つて居ないことは甚だよろしくない。

パリ博と獨逸國の出品

先頃パリで開かれた博覽會には、日本も出品をして、大味噲をつけたと云はれて居る。

國を代表した出品物が、貧弱である場合、その入場者は出品物に依つて、その國情、國力等を自由に判斷する。そこで、日本と云ふ國は、あんな貧弱な國かと云ふことになるのである。

それと反對に、陳列場所の廣大、出品物、陳列の形式が整つて居て、如何にも立派であれば、流石あの國は立派である。と云ふことになる。

殊に博覽會あたりの出品は、自國の文化を紹介し、宣傳するために行はれるものであるから、あくまでも、一つの出品物に對しても、設備にしても、國家自體の人格を備へて居なければならぬものである。そこで獨逸がこのパリ博でどんな構へをしたかと云ふと。高さ二十米もある物凄い石造りで、面積も日本の陳列場の二十倍もあつたと云ふことである。

これについて次の様な話がある。

初めの計畫は、相當考へられて設計されたのであつたが、さて会場へ陳列をするために、係員が出張して見ると、恰度真向ひの佛蘭西の陳列が、實に素晴らしいものでこれでは獨逸の陳列が貧弱になるから早速本國へ打電したところ、根本的に陳列を變更せよと云ふ命令が來た。

ところが、根本的に設計を變更するとすれば、開會迄に現在本國から出張して居る人夫では不足するので、バリの労働者を雇ふことにして、交渉したところ、料金の高い上に、時間外はいくら金を支拂つても働かないと云ふことが判つた。

そこで再び本國へ人夫の不足を電報したところ、翌日飛行機二十臺をもつて、二百人からの人夫が巴里へ送られたのである。

それで連日夜業を續けて、会場第一 世界各國の賄を抜く様な陳列を完成したのである。

この獨逸の陳列を見た人は一樣に、流石獨逸であると感嘆したのに對して、日本の貧弱さ加減は自國民がどう最眞目に見ても、見劣りがして、その前に起つて居られなかつたと云ふことである。

自國の文化を、世界人に知らせ様とする陳列が、貧弱である事程逆効果を示すものはない。

この點についても、國家はもとより、民間の諸團體、さては、商店會社の宣傳に至るまで大いに考へらなければならない事だと思ふ。

まだ日本を見ない外國人が、從來宣傳された富士山と、櫻、雨傘と扇子、人力車、これが日本の全部であり、ビルディングも、高架線も、大工場も、自動車も動いて居ない日本を想像するのは、總ての點に於て、從來の宣傳が間違つて居たからである。

その印象が、日本を、いつまでも、未開の國にするのである。

色々の意味で此處に大きな損失がある。

眞の日本の姿を傳へるために、もつと、もつと、日本は文化宣傳に力を入れなければならない。

獨逸國バワリヤの山莊より

本篇は筆者の友人が獨逸國バワリヤの山莊より、筆者へ宛て通信されたもので、季細は小原稔生著「祖國を顧みて」の中に發表されて居る。

小原稔生氏は筆者の敬慕する經世家であり、我國に於ける農村問題研究の權威である。従つて茲に掲載されることも獨逸國の農村關係の事が多いことを豫め斷つて置く。

道傍の並木は皆果樹

南獨バワリヤのミュヘン郊外十二里の山莊に、悠々として、白眼世を運れてゐる學者であり、經世家であり、しかも東洋通であるフォン・フリーゼル氏から、ぜひ遊びに来るやうとの手紙を受取つたので、田園の山莊で、新緑の薫風にひたつて、旅の疲れを慰めたいと、ベルリンを立つたのは、五月十五日の夜であつた。汽車の窓には十三夜の月がおほろにほゝゑんでゐた。

フォン・フリーゼル氏の山莊に於ける五日間は旅の疲れをすつかり、洗ひ流して、私の五體には、英氣が満ち溢れるやうな心地がして、私は、その山莊を辭し、再び南獨一帶の視察の旅に上つたのであります。

ドイツの中央部より、南及西の各地方を旅行して最も目につくのは、道傍の並木が、林檎とか、胡桃とか梨とか云ふ果樹であることであります。この道傍の並木である果樹よりの収入は、頗る巨額に達するものですが、これは、ところに依り、村のものであるものもあり、縣のものであるものもあります。

五月は丁度 林檎や 胡桃や梨の花盛りでありますので、私はそれ等の花の美しい眺めをたのしみな

がら、旅を續け得たのであります。

道國は放長延總の路道の國我、入牧の國萬千四々年らか路道の居てしは遊
き置町一均平へ側兩の道のそに假今。るお里十四百四千五萬二計合の道縣府
。るなと本百六千三萬三十六百六千三計總、とふ行を林植な用有に

がら、旅を續け得たのであります。

この道傍の果樹の實が一つも盗まれずして巨額の收入を擧げて居ることは、獨逸人が、いかに、徳について訓練されて居るかを知らることが出來ます。

それにしても、日本の農家は、家の周圍に澤山の空地があるのですから、もつと、これを利用して、色々の果實を栽培したら、自家で用ふだけでも相當の收穫があると思ひます。

又村有地や、官有地を、もつと活用したら、それから相當多額の收入が得られるのではないかと思ひます。

一木一樹毎く造林

フオン・フアーゼル氏は、東洋を二度も視察したことのある東洋通でありますが、十年前に三ヶ月も日本に滞在せられた時、私は、同氏の關東、東北、北海道の視察に行を共にしたと云ふ深い緣故があるのであります。

同氏が、インドより東洋諸國にかけての第二回目の旅行は、一昨年末より、昨年に亘り、滿洲を親しく視察して歸國せられたのは八ヶ月前であります。

同氏の山莊には、數頭の乳牛のほか、山羊も、豚も、兎も、鶏も、鳩も、飼はれて居り、これ等の飼料も全部自己の農場より自給されて居ります。山莊には畑あり、牧場あり、林地があつて、日本なぞでは一寸見られない整つた、そして、ゆつたりした一團の莊園であります。

ドイツの各國を視察して、まづ私共の目を驚かすものは、到るところの山林が、悉く、造林であると云ふことであります。

晝なほ暗き蒼々たる森林も、必ず、人の手によつて作られたものと云ふことであります。

如何なる大面積の山林も、總て人の手に依つて作られたものであります。この造林に關する智識は、獨逸の農家によく徹底して居るのでありまして、農村人は勿論、國民全體を通じて、山林愛護の風習も、ドイツ全體に亘つて居ります。

この造林に依る各種の林地からは、農家も年々相當の收入を擧げてゐるのであります。

日本の全面積の僅かに一割六分が農耕地で、他は殆んど林地山岳であります。これを人工に依つて、植林されるのでなく、そのまゝにして放棄されて居る點は、ドイツと比較して大きな相違であります。

日本の農家は、ものと山林地に手を加へて、造林計畫を進めることが、必要であります。

飛び交ふ小鳥の囀り

フオン・ファールセル氏の山荘に五日間滞在在中、私が心をたのしませたのは、小鳥の囀りでありました。

山荘の室内にあつても、小鳥の愛らしい交響樂は、東明より黄昏までよく聴かれるのであります。一步農園に出て林地へ入れば、木より畑へ、畑より木へ、枝から枝へ、群れ飛ぶ各種の愛らしき姿と共に、其の愛らしき囀りの歌に私は恍惚となるのでありました。

この山荘の樹木の中には、小鳥の巢函が五千二百七十二個も取りつけてあるとのことであります。巢函の大きさは鳥の大小により、その大きさを異にして、その形も種々さまざまであります。キツツキのためには自然木を皮のまゝ一尺位に切り、中を空洞にして上下を塞ぎ、横の上位に丸い穴を穿つたものを、樹木の然るべき高さの所に、針金や、紐で結び付けてありますが、この山荘には六種のキツキが居るとのこと、その種類の大小に依つて、巢の大きさも色々になつて居ります。

その他、四十ガラ、椋鳥、フクロウ等に對しては家根のある巢函や、そのほか、空洞に似た自然木の形をしたものがそれぞれ備へ付けてあります。

巢函ばかりでなく、巢をつくる材料である藓苔類や、落葉や、禾本科の莖葉などについても、細心

の注意が拂はれて、營巢に事欠かない様に、これ等の材料の不足するところには、これ等のものを用ゐるべく自然のまゝに、似かような形に置かれるのであります。

鳥に依つては、營巢に、羽毛を使つたり、馬の尾毛を用ひたりするのがありますから、これは、かねがね、用意して置いて、營巢の時には、これ等の羽毛や馬の尾毛まで、それぞれ適當の場所に、撒布さるゝのであります。

巢函の設置を初めとし、これ等の營巢材料までも、多年に亘つて、用意周到に、小鳥の便利を計りつゝあることが、この山莊に小鳥が群をなし、年々増加する所以であります。

小鳥は農業の守り神

新緑を撫でゝ来る薫風に、小鳥の歌を聴き、葉巻をくゆらしながら、眼を細ふして話すフアーゼルの氏の小鳥に對するお話は、實に趣味と實益に満ちたもので、生涯忘れることの出来ない尊いものであります。

これからその話を少しばかり左にお知らせ致します。

「鳥のために巢を作つたのは、おそらく、世界でドイツが始めて、それは中部ドイツのツールンギヤ

「鳥のために巢を作つたのは、おそらく、世界でドイツが始めて、それは中部ドイツのツーリンギアのベルレブシュ男爵が、五十餘年前に、その領地内で巢函につき種々の方法の試みに成功したのが始まりで、間もなく、これが、獨逸の全土に及び、引ひて世界の各國にも亦、各地これを採用するに至つたのであります。

農業經營には、鳥類は無くてはならぬものである。昔、プロシヤのフレデリック大王は、櫻桃の實が大變好きであつたのですが、櫻桃の熟する頃になると雀が啄いて、その實を害すると云ので、雀を始め數種の小鳥驅除の勅令を出されたことがあります。

何分大王の命令でありますから、人民はそれと云ふ譯で、雀や、小鳥を、一生懸命になつて、驅逐し盡したのであります。ところがどうでしょう、その爲に毛蟲、其の他の害蟲が大いに發生して、二年の後には、その地方の果實は、ほとんど全滅せんばかりになつたのであります。さすがのフレデリック大王も大に驚き、早速前の勅令を廢止すると共に、今度は、大いに小鳥の保護を獎勵さるゝ事となり、他國から小鳥をドシドシ輸入して、害蟲驅除に力を注がれ、漸くその被害を輕減することが出たことがあります。

一七八九年に、プロシヤのサキソニー及び、ブランデンブルグで、森林が大慘害にかゝり、樹木の大部分殊に、杉や樅の類は全滅したことがあります。そこで政府は、博物學者と林學者を同地に派し

て實情を調査したところ、この地方では數年前から啄木鳥が居なくなつて、そのため木喰蟲の大發生を來し、前記の大慘害を見るに至つたことが判明したのでありました。

又、一八六一年にフランスの農作物は、凡て非常な減收を見たので、同國農務省では、これが原因研究のため諸方面の學者を網羅して、委員會を組織したことがあります。この委員會の調査に依りますと、當時フランスでは、種々の小鳥類を獵して、これを食用にすることが各國に流行し、そのため有益な小鳥類が著しく減少し、従つて、果樹、蔬菜始め、農作物の害蟲が大いに發生して、收穫の大減收を來したと云ふ事實を發見したのであります。また、明治二十八年にシベリヤのエカテリンブルグで根切蟲と、蝗蟲が大發生して、飢饉が起つたことがあります。この原因も、當時この地方から、婦人の帽子飾用として、小鳥の羽毛を歐洲に輸出したため、小鳥が非常に減少したことに依ることが判つたのであります。

害蟲ばかりではありません。造林を荒す兎や野鼠の害についても同様のことがあります。

これは、アメリカの例でありますが、一八八五年ペンシルバニア州では、洲の法律を制定して鷹と巢を一羽五十センの賞金をかけて買ひ上げ、これを絶滅せんと圖つたことがありました。この法律の實施後一ケ年間に、その買上のために支出した金額は、九萬弗に達したと云ふことであります。ところが、その結果は野鼠が、非常な勢ひで殖へてそのため農作物の損害が、一ケ年四百萬弗の巨額を越へ

たと云ふことになり、天下の物笑ひになつたことがあります。

フアーゼルの話から私が思ひ出すのは、大正四、五年の兩年に亘つて、山城の宇治の茶園に、シヤクトリ蟲が大變發生して、宇治茶園が全滅しはせぬかとの騒ぎがあつた時の事であります。ところがこの宇治郡に宇治塚と云ふて、わがやう、つこのみこと稚郎子尊のお墓がありますが、この時この御墓の附近の茶園だけは、一向シヤクトリ蟲の害を被らなかつたのであります。それは宇治塚には、樹林が多く、多數の小鳥が棲んでゐたので、他の茶園の様に大きな被害を受けない内に、小鳥がシヤクトリ蟲を、喰ひ盡したのであります。

鳥は害蟲驅除の専門家

蟲類の蕃殖は非常に旺なもので、もし外敵のために食害しられなければ、草木は數年ならずして、全滅する計算になると云ふことは昆蟲學者の研究し盡した定説であります。鳥は色々の種類の昆蟲を、絶へず撲滅して居ると申してもよろしいのでありますが、然らば、これ等の鳥は、一たいどの位多くの害蟲を食ふかと申しますと、ドイツの學者の調べた、一羽の郭公の胃の中には、左の通り驚

くべき数の害蟲があつたのであります。

ドク蛾 一種(幼蟲)……	二三八尾	ウメ毛蟲(幼蟲)……	一七三
白ドク蛾(々)……	九八々	ツノ毛蟲(々)……	六三
コガネ蟲一種(々)……	六〇々	コガネ蟲種(々)……	一〇
キンケ蟲一種(々)……	五〇々	マツ毛蟲(々)……	一八
ブランコ毛蟲(々)……	四九々	ハマキ蟲(々)……	一一〇
ノンネマイマイ(々)……	二六々	ハバチ(々)……	五二
右 同 (蛹)……	二々	ギンモン蛾(々)……	三〇

また ローリツヒ氏は、野外の鳥の行動を精細に觀察して、次の様な實例を報告して居る。

即ち、二羽の四十ガラは、午前六時から午後七時までに、ヤナギ毒蛾及ウメ毛蟲の蛹一八七尾を、また三羽の四十ガラと、三羽の日ガラとは毎日マツ毛蟲及ドク蛾の卵九、五〇〇乃至一〇、〇〇〇個を啄食した。また三羽のヘンリンガラと一羽の日ガラと一羽の柄長と三羽のキクイタダキとは、ナシモンエダシヤクの幼蟲を晝から夕方までの間に、一〇九六尾を食つたと報告して居る。

以上の二つの例は、いづれも、成鳥の場合でありますが、鳥は雛の時代には、成長するために、多くの養分が必要であるからして、害蟲を食ふ量も猛烈であります。

小鳥は雑草の駆除者でもある

鳥は總てが、蟲などの動物質のみを食ふものでなく、鳥の種類に依つては、植物質を嗜むものも、その数はなかなか多いのであります。そこで、かような種類の鳥は、屢々農作物を荒すと云ふ非難を被るのでありますが、しかし此の種類の鳥は、雑草の種子を啄食し、大いに農家に益を與ふるものあります。

然るに、この注意すべき事實が、とかく閑却され勝ちで、いかにも残念であります

鳥類中で、所謂狩獵鳥類と呼ぶるゝ類は、多くは雑草驅除の大役を勤むる、農家にとりて、大變必要な鳥であります。

鶉の如きは、此の點に於て、最も著しき益鳥であります。鶉は、春夏の候には害蟲を食ひ、秋冬の候には、田圃の雑草の種子を食ふのであります。鶉一羽は一日一オンス半の雑草の種子を食するものなることが判つて居ります。だから、秋冬に於ける鶉全體が喰ふ雑草の種子は何萬何千噸と云ふ非常に大量のものと云はなければなりません。

雉も此の點から見て非常に有益な鳥であります。雉の食ふ雑草には、タデの實、カタバミの實、ネトトギスの實、ハンゲの根などもあります。このハンゲは農家にとりて最も厄介なものでありま

すが、雉は好んでハンゲの根を嗜考するものがあります。

雀は農作物の害鳥など云ふものがありますが、その食物中、穀物の分量よりは、雑草の種子の方が、ズット多く食ふものであります。ノビエ、スズメヒエ、メヒシバ、ギヨウギシベ、ノミノツヅリ、アカザ等は雀の最も嗜好する種類であります。

かくの如く、鳥は雑草を喜ぶものでありますから、農業には、小鳥の愛護を絶対としなければなりません。

従來の様に小鳥は農作物を荒らすと云ふ考へ方は大變間違つたものと云はなければなりません。

小鳥を愛せよ

以上がフォン・ファール氏の農業と小鳥の關係についての話の大體であります。

ドイツでは、農業林業に必要欠くべからざる小鳥の愛護のことは、既に全國民に徹底してゐる事柄であります。それでも、今日猶ほ、農山村のドイツの小學校では、手工として、よく小鳥の巢嚙を作らせて居るのを見受けます。ドイツでは、このやうに、學童に必ず、巢箱をつくらせると共に、鳥類

と農業林業との關係につきては、十分なる知識を與へて鳥類愛護の精神をますます深く涵養して居るのであります。

日本の農村人には、各種の鳥類が、こんなに農業林業に大切なものであることが、判つてゐないことはまことに、残念であります。

雀などを今日尙害蟲と心得て居る者が多いのではありませんまいか。

日本に於ても、農村の疲弊を救ひ、農村の振興を計るために、この鳥類愛護の大運動を起す必要があります。

殊に小學校、青年學校等に於ては、鳥類と農業、鳥類と林業の關係を十分訓育して、農山林地に於ける小學校では、必ず手工として、小鳥の巢を作らせ、これをそれぞれ、樹林の中に設置せしめて、鳥類愛護の精神を涵養する必要があることを私は痛感して居るのであります。

「あの米の害蟲である螟蟲だけに依る損害でも一ヶ年五千萬圓より一億數千萬圓に達するだらうと云はれて居りますが、この損害は云ふまでもなく、農村の損害であり、日本全體の損失であります。

ところでこの螟蟲は、幼蟲の状態で、稻の切株の中に潛伏して冬を越すのでありますが、椋鳥は稻の收穫後、水田の附近に群がり、この切株中に潛伏して居る螟蟲を啄む本能を持つて居るのであります。椋鳥は一日に實に百匹近くの螟蟲を食するものであると鳥類學者に依つて、研究發表されて居り

ます。

螟蟲が食はれず、これが蛾となれば、約三百の卵を産みますが、その卵より孵化した螟蟲は一二匹で、一本の稻を枯らす力を持つて居りますから、以上の事實から考へて見ますと、椋鳥が蟲を喰食して、農家に與へる利益は、米に對するだけでも、實に莫大なものであります。米作國である日本では、よろしく椋鳥を神の使ひにして、これを愛護して、日本至るところの農村に椋鳥の群を見る様にしたいものであります。

牛、豚、鶏の飼養

ドイツの農家は作物を作る他に、牛や、豚や、鶏を澤山飼養して、一面に畜養を行つて居ります。牛乳から取つた乳は、毎日組合へ運んで、バター、チーズの原料にします。豚も適當の大きさになりますと、組合に集めて、ベーコン、ハム、ソーシド等を作ります。鶏卵は三日おきか、五日目に組合で集めて、商品となつて、組合で扱はれます。

一家の農家で、耕地の大きさにもよりますが、乳牛の二三頭、豚の五六頭、から十頭位までそれに鶏

が七十羽から二百羽位ひ飼はれて居ります。

鶏の飼育は婦人の仕事となつて居りますが、其他に七面鳥や、鶉も相當に飼はれて居ります。

それでドイツの農家は一般に恵まれて居ります。殊に組合が發達して、居てこの組合の指導で、農家が經營されるのでありますから、生産品の配給も、價格も維持されて行くのであります。

大戰後の苦しみは、農村と雖も大變なものでありましたが、その農村が復興したのは、まづたく農村の協同組合が發達して居たからであると云つてよいのであります。

そこで少しドイツの農村協同組合のことを書いて見ませう。

大戰後のドイツの復興については、ドイツの政治家は、期せずして、國の基である農村に注がれ、疲弊困憊に喘ぎつゝあつた農村の悲痛な姿は、政治家の胸に恐ろしき力をもつて迫つて來たのであります。

農村を復興し、農村を安定しなければ、ドイツの復興も安定出來ないとの見解には、各黨一致し、インフレーションに依つて、打ちのめされた農村に對し、議會に設けられた、經濟調査委員會は、農村協同組合を統一して合理化する事の急務を強調し、政府も敢然として、その促進に乗り出し、その合理化のために、二千五百萬マークの支出を決し、更に農村中央銀行や、ブロイセン中央金庫等よりも、巨額の資金を支出することになり、昭和四年七月には、二系統の中央合併となつて、獨逸全體を

通じたる新中央會がめでたく設立されたのであります。

かくして、全國各地の各種聯合會は悉く、この中央會の支配下として参加し、此處に新しいドイツの協同組合が生れたのであります。

ドイツに於ける最近の農村協同組合數は、四萬千四百九十八組合で、これを類別すれば、次の通りであります。

名 稱	組 合 數
信用組合.....	二〇、二八九
購買販賣組合.....	四、五四二
牛酪組合.....	四、八四七
電氣組合.....	五、九六四
畜産販賣組合.....	四八一
鶏卵販賣組合.....	四八五
青果販賣組合.....	三〇五
葡萄酒組合.....	三六九
機械組合.....	一、〇四八

牧畜組合.....	一、〇八七
植民及小作組合.....	二七三
製粉製パン組合.....	一二三
火酒組合.....	一四一
其他の組合.....	一、五四四

農村組合の特色

ドイツの農村組合中最も、關心すべきは、信用組合と購買販賣組合の二つであります。

さて日本では信用組合は一事業主義で生れたのでありますが、ドイツの農村に於ける信用組合は當初から購買販賣等をもなるべく、兼營するやうに指導されたので、單に信用組合と云つても、その事業の中には、購買販賣はもちろん、その他の業務も含んで居るのが多いのであります。

つまり農林の地域主義に依り、一定の地域内における人々に必要なるものは、一つの組合で何でもやるのがよいとの考へ方でありまして、この事は、日本に於ても、漸く考へられて來た様に思はれま

す。

このドイツの農村協同組合たる信用組合の参加者は、目下約二百五十萬人でありますから農民戸數五百〇九萬餘戸に比すれば、獨逸の農民の約半數は信用組合に加入して居る譯であります。

ドイツの信用合組では、貸付は組合員に限りませんが、その資金を充實するために、預金は組合員外の人々よりもドシドシ預つて居るのであります。

この信用組合の組合員は決して、農民だけではないのでありまして、農村に住む人々ならば、あらゆる人々を網羅して、打つて一丸とする相互扶助の協同精神を發揮して居るのであります。統計の示すところは、左の通りで、この事は、日本でも大に考ふべき事であると思ひます。

職業種別	人員	割合
農民	一、〇八五、八〇八	六一・一
商工業	二九〇、七〇三	一六・四
牧師	七、七一七	〇・四
教員	二四、四四九	一・四
俸給生活者	七五、七八五	四・三
農業労働者	五七、六九一	三・二

工業労働者……………一五一、三六八

八・五

公法人……………一五、三三二

〇・八

其 他……………六九、二二一

三・九

信用組合で運轉してゐる資金は二十七億餘萬マークの巨額に達して居りますが、各組合員の出資額平均は僅かに三十一マークであります。日本の信用組合は、組合員の出資額平均が六十六七圓であつたと記憶して居ります。から獨逸は日本に比較すると四分の一の小額出資に過ぎません。

更に獨逸の信用組合の働きに於て、日本より大に進んでゐる事の一つは、政府の低利資金貸付に於ては、信用組合が仲介者となつて一定の利鞘をとると共に、その保證をなし、組合員の便宜を計り、大いに、その効果を擧げて居ることであります。

日本では、農村とかけ離れて居る農工銀行や、勸業銀行のみが、政府の低利資金を取扱つて居る關係で仲々實情に即して居ないのであります。なほドイツでは、組合員の負債整理、内地植民、自作農創設に關しても、信用組合が政府との間の仲介者となつて働いて居るのであります。

日本の信用組合も早く此處まで擴張されたいものだと思ひます。

★

×

×

以上をもつて、ドイツ國、バワリヤの山莊からの通信を終りますが、日本の農家が、積極的に進まれる上に、多少とも参考になれば幸せです。

獨逸の産業

ドイツの氣候風土の自然的條件は、必ずしも良好ではない。むしろ我が國に比較すれば餘程悪いと云つて良い。

しかし、國民の努力に依つて、獨逸の産業は著しく發達して居る。

獨逸の在來の面積は、朝鮮を除いた日本の廣さ位で、即ち四十七萬六千七百十 *sq. m.*、人口凡そ六千五百萬人、であるが、最近オーストリアを合併して、新面積は約六十萬 *sq. m.*、人口は七千三百萬人となり、各國の海外領を加算しさへしなければ、ヨーロッパに於ては、面積人口共に實にソヴィエト、ロシアに次ぐ大國である。

歐洲大戰の結果ドイツは六萬五千 *sq. m.* の土地と、六百四十七萬餘人を夫々、フランス、ポーランド、チエツコ、スロバキア、リトアニア、ベルギー、デンマーク等の隣接諸國、割讓せられ、この

他二百九十萬 *sq. m.* に及ぶ海外の領土を失つたのであるが、今回のオーストリアを併せて、相當償ひ得たのである。

他二百九十萬 *km²* に及ぶ海外の領土を失つたのであるが、今回のオーストリアを併せて、相當値ひ得たのである。

國內の地形は、平野と山嶽地區が半々と見てよい。

耕地面積は二十萬五千 *km²* (オーストリアを除く) で、全面積の四四%、草地及荒地は二五%、森林地二五%で大部分の不毛地は、最近全獨逸青年の勞働奉仕團の手に依つて耕地化して來て居る。

全國民の三分の一は、農業に従事し、農産物としては、馬鈴薯は年産四千萬餘匁で世界で第二位である。ライ麥は中歐、東歐農民の主要食物である。

この地大麥、燕麥、小麥の産額も尠くない。

甜菜は科學的研究に依つて、世界一の發達振りであり世界産額の三分の一に及んで居る。其他ホップ、葡萄、煙草等も相當に産出する。

牧畜は、牛、約二千萬頭、豚凡そ二千四百萬頭、で、肉類、ミルク、バター、チーズ等は、消費統制を實行して居るが、とにかく、自給自足出来るのである。

殊に最近北海に對する漁業に力を入れて居ることは注目に値する。

森林の面積は約二十萬八千 *km²* で、この八割までが人工林である。樺、松、樅の用材を産出して居る。

前項ヱハリヤの山莊よりの通信に見られる如く、森林の科學的な經營法は、實に世界の模範とされて居る。

かくて植林によつて年々多額の收入が擧げられるのである。

其他、鐵、石炭を相當に產出し、石炭は戰後一部の鑛區を奪はれたけれど尙英米に次ぐ產額をもつて居る。

又、加里鹽は世界一の產額で、岩鹽、褐炭、亞鉛、鉛、銀等をも多く產出する。

○ 獨逸の工業

獨逸の工業は、英米と共に歐洲の二大工業國と云はれる程に發達して居る。

獨逸の工業は主として、中部炭田區域に發達し、南部では水力利用の工業が盛んである。

殊に化學工業に於ては、世界一で、アニリン染料の如きは、世界獨歩の地位を占め其他醗造、蒸溜藥品、石鹼、爆發藥、ガラス、肥料人絹等も盛んである。

金屬工業に於ては、鐵、鐵鋼業が特に發達し、その中心ルール炭田地方のエッセンには、世界的な

クルツプ大鐵工所がある。

クルツプ大鐵工所がある。

其他精巧な學術用機械、各種機械、造船、皮革、ゴム製品工業も行はれて居るが、自動車の年産額も十萬數千臺を突破して、世界第四位である。

ルール地方に於ける重工業、織物工業、ザクセン地方の紡績、毛織物、シレジアには製鐵、製紙、製絲業が大いに發達して居る。

次に貿易の概要を示して見ると、大戰前の獨逸は、英、米と共に、世界の三大貿易國として活躍して居たのであるが、大戰で大なる打撃を受け、その後漸く復興したものゝ、世界の經濟恐慌に依つて、再び減少し、ナチス政權の自給經濟政策の確立に依つて、貿易の統制を實行して居るため、その價額に大なるものを見ないけれども、尙有數の貿易國たるを失はない。

輸入品の主なるものは、原料と食料品である即ち。棉花、羊毛、コーヒー、果實、採油用種子、毛皮、小麥等で、輸出は工業加工品、鉄鐵、鋼鐵が首位を占め、機械類、化學製品、石炭、染料、塗料が之に次ぎ、其他紙、革製品、ガラス、陶器、綿織、毛織、絹織、電氣器具、玩具等も相當輸出されて居る。

その取引國としては、蘭、米、英、佛、伊、白、等が擧げられる。我國も相當の物資を獨逸から輸入して居るのである。

現在世界貿易上に占める割合は、總額の八・八で%世界第三位を占めて居る。輸出に於て、九・九%輸入に於て八・〇%と云ふのである。

一時は國內物資の窮乏を告げた獨逸が、漸次國際信用を回復し、國內の産業工業を發達して、國內の需要を満たし、常に出超の黒字を續けて居ることは、ナチス政策の巧妙にも依るが、何としても、一國民全般が、節約生活を實行して、よく働き、國內で作つたものをどんどん輸出する」からである。

昨年度のドイツの對外貿易は、輸出五十九億千百萬マルク、輸入五十四億六千八百萬マルクで、前年に比し、輸出は約二割五分、輸入は約三割夫々の増加である。

出超は四億三百萬マルクで、前年よりは一億マルク減少して居るが、これは必要食料の輸入増加と、特にその値上に基くものである。因に一マルクは邦貨の一圓二、三十錢見當に相當し、その百分の一がペニヒである。

前項獨逸の産業と本項の工業の數字は外務省編獨逸讀本に依る。

ヒットラー 總統

アドルフ・ヒットラーは一八八九年四月三十日、オーストリーイン河畔の小邑ブラウナウに誕生した。父は町の一官吏であつたが彼れが十四歳の時死亡、十六歳にして母を亡くした。

孤獨となつたヒットラーは、職を求めてウィーンに、更にミュンヘンに出た彼れは、餓と闘ふために或は圖案家となり、或は建築の製圖を書いて糧を得たのである。

其後世界大戰に二兵率として従軍、一時兩眼を失明するまでの重傷を負つたが、一九一九年休戦と共に病院を出たヒットラーは、祖國獨逸の混亂を見て、茲に政治家として起つことを決意、一方多數の同志を糾合してナチス黨を結成した。其の間十年の苦闘を重ね、一九三二年には、大獨逸國の總統として、遂に全獨逸へ命令する地位を得たのである。

「やれば出来ないことはない。」これがヒットラー總統の信念である。それにしても、あの窮乏と混亂のドン底に沈んで居た獨逸國を、今日あらしめたヒットラーの偉大さは何としても敬服のほかはない。

殊に吾人の最も尊敬すべき點は、全獨逸國民に對して、「國民的自覺を堅持させた」事である。

前途に希望なく疲れ果てた獨逸國民に對して、大なる希望を與へ、國民は一人残らず、獨逸國の國

民であると云ふ強い信念を持たせたことである。

一九三一年の夏ブリュンニング内閣の議會解散の後を引受けて、三二年七月愈政權を獲得したヒットラー總統は、その第一聲に「我れに四ヶ年の年を與へよ、併して國民は審判せよ」と叫び國民に對しては、

- 一、汝の祖國はドイツと云ふ。何よりもまづそれを愛せよ、言葉よりも行動に依つて！
- 二、ドイツの敵は又汝の敵である。全身をもつて戦へ。
- 三、全ての國民は、たとへ最貧の者と雖もドイツの一部である。汝の如く互に愛せ。
- 四、汝自らのために職務だけを要求せよ、然らばドイツは正義を得ん。
- 五、ドイツを誇りとせよ。幾百萬の同胞が生命を犠牲にした祖國を誇らねばならぬ。
- 六、ドイツを罵る者は、汝とそして祖國のために英靈となつた同胞を罵る者だ。そんな者は鐵拳で打ちのめせ。

七、獨逸が正當な權利を沒收されたら、肉體的に戦ふほかないことを記憶せよ。

八、猶太人的無賴漢となるな！

九、新獨逸語が語られる時、赤面する必要のない様な行動をとれ！

十、明日を信ぜよ、かくてこそ汝は勝利者たり得るのだ。

この言葉は全獨逸の國民を振ひ起たせた。國民は眞に一丸となり、精神力は天を衝いた。これが獨

この言葉は全獨逸の國民を振ひ起たせた。國民は眞に一丸となり、精神力は天を衝いた。これが獨逸を今日あらしめた原動力である。

今、ドイツの文字を日本に代へて、次に書いて見よう。

一、汝の祖國は光輝ある大日本帝國であると云ふことを 何よりも先づ愛せよ。言葉よりも行動に依つて。

二、日本の敵は又汝の敵である。全身をもつて戦はなければならない。

三、大和民族は、たとへ最貧の者と雖も同じ血を持つた同胞であり、日本國の一部である、汝の如く互に愛せ。

四、汝自らのために義務だけを要求せよ、然らば日本はより正義を得ん。

五、日本を誇りとせよ、多數の同胞が血を流し、生命を犠牲にした日本を愛し誇らなければならない。
らぬ。

六、日本を罵る者は、汝とそして祖國のために英靈となつた神を罵る者だ、そんな國民は、全日本國民の名に依つて打のめせ！

七、日本の正當な權利を妨害する者があれば、あくまでこれと戦はなければならない。

八、猶太人の中の無賴の徒が魔手を伸ばして居ることを記憶せよ。

九、一練の將兵が凱旋した時、赤面する必要のない様な行動をとれ！

十、明日を信じ、自らの屬する事に邁進せよ

更にヒットラー總統は政權獲得と共に自己の信念を發表して、大向ふを唸らせた。

それは、ヴェルサイユ條約破棄、賠償金の不拂宣言、ロカルノ條約破棄、ラインランド出兵、再軍備擴充、國際聯盟脫退等であるが、總統が一度び振出した手形は、總て履行済である。

しかも現在の充實した大獨逸の前には何人も手が出ないのである。ロシアも、フランスも、英國も、近くは一滴の血を流さずして、オーストリーを合併し、更にチェッコ國を、そして次に植民地の奮闘に向つて堂々陣を進々て居るヒットラー總統である。

しかも總統が四ヶ年間に爲し逐けた仕事はそればかりではない。

國內の産業を、かつてない迄に振興させ、全ドイツの農村に重壓して居た農家各戸の負債を國家が引受けて、農村を眞に明朗一色に代へ、一切の海外よりの輸入を制限して、今や獨逸國は、自給自足國內の生産に依つて、全獨逸の國民が自活し得るまでになつたのである。更に獨逸の強味はその上、海外への輸出が年々素晴らしい勢ひで増加の傾向にあることである。

今や全歐は、此のヒットラー總統の一舉手、一動に重大關心が集中されて居る。

更に總統は日本と結び、伊太利と握手し、一九三七年より第二次の階段に進出、「我れに尙四ヶ年

を與へよ！」のスローガンを全獨逸の街に、社に、村に、總統の肖像畫と共に掲げて次の偉業に向つ

を興へよ！」のスローガンを全獨逸の街に、辻に、村に、總統の肖像畫と共に掲げて次の偉業に向つて前進して居るのである。

まづ母性を

ヒットラー總統の國力充實の根基は、まづ強い母性を作ることにある。

國家の政治は、まづ正しい國民を得ることである。正しい國民を得るためには、正しい家庭を得なければならぬ。

しかも正しい家庭は、正しき母に依つて作られる。

この掘り下げたヒットラー總統の理念が、益々確實な、獨逸國を建設して居るのである。

これが政治に於ける原則であり、又眞理である。

しかし、こうした本質的な問題は、その國家が運命を賭した場合でない限り、これを眞面目に考へられないものであることは、過去に於ける歴史がこれを證明して居る。

現下我國の實情より見るも等しく、國家は、「まづ正しい國民を得ること」でなければならぬ。正

しい國民を得るためには、まづ正しい家庭を得なければならぬ。正しい家庭は、即ち正しい母に依つて作られる。」ことの、この平凡なる眞理に想到し、かくて、教育の上に、家庭の實生活の上に、母性教育の上に重大關心が拂はれなければならないと思ふ。

國家隆興の基礎は、「まづ強健な母にある。」國民の正しい生活習性もまづ母からである。

かくて強い母、賢明なる母性の作られることに依つて、それから生れる子供の健康、精神が保證され、實生活に於ける、眞の合理化生活が進められることは、これがやがて、一家族の習性となりやがては、全民族の習性となるからである。

ドイツ國民の總てが清潔を重んじること、合理的な家庭生活を實行することも亦、全獨逸の母性が、そうした自覺を持つて居るからである。大戰後の窮乏に屈せず、獨逸國を今日あらしめたのは、實に戦に斃れた勇士の妻であり、母性の力であると云つて過言ではあるまい。

今獨逸に於ける三十以上の婦人の多くは、寡婦である。この母が、残された愛兒を抱いて眞剣に立ち上つたからこそ、かくも獨逸の復興は健實に進んだのである。

母性を無視しては、國家も、政治もあり得ないのである。

世に母の純情程、人を動かすものはない、實に母こそ、次代の偉人を作り健實な次代の國民を作る根基である。

だからこそ、ヒットラー總統は、學校教育以上に母の教育を、そして、家庭の教育に力を注いで居

だからこそ、ヒットラー總統は、學校教育以上に母の教育を、そして、家庭の教育に力を注いで居るのである。

殊に人間の、精神教育、或は生活習性等は就學前の幼兒より、その一步を移植して行かなければならないのであつて、この教育は亦實に家庭のよき母の力に俟たなければならないと思ふ。

次に青少年を

家庭に生れ出でた子供に對し、必要なる教育を與へ、これを國家の有材に養育するのは、國家の義務である。

強よく生れたる子供を、より強く訓練し、より正しい精神の國民とし教育するのは、直接國家がその任にあたらないといけない。

しかも、「強健な國民、正しい國民」たるの教育は、これをまづ青少年に對して、積極的に行はなければならないことは、今更云ふまでもないことである。

母の次には、その生れた子女を國家が預つて教育する。これが、ヒットラー總統の重要關心事であり、自らの精神、國民としての理想を、全國民の頭、全國民の心臓、に移植して、これを正しく導く

ところに、現在の獨逸が生れ、明日の獨逸、次の大獨逸國が永劫に建設されるのであることを強く自信する總統である。

だからヒットラー總統は、青少年子女に對して特別な訓練するのである。

大戰當時栄養不良で、眼も見へなかつた様な獨逸の子供が、今はヒットラーの青少年團に入つて、筋骨共に逞ましく隆々とした青年となり。丸々と太つた少年子女となつて居るのに不思議はない。

ヒットラー青少年團は、今やフオン・シーラハを團長に全獨逸の青少年を團員とする一大組織となり、ナチス政府は、國民の義務遂行上欠くべからざる徳性の培養、信念の確立、實力の啓培、體位の向上を目標に進み、現在團員は六百萬の多きをなして居る。

十歳より十四歳迄に至る少年を、少年團に入團させ、十四歳より十八歳迄の者を青年團に入團させて居る。

又女子は、「獨逸女子青年團」があるが、これはナチス女子青年團とはせず、政治的色彩を冠しないで、獨逸國の女性として取扱ひ、年齢の如きも十四歳より二十一歳迄とし男子より三年延長せられて居る點は、獨逸のよき母性を作り出すために重大關心が拂はれて居ることを、物語つて居る。更に獨逸女子青年團には十歳より十四歳迄の少女團が設けてあり青年は、十八歳より二十五歳迄の内に半ケ年間一定の團體訓練所に入所して、勞働奉仕をしなければならぬことになつて居る。

かくて獨逸の山や、沼が沃土の耕作地として生れ變るのである。

かくて獨逸の山や、沼が沃土の耕作地として生れ變るのである。

祖國獨逸を開發するために、國民が働くのである。自國の土地に、自らの力で鉄を入れて耕すのである。

かくて耕作された土地に、各自、國民が常食する食糧が採掘せられる。國民がこの事實に徹しなければ、いかに愛國の言辭を弄しても眞に國を愛して居るとは云はれない。

「言葉でなく行ひの上に、愛國の熱情を現はす。」これはヒットラー總統が常に全獨逸の青少年に教へる言葉である。其他青少年團、女子團は、各々體育を練り、集團運動を行ひ、或は農村に、天幕生活を実行して自然に親しみ、健康を増進するほか團員は「獨逸の勞働戦線」と協力して、職業の相談就職斡旋、職業補充教育、農村奉仕等が行はれ、毎年全獨逸に於て、團員は、職業競技を行ひ、各口が實生活上に於ても、より、職業的に熟練することを教へられて居るのである。

ヒットラー總統は、この獨逸の青少年に對して、次の如く叫びかけて居る。

「我が獨逸青少年諸君！諸君は未來の獨逸である。諸君は我等が曾て將來の獨逸を期待した事を知らねばならない。諸君はまだ若くて、人生の相背馳する諸影響を體驗して居ない。

諸君は將來決して離反する事がない様につちりと團結しなければならぬ。諸君がもし放棄しようと思へなければ、諸君の有するこの友情と團結とを何人と雖も諸君から奪ひ取ることは出来な

い。かくてこそ、諸君は獨逸青少年として我等の大なる希望となるのであらう。親愛なる青少年諸君！諸君は獨逸の生きた保證人であり、將來の生きた獨逸である。

空虚な概念、蒼ざめた命題でなく、諸君は我等の血の血、精神の中の精神であり、我が國民の永續する生命である。」と

日本の青年も亦斯ふした愛情に満ちた言葉を、日本の指導者から聞きたいであらう。

日本の青年團は、彼の山本瀧之助氏の指導に依つて、世界一早く、今から四十年前も前に生れて居るのである。今こそ全日本の青年が一團に融合する時が來たのである。

親愛なる日本の青少年諸君！諸君は前記ヒットラー總統の叫びを、今一度讀み直して、各自の心に觸れるものを、諸君のお互の精神の中に、そして血の流れの中に、日本の青年としての、或るものをしつかりと自覺しなければならぬ。

祖 國 日 本 の た め に

われわれは今迄一つの物を消費するにも、それが國家の貴重なる物資だと心得て、これを大切にしたことが、あるであらうか。

自分の健康を向上させることが、自國の國力を増すことであると考へて健康につとめたことがあるであらうか。

又子供を育てるにも、強い國民を作るのだと云ふ自覺を持つて、我が子を養育した母親が果してどれだけあるであらうか。

總てが單なる自己の、自家の立場に於て考へられはしなかつたであらうか。

甚しきに至つては、過去の學校教育に、果して次の國民を教育しつゝあると云ふ嚴然たる態度が、あつたであらうか、等しく過去の政治家にその意識があつたであらうか。國家を忘れ、單に個人が中心になつて居た、今迄の社會は、自己を中として、進んで來た。

多くの政治家が、教育家が、學者が、大學教授が、宗教家が、役人が、商人が、青年が、子女が、そして家庭も、母も、そうであつたのではあるまいか、しかし、われ如何に利益すべきかと云ふ自由主義の社會は、それは融合の社會ではなくて、反目離反の社會である、協調の社會でなく争鬭の社

會である。

そして、社會主義が國家を否定し、科學萬能の社會が國體をさへ否定せんとするのである。精神が抜けて文化が退歩し、これに代つて物質文明が現はれたのである。

文明は、しかし、一個の技術でしかない。技術の社會は單なる理論と數字の社會である。

又物質の社會は物質の量に依つて、より多くを持つ者が、より尊いと云ふ社會となつたのである。總ては正しい道から横道へ、過去の日本は擧げて迷路に突入して行つたのであつた。

この恐るべき過去の思想を、吾人は今度こそ完全に擊破して、眞に正しい人間の生きるべき社會を奪回しなければならない。

外に大敵を控へて戰つて居る祖國日本は、亦内に對しても、祖國本來の思想を奪回すべき重大な任務のあることを國民は等しく自覺しなければならない。

個人の考へから國家の立場へ、一家庭の考へから、國家の一單位としての家庭へ、そして、物質の社會から、より美しい精神を尊しとする社會へ、理論より實際を、頭上よりも、まづ足下から、進む社會を作らなければならない。

今や全日本の國民は、各々が、國民の一員であると云ふ確固たる自覺の上に起つて、然る後にまづ一步から出直さなければならない時が來たのである。

此處に立脚すれば、争鬭の社會は、自ら協調融合の社會となり、「總ての國民は、總ての國民のた

此處に立脚すれば、争鬭の社會は、自ら協調融合の社會となり、「總ての國民は、總ての國民のために」一丸となり得る國家社會が、實現するのである。

しかもそれは、單なる事變中の寸時の現象であつてはならない。

お互は常に國家のために生産し、國家のために學び、國家のために鍛へ、そして國家のために働いて居ることの大なる喜びと信念をもつて、祖國日本の大目的に飽くまで協力しなければならない。

「國家に反する者は、まづ自らに反する者である。」と同時に現下の時局に於て我が國策に従はな者は實質に於て、敵國に味方する者である。と云ふも過言ではない。

戦はこれからである

上海が陥ち、南京が攻略され、續いて徐州が陥落した。

しかし國民はこれをもつて、戦が終りを告げるものであると思ふのは尙早い。

抗日の本據が上海から、南京に、南京から香港へと移つた今日の國際情勢は、單に支那のみを相手の戦でないことは、先日の政府の聲明でも明かであるが、蔣介石の蔭の形に添ふ如く、彼れの身邊に某國の要人が附隨して居ることを知る者は、今同の事變の性質がより明らかとなることと思ふ。

嚴軍帥の旗軍「は時いし苦ほな」「よ見を國の長敵都らたつあが喜いし苦」
。なるれ忘を事る居てれら守に意天。いならなほてし汚を名の軍先「げ仰を
。れくてつ思とだ社神國端は時ふ會度今

ソ聯に多額の金を貸して、浦鹽に對日軍備を強化させた國がある。

支那へ彈丸を送り四億の民衆を抗日の一路へ導びいた國もある。

殊に日本が今日の聖戰に一度起つて威力を發揮するや、諸國は自國の能ふ限りの通信報道網を利用して世界の輿論をして、對日惡化へと誘導することに、あらゆる手段を弄して居るのである。各國は今後と雖も、手を代へ品を代へて、その共同力を利用して、或は思想戰に、經濟戰に、一層對日攻撃に乗り出すものと思はなければならない。

國民が眞に舉國一致、堅忍持久の大覺悟を持たなければならない理由も亦此處にある。

しかし、國民は皇軍の作戰について少しも心配する必要はない。

國民は常に次の二つの事柄を護つて居ればよい。

一、今後如何なる事態が発生しても斷じて動することなく挫ぢけないこと。

二、資源、物資を節約し合理的な生活を實行し、よく政府の命に従ふこと。

祖國日本は如何なる場合にも斷じて挫けてはならないのである。

銃後の國民が眞に一致協力、この銃後の鐵壁を亂しさへしなければ、戰はいかに困難であつても、敗戰國の汚名を着る様な我が陸海兩軍ではない。

しかして、その兩軍の活動を遺憾なく發揮せしめるものは、一に銃後國民の協力如何にかゝつて居ることを全國民は、一人残らず胸に抱いて居なければならない。

(完)

こはれに皇軍の南口の戰ひに行はれたる部隊の下部の圖で示る。
 銃後亦この覺悟が必要かなうか。

愛讀者諸賢へ！

眞剣な勞働と共に、充分の休養を攝り、人生を、たのしく、なごやかに、保健衛生に注意して、からだを強健に、そして、消費物資は極力無駄を省く、と云ふことは、これは天意に従ふことであり、亦、絶對の人道でもあると思ふ。

従つて多少共本書に良い事があれば、採つて以て、これを日常生活の上に移し、我が家の、我が店の、我が會社の、學校の、「生活、經營上の習性」として頂くことは、その事自體が、總てのものを幸福にし、祖國日本を幸福にするものであり、國民が各々正しい生活習性に徹することは、祖國へ盡す第一歩であると思ふ。

著

者

本書を編めるにあたって参考とした文献を左に掲げて謝意を表して置く。

一、祖國を顧みて

小原稔生氏著

一、わが闘争

ヒットラー

(大久保康雄氏譯)

一、獨逸讀本

外務省情報部編

一、週報(第六十九號)

内閣情報部編

一、ナチス文化の統制

近藤春雄氏著

一、獨逸精神

村上菊麿氏著

一、獨逸の國民

フォン・ファアゼル氏著

一、他山の石

マネーデメント社

昭和十三年七月十五日 印刷
昭和十三年七月二十日 發行

「學べ／獨逸國民生活」

定價 金 八 拾 錢

東京市杉並區荻窪一丁目一七四

著者 森 崎 善 一

東京市麻布區我善坊町三四

發行兼 印刷者 印 牧 秀 雄

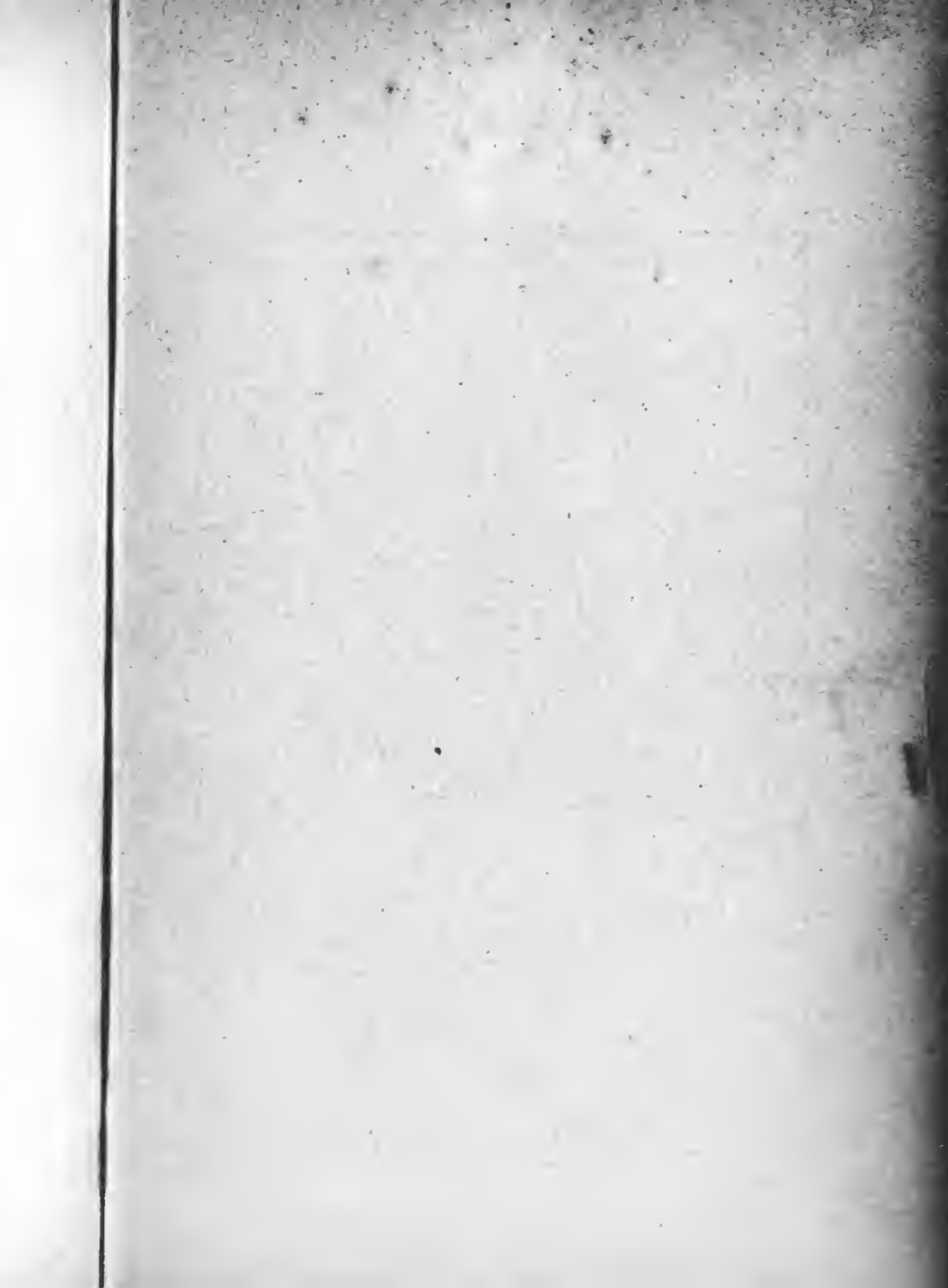
東京市芝區西久保八幡町二七

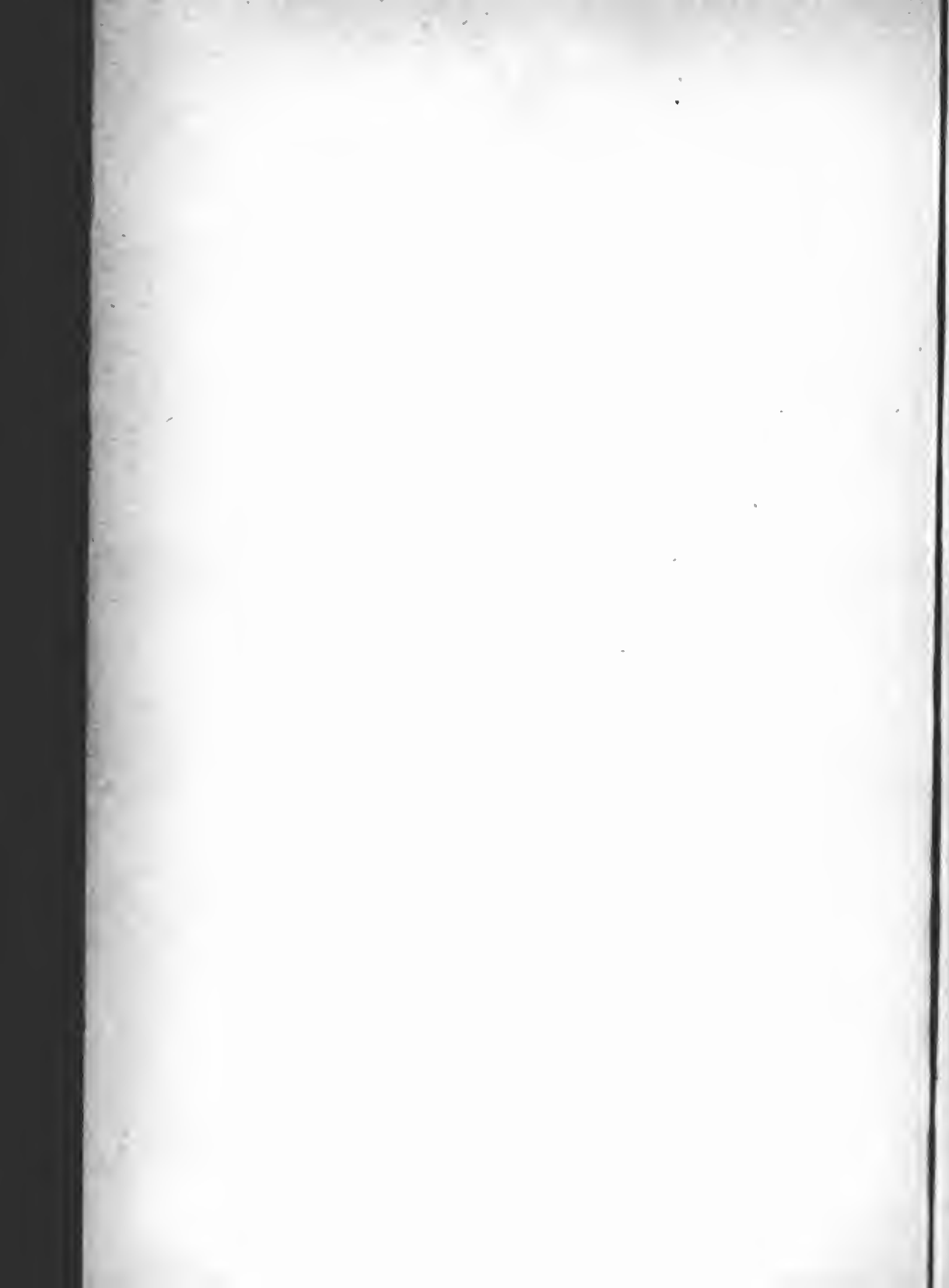
版權所有 印刷所 共 榮 印 刷

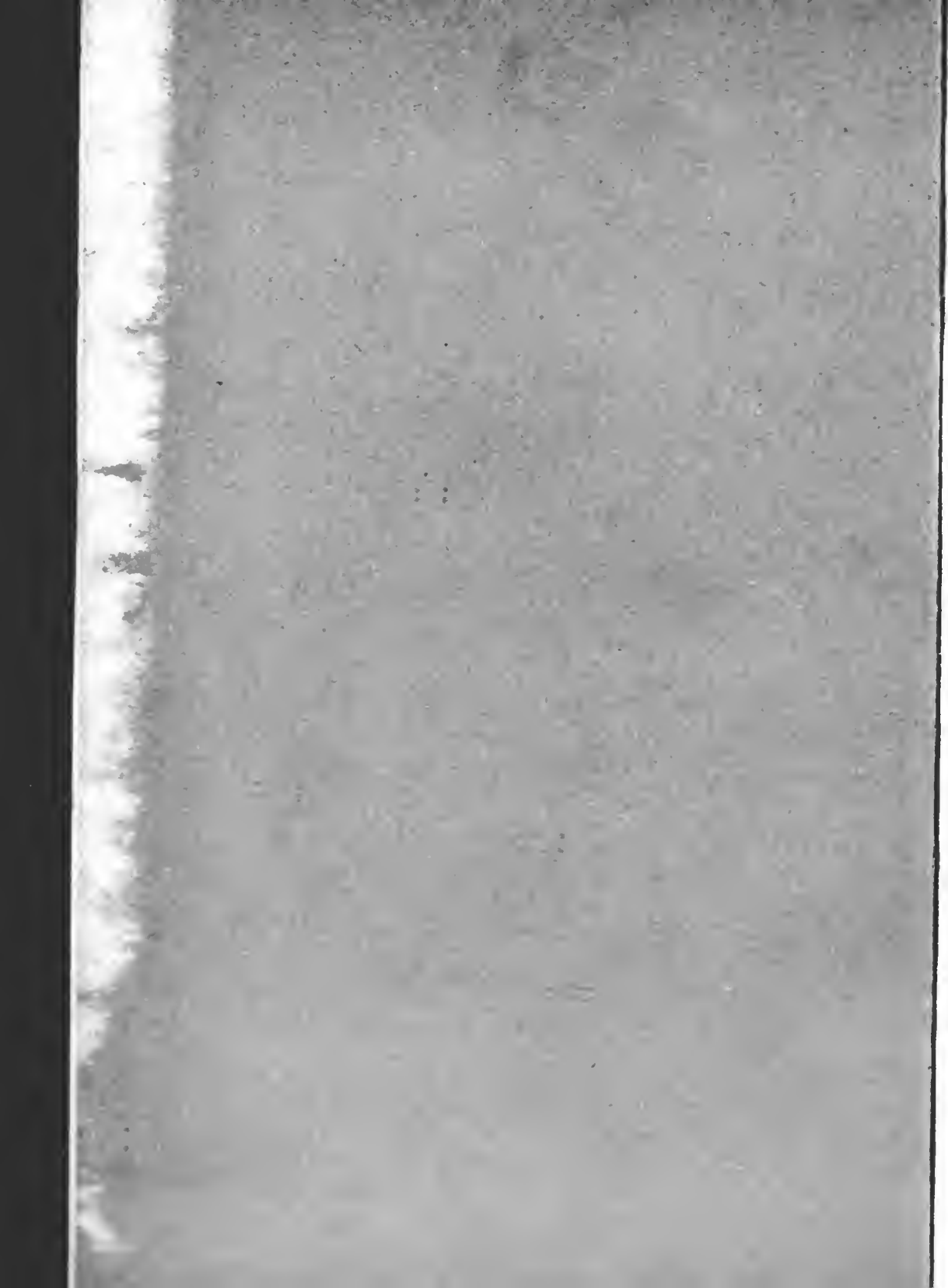
發 行 所

千 峰 書 房

東京市芝區西久保八幡町二六四番地
電話 二二二七番
電話 一六二四番









千峰書房發行